
仮面ライダー&リリカルなのは - 継承者と魔法少女 -

ディケイド・ストライク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー&リリカルなのは - 継承者と魔法少女 -

【Nコード】

N3402V

【作者名】

ディケイド・ストライク

【あらすじ】

突然現れたショッカー帝国、それに対抗すべく12人の仮面ライダーが戦い、全ての力を使ってショッカー帝国を封印する。そして半年後、海鳴市に2人の転校生が現れ魔法少女達と出会う時、新たな物語が始まる。

ブローグ 12人の仮面ライダーVSショッカー帝国（前書き）

久しぶりの新作です。

是非、読んでみてください。

ブローグ 12人の仮面ライダーVSショッカー帝国

とある世界

そこでは、様々な怪人とそれぞれの世界の仮面ライダーが戦っていた。

クウガU「はあー!!」

グロンギをアルティメットキックで蹴り飛ばす、仮面ライダークウガ アルティメットフォーム（クウガU）

アギトS「ハッ!!」

アンノウンをシャイニングクラッシュで切り裂く、仮面ライダーアギト シャイニングフォーム（アギトS）

「SHOOT VENT」

龍騎S「はあー!!」

ミラーモンスターをメテオバレットで撃ち抜く、仮面ライダー龍騎 サバイブ（龍騎S）

「103」

「Blaster Mode」

ファイズB「はあー!!」

「Exceed Charge」

オルフェノクをフォトンバスターで撃ち抜く、仮面ライダーファイズ
ブラスターフォーム（ファイズB）

「SPADE TWO THREE FIVE SIX」

「STRAIGHT FLASH」

ブレイドK「ウェイ!!」

アンドットをストレートフラッシュで切り裂く仮面ライダーブレイド
キングフォーム（ブレイドK）

装甲響鬼「鬼神覚声!!」

魔化魍を音撃刃・鬼神覚声で切り裂く仮面ライダー装甲響鬼（装甲響鬼）

「KABUTO-POWER THEBEE-POWER DRA
KE-POWER SWORD-POWER」

「All Zector Combine」

カブトH「マキシマムハイパーティーン!!」

「Maximam Hyper Typhoon」

フォームをマキシマムハイパーティーンで切り裂く仮面ライダーカ

ブト ハイパーフォーム（カブトH）

「Charge and up」

電王SC「……俺達の必殺技！！」

イマジンを超ボイスタースラッシュで切り裂く、仮面ライダー電王 スーパーライマックスフォーム（電王SC）

キバット『ウエイク、アップ！！』

キバE「はぁー！！」

ファンガイアをファイナルザンバット斬で切り裂く、仮面ライダーキバ エンペラーフォーム（キバE）

ショッカー戦闘員「イー！！」

ライダー達が怪人達と戦っていると何処からか大量のショッカー戦闘員、空中にはクライシス要塞が現れる。

アギトS「今度は戦闘員ですか。」

ファイズB「キリがないぜ！！」

ショッカー戦闘員と戦うライダー達。

「FINAL - ATTACK - RIDE.....DE、DE、DEC

「ADE」

「ディケイドCF「はあっ!!」」

クライシス要塞に向かって強化デメンションキックを放つ仮面ライダーディケイド コンプリートフォーム（ディケイドCF）

ディケイドCF「鳴滝の奴、とうとう狂ったか!？」

ディケイドCFはショッカー戦闘員をライドブッカー ソードモードで切り裂いていく。

そこにドーパントやヤミーが現れ、ライダー達に襲いかかるうとするが。

「CYCLONE MAXMAM - DRIVE」

「HEAT MAXMAM - DRIVE」

「LUNA MAXMAM - DRIVE」

「JOKER MAXMAM - DRIVE」

『プ・ト・ティラノ、ヒッサーツ!!』

WCJX「『ビッカーファイナリジョン!!』」

オーズ「せいやー!!」

ビッカーファイナリジョンとストレインドウムでドーパント

やヤミーを吹っ飛ばす、仮面ライダーW サイクロンジョーカーエクストリーム(WCJX)、仮面ライダーオーズ プトティラコンボ(オーズ)

ディケイドCF「ダブル、それにオーズか!？」

WCJX「ディケイド、力を貸そう!!」

オーズ「まさか、ヤミーまで出てくるなんて!!」

WCJXはプリズムソードでオーズはメダガブリューでショッカー戦闘員を切り裂いていく。

鳴滝「ディケイド、そしてライダー達よ此処が貴様達の墓場だ!!」

何処からか鳴滝が現れその後ろには大量の怪人達、空中には数十のクライシス要塞がライダー達に向かって来る。

WCJX「まだ、居るのかよ!!」

装甲響鬼「少しキツいな。」

怪人達に押されていく仮面ライダー達。

鳴滝「どうだディケイド、これが貴様達ライダーを倒すために組織されたショッカー帝国の力だ!!」

ディケイドCF「鳴滝の奴、とことん狂っているぜ!!」

ディケイドCFが鳴滝に向かって切りかかろうとするが。

ディケイドCF「ぐっ!!」

突然、鳴滝の前に黒い霧が現れディケイドCFを吹っ飛ばす。

アギトS「何だ!？」

龍騎S「鳴滝の仲間か？」

アギトSと龍騎Sはそれぞれの武器を構えて、黒い霧を見る。

鳴滝「我が主、遂に仮面ライダー達の最後です。」

鳴滝がそう言うと、黒い霧は人の形に変わっていく。

クウガU「凄い闇を感じます。」

ブレイドK「このままだと、他の世界も危ないぞ!!」

ファイズB「どうしたらいいんだよ!!」

ライダー達は現れた闇に危機感を感じていた。

ディケイドCF「こうなったら、俺達の力でアイツを封印するぞ!!」

電王^{モモ}SC「何だと!？」

キバE「土さん、本気で言っているんですか!？」

ディケイドCF「ああ、ショッカー帝国の奴等をこの世界ごと封印するんだ！！」

カブトH「門矢、そんな事をすれば俺達はライダーとしての力を失ってしまうぞ。」

装甲響鬼「天道の言うとおりだ、俺達がライダーの力を失えば、誰が世界を守るんだ！？」

ディケイドCF以外のライダー達はディケイドCFの提案を反対するが。

クウガU「大丈夫ですよ、必ず僕達の力を受け継ぐ人が現れますよ。」

クウガUはそう言うと、クウガUの体が金色に輝きだす。

アギトS「そうですね、五代さんの言う通りです。」

龍騎S「きっと、俺達の力を受け継ぐ人が世界を守ってくれるはずだ。」

アギトSと龍騎Sはそう言うと、金色に輝きだす。

ファイズB「受け継ぐ人が、世界中の人々の夢を守り」

ブレイドK「戦えない人の為の剣になってくれるはずだ。」

ファイズBとブレイドKも、金色に輝きだす。

装甲響鬼「それじゃ、俺達は奴を封印するか。」

カブトH「ああ」

装甲響鬼とカブトHも、金色に輝きだす。

電王SC（良太郎）「モモタロス、後はお願い。」

電王^{モモ}SC「……………良太郎」

キバE「人が奏でる音楽を守るために。」

電王SCとキバEも、金色に輝きだす。

WCJX「フィリップ……………」

WCJX『解っているよ、翔太郎。』

オーズ「未来のために!!」

WCJXとオーズも金色に輝きだす。

鳴滝「何をするつもりだ!!」

ライダー達を見た鳴滝は焦りだす。

ディケイドCF「鳴滝、貴様等をこの世界ごと封印してやるぜ!!」

ディケイドCFは金色に輝きだすと、12人のライダー達の輝きは徐々に周りを包んでいく。

鳴滝「おのれー！ー、ディケイド！！！！！！！！」

鳴滝は灰色のオーロラを出現させ、オーロラの中に消え去った。

そして、ショッカー帝国は仮面ライダー達の一つの世界ごと封印された。

プロローグ 12人の仮面ライダーVSショッカー帝国（後書き）

次回、『通りすがりの転校生』

翔夜「次回から、俺の登場だな。」

雄司「俺達だろう。」

感想を待っています。

第1話 通りすがりの転校生（前書き）

時間軸は闇の書事件から四年後の海鳴市が舞台です。

第1話 通りすがりの転校生

ライダー達がショッカー帝国を封印してから半年後

「お兄ちゃん、起きてください。」

「後、10分だ。」

俺は妹に起こされていた。

「寝ぼけないでください、転校早々に遅刻するつもりですか?」

「解った、起きるよ。」

俺は目を覚まし、着替え始める。

そう言えば、まだ自己紹介をしていないな、俺の名前は真導しんどう 翔夜しょうや、
自分で言つのもアレだが文武両道の天才中学1年生。

「行くよ、お兄ちゃん。」

こっちは俺の妹の真導 ナツミ、現在小学3年生。

「二人とも、行ってらっしゃい。」

この人は俺とナツミの祖父の真導 栄市郎

、俺とナツミの保護者であり、真導写真館の館長だ。

翔夜「行ってくるぜ、爺さん。」

ナツミ「お爺ちゃん、行ってきます。」

翔夜とナツミは写真館から出て行く。

俺達は一週間前、ある事情で祖父の暮らしている海鳴市にやって来た。

翔夜「ナツミ、新しい学校には慣れたか？」

ナツミ「うん、新しいお友達も出来て楽しいよ。」

ナツミは三日前から私立聖祥小学校に通い始めた。

ナツミ「お兄ちゃんも、今日から学校だね。」

翔夜「そうだな。」

俺も今日から海鳴中学校に通い始める。

翔夜「そう言えば、雄司はどうしたんだ？」

ナツミ「雄司さんなら、一時間前に学校に向かいましたけど。」

翔夜「アイツ、場所が解らないのに大丈夫なのか？」

ナツミ「雄司さんだから、大丈夫だと思うけど。」

俺達が言っている雄司って奴は、どうしようもないバカだ………

雄司「誰がバカだよ!？」

ナツミ「雄司さん？」

翔夜「お前、俺達より一時間も早く学校に行った筈だ？」

雄司「迷っていた。」

翔夜／ナツミ「やっぱり。」

翔夜とナツミは呆れた目で雄司を見る。

コイツは冴島さえしま 雄司ゆうじ、どうしようもないバカで俺のパシリみたいな奴だが、仲間の事を一番に考えている奴だ、今は写真館の居候だけだな。

雄司「翔夜、お前は俺に対して恨みでもあるのか？」

翔夜「さあな」

雄司は何故か辛そうな顔をするが、翔夜は知らん顔をしていた。

ナツミ「お兄ちゃん、雄司さん、私は先に行くね？」

雄司「頑張つてね、ナツミちゃん。」

翔夜「気をつけろよ。」

ナツミ「ハイ。」

ナツミは翔夜と雄司から離れ、聖祥大附属小学校に向かった。

雄司「俺達も行こうか？」

翔夜「お前、場所が解らないだろう？」

雄司「そうでした。」

翔夜「やっぱりバカだな。」

雄司と翔夜も海鳴中学校に向かっていた。

なのは「今日から、このクラスに転校生が来るの？」

フェイト「うん、さっき職員室で聞いたの。」

はやて「二人らしいで。」

すずか「楽しみだね。」

アリサ「どうでもいいわよ。」

高町　なのは、フェイト・Ｔ・ハラオウン、八神　はやて、月村
すずか、アリサ・バニングスは教室で転校生の話をしていた。

担任「皆さん、今日から転校生が二人来たので紹介します。」

なのは達の担任がそう言うと、翔夜と雄司が教室に入ってくる。

翔夜「真導　翔夜だ。」

雄司「冴島　雄司です、みんな宜しくな。」

翔夜は無愛想に挨拶し、雄司は笑顔で挨拶する。

すずか「何か、１人は良い人だけど……………」

アリサ「絶対バカだね。」

はやて「もう１人も無愛想な奴やな。」

フェイト「そうだね。」

なのは（でも、カッコいいな。）

約一名、少し顔を赤くしながら翔夜を見ていた。

そして、休み時間

「真導君、冴島君、何処から来たの？」

「前の学校では、部活をやっていたの？」

「どうして、この学校に？」

雄司「とりあえず、みんな落ち着いて！！」

翔夜「やれやれだな。」

雄司はクラスの生徒からの質問責めに慌てるが、何故か落ち着いていた翔夜は何処からか赤いトイカメラを取り出す。

翔夜「とりあえず、撮るか。」

翔夜はクラスの生徒達の写真を撮っていく。

雄司「また、始まったか」

雄司はそう呟くと、翔夜を見る。

フェイト「写真が趣味みたいだね。」

なのは「そうみたい。」

フェイトとなのはも翔夜を見ていた。

帰り道

翔夜「帰ったら、現像しよう。」

雄司「全く、よく撮るよ。」

翔夜と雄司は帰り道を喋りながら歩いていた。

翔夜「あれは！」

翔夜は何かを見つけると、突然走り出す。

雄司「翔夜！？」

海鳴市 廃工場

アリサ「どうして、こうなったの？」

すずか「私達、近くを通っていただけなのに。」

ゲルニユートA「ウルサイぞ、ガキ共！！」

ゲルニユートB「我々を見たからには、タダでは帰さないぞ！！」

廃工場ではアリサとすずかがゲルニユート達に捕まっていた。

シルバラ「さーて、ガキ共を潰すか？」

ゲルニユート達のリーダー格のシルバラは金棒を振り回しながらアリサ達に近づく。

アリサ「やめてー!!」

すずか「どうして、こうなるの!?!」

アリサとすずかは泣き出してしまいそうになる。

シルバラ「さーて、どんな音で潰れるかな?」

シルバラがアリサ達に金棒を振りかざそうとしたその時……

ゲルニユートC「ぐわー!!」

1体のゲルニユートが吹っ飛ばされる。

ゲルニユートD「誰だ!!」

ゲルニユート達が吹っ飛ばされた場所を見ると。

翔夜「ミラーモンスターに鬼の兄弟の片割れか。」

翔夜が歩いてくる。

すずか「アナタは!?!」

アリサ「無愛想な転校生!?!」

翔夜「無愛想って俺は真導　翔夜、そして」

翔夜は鞆から白の部分が赤に変わったディケイドライバーを取り出し、腰に装着する。

シルバラ「貴様、何者だ!？」

翔夜「通りすがりの転校生だ!!」

翔夜はライドブッカーから一枚のカードを取り出す。

翔夜「変身!!」

「K A M E N - R I D E D E C A D E S T R I K E」

翔夜はディケイドライバーにカードを装填すると、電子音と共に灰色の仮面とスーツを纏い、11のシルエツトが重なると同時に数枚のプレートが突き刺さり鮮やかな黒と赤が仮面とスーツに浮かび上がり、エメラルドグリーンの眼が輝き、仮面ライダーディケイド Ver ストライク（ディケイドS）に変身する。

ディケイドS「その心に刻んどけ!!」

ディケイドSはライドブッカーをソードモードにして構える。

第1話 通りすがりの転校生（後書き）

オリジナルライダー紹介

仮面ライダーディケイド Ver ストライク

ディケイドのマゼンタの部分が赤になった姿、クウガからオーズまでのライダーにカメンライド出来るが、まだファイルフォームライドや他のライダーのファイルアタックライドが使えない。

変身者は真導 翔夜。

第2話 始まる戦い（前書き）

今回から小説の書き方を変えました。
御了承ください。

それでは仮面ライダー & a m p ; リリカルなのは、始まります。

第2話 始まる戦い

「はぁ!!」

ディケイドSはライドブッカー ソードモードでゲルニユート達を切り倒していた。

「何なの、あの転校生？」

「突然変身して、あの怪人達と戦っているし。」

翔夜の変身に驚くアリサとすずか。

「くっ、キリがないな！」

ディケイドSはゲルニユート達を切り倒すが、数はあまり減っていなかった。

「ミラーモンスターなら、コレだろう。」

ディケイドSはライドブッカーから一枚のカードを取り出し、ディケイドライバーに装填する。

「K A M E N - R I D E..... R Y U K I」

電子音と共に、ディケイドSの姿が仮面ライダー龍騎（DS龍騎）に変わる。

「姿が変わった!？」

「一体、どうなっているの?」

デイクイドSのカメンライドに驚くアリサとすずか。

DS龍騎「さて、一気にいくか。」

「ATTACK・RIDE……STRIKE VENT」

DS龍騎はドラゴンクローを召還し構える。

「はああ……はあっ!!」

DS龍騎はドラゴンクロー・ファイヤーでゲルニユート達を焼き尽くし、ゲルニユート達は爆発する。

「お前か、デイクイドの継承者は?」

シルバラはに金棒を振り回しながらDS龍騎に尋ねる。

「継承者、何の事だ?」

DS龍騎は何の事が解らなかった。

「何だ知らないのかよ、とにかくお前を潰す!!」

そう言うシルバラは金棒を構え、DS龍騎に突っ込んでくる。

「ATTACK - RIDE..... SWORD VENT」

DS龍騎はドラグセイバーを召還し、シルバラの攻撃を受け止めるが。

「うおりゃー!!」

「ぐっ!!」

シルバラの一撃を受け止めきれずにドラグセイバーを折られ、DS龍騎は吹っ飛ばされ壁に叩きつけられる。

「くっ、コイツ馬鹿力かよ!?!」

元の姿に戻ったディケイドSは一枚のカードを取り出す。

「鬼には鬼だな。」

「KAMEN - RIDE..... HIBIKI」

ディケイドSはカードをディケイドライバーに装填すると、仮面ライダー響鬼（DS響鬼）に変わり、更に一枚のカードをディケイドライバーに装填する。

「ATTACK - RIDE..... ONIBI」

「はあっ!!」

DS響鬼はシルバラに向かって鬼火を放つ。

「ぐっ!!」

シルバラは金棒を盾にして鬼火を防ぐ。

「ATTACK - RIDE..... ONGEKIBOU - REKKA」

DS響鬼は音撃棒 烈火を召還しシルバラに向かって突っ込む。

「小癪な!!」

「ハッ!!」

シルバラは金棒でDS響鬼を叩きつけようとするが、DS響鬼は音撃棒 烈火でシルバラの攻撃を受け流す。

「はあっ!!」

「ぐっ!!」

DS響鬼は音撃棒 烈火でシルバラを何度も叩き徐々にシルバラを後退していく。

「そろそろ、終わらせるか。」

DS響鬼はディケイドSに戻り、一枚のカードを取り出すが。

「やめた!!」

突然シルバラが武器をしまい、目の前に灰色のオーロラが現れる。

「お前、どういってもりだ!」

「今お前を倒すのも良いが、俺は大事な任務が有るからな。」

シルバラはそう言うと、灰色のオーロラの中に消えていく。

「あの野郎、ふざけやがって!!」

ディケイドSはそう言うと変身を解き、翔夜の姿に戻る。

「元に戻った?」

「もう、どうなっているの?」

ずかとアリサは目の前の出来事にただ驚いていた。

ディケイドSがシルバラと戦っていた頃、廃工場の近くでは1人の眼鏡を掛けた男性がディケイドSの戦いを見ていた。

「遂にシヨッカー帝国が動き出したか。」

すると男性の目の前に灰色のオーロラが現れ、男性は灰色のオーロラの中に入っていく。

「後は頼むぞ、翔夜。」

男性はそう言うと、灰色のオーロラの中に消えていく。

「アナタ、一体何者なの？」

「真導さん、正直に教えて下さい。」

「ち、ちよっと!？」

翔夜はアリサとすずかの質問責めにあっていた。

「あの化け物は一体何なの？」

「真導さん、アナタが変わったあの姿は？」

「ふ、2人共!？」

「それに、他の姿になったし？」

「真導さん、あのオーロラは？」

「頼むから、落ち着いてくれ!!!」

「は、ハイ!」

翔夜の叫びで黙る2人。

「とりあえず、あの化け物はミラーモンスターと鬼の兄弟で俺が変身したのは仮面ライダーディケイドだ。」

「ミラーモンスター？」

「仮面ライダーディケイドって？」

翔夜は二人に質問に答える。

「とにかく、今日の事は忘れる。」

翔夜はそう言っていると、ダッシュですずか達から離れていく。

「ちよっと、真導さん？」

「まだ質問が!？」

すずかとアリサは翔夜は呼び止めようとするが、既に翔夜は二人の視界から見えなくなっていた。

その夜、真導写真館では

「遂にシヨッカー帝国の奴らが動き出したか。」

「ああ、まさかこの街で戦う事になるしな。」

翔夜の部屋で翔夜は昼間の出来事を話していた。

「それより翔夜、お前クラスメイトの前で変身したのか？」

「ああ、別に大丈夫だろう。」

「いや、大丈夫じゃ無いだろう。」

「とにかく、明日はフォローを頼む。」

「マジで！！！！！！」

雄司の叫びが写真館に響いた。

第2話 始まる戦い（後書き）

次回、仮面ライダー&リリカルなのは

すずか

「冴島君、真導君の事を教えて欲しいの。」

アリサ

「素直に喋りなさい!!」

雄司

「翔夜の奴、何処に居るんだ!!!!!!」

ディケイドS

「アンノウンには、コイツだろう!!」

なのは

「時空管理局です、武器を捨てて下さい。」

ディケイドS

「あれって、高町にテストロッサ？」

フェイト

「この声は？」

なのは

「真導君？」

次回、『出会いは突然やってくる』

全てを破壊し、全てを守れ！！

第3話 出会は突然やってくる（前書き）

今回は短いです。

それでは仮面ライダー & a m p ・リリカルなのは、始まります。

第3話 出会いは突然やってくる

翔夜と雄司が海鳴中学校に転校してきた次の日

海鳴中学校

「冴島君、真導さんの事を教えて欲しいの。」

「あの無愛想な転校生は一体何者なの？」

「ち、ちよつと、二人共落ち着いて。」

朝から雄司は昨日の事をすずかとアリサから聞かされ、二人から質問責めにあっていた。

（やっぱり、人前で変身するなよ翔夜。）

雄司は心の中で、何故か学校に居ない翔夜の事を少し恨んでいた。

「素直に喋りなさい！！」

「やりすぎだよ、アリサちゃん。」

アリサは某刑事ドラマのごとく雄司を取り調べをしようとするが、アリサにツッコまれる。

「翔夜の奴、何処に居るんだ！！！！」

雄司の叫びが教室に響く。

海鳴市 とある公園

「まさか、登校中にアンノウンに出会すとはな。」

その頃、翔夜が変身したディケイドSは複数のアントロードとオクトパスロード モリペス・オクティペス（オクトパスロード）と戦っていた。

「ATTACK - RIDE..... BLAST」

「はあっ!!」

ディケイドSはディケイドブラストでアントロードを数体撃ち抜くと、ディケイドSは一枚のカードを取り出す。

「アンノウンには、コイツだろう!!」

ディケイドSは一枚のカードをディケイドライバーに装填する。

「KAMEN - RIDE..... AGITO」

ディケイドSは仮面ライダーアギト グランドフォーム（DSアギトG）に変わる。

「はっ.....はあっ!!」

DSアギトGはパンチャキックでアントロード達を押していく。

「FORM - RIDE..... AGITO・FLAME」

DSアギトGはフレイムフォーム（DSアギトF）に変わり、フレイムセイバーを取り出し構える。

「はあっ!!..」

DSアギトFはフレイムセイバーでアントロード達を切り裂き、アントロード達は爆発する。

「後はタコだけか。」

「貴様がアギトか!？」

DSアギトFはディケイドSの姿に戻り、オクトパスロードはディケイドSに襲いかかるが。

「違うな、俺は通りすがりの仮面ライダーだ。」

ディケイドSはオクトパスロードの攻撃を避け、ライドブッカーをソードモードにして構え一枚のカードをディケイドライバーに装填する。

「ATTACK - RIDE..... SLASH」

「その心に刻んどけ!!..」
「がっ!!..」

ディケイドSはディケイドスラッシュでオクトパスロードを切り裂く。

「FINAL - ATTACK - RIDE……DE、DE、DE、DECADE」

ディケイドSは一枚のカードをディケイドライバーに装填すると、オクトパスロードに向かって12枚のカード型のエネルギーが出現し、ディケイドSはカード型のエネルギーの道を進みオクトパスロードに向かってキックを放つ。

「おのれ、アギト!!」

ディケイドSの必殺キック、”ディメンションキック”がオクトパスロードに決まり、オクトパスロードは爆発する。

「だから俺は、ディケイドだ。」

ディケイドSはそう言うと、変身を解こうとするが。

「時空管理局です、武器を捨てて下さい。」
「今の声は？」

ディケイドSが空を見ると、バリアジャケットを着たなのはがデバイス”レイジングハート”を構えていた。

「なのは、謎の反応が消えた。」

更に、なのはの所にバリアジャケットを着たフェイトもデバイス”バルディッシュ”を携え現れる。

「あれって、高町にテストロッサ？」

「この声は？」

「真導君？」

ディケイドSの声に驚くフェイトとなのは。

「それって、コスプレか？」

「「えっ？」」

ディケイドSの一言に驚く二人。

コレが魔法少女と仮面ライダーの最初の出会いだった。

第3話 出会いは突然やってくる（後書き）

次回、『時空管理局』

翔夜

「今回は次回予告は無いんだ。」

雄司

「それより、俺の扱いと出番は？」

フェイト

「次回は私の家族が出てきます。」

なのは

「冴島君の出番は無いけどね。」

雄司

「orz」

感想や質問を待っています。

第4話 時空管理局（前書き）

今回は、戦闘はありません。

それでは仮面ライダー & a m p ; リリカルなのは、始まります。

第4話 時空管理局

「それって、コスプレか？」

「えっ？」

デイケイドSの一言に驚く二人。

「何で二人共、コスプレ何かしているんだ？」

「コスプレじゃないよ。」

「コレはバリアジャケット。」

変身を解いた翔夜はなのはとフェイトの格好をコスプレ扱いするが、
なのはとフェイトはソレを否定する。

「それより真導君、さっきの姿は？」

「魔力の反応がなかったけど。」

「ちよつと二人共、落ち着いて。」

なのはとフェイトからの質問責めにあう翔夜。

（とりあえず、逃げるか。）

翔夜は二人から逃げようとするが。

「逃がしません。」

「えっ!？」

なのはは逃げようとする翔夜にバインドで捕縛する。

「とりあえず、事情を説明してください。」

「解ったよ、とりあえず、写真館に來い。」

「「写真館？」」

フエイトは翔夜に事情を説明を頼み、翔夜は写真館で事情を話す事になる。

眞導写真館

「お母さん、それにお兄ちゃん！！」

「じいさん、何やっているんだ？」

翔夜達が写真館に戻つて来ると、何故か写真館ではコーヒを飲んでいたフエイトの母親、リンディ・ハラウン（リンディ）とクロノ・ハラウン（クロノ）とコーヒをだしていた栄市郎が居た。

「お歸り、翔君。」

「あらフエイト、来ていたんだ。」

「ちょうど良い、みんな話があるんだ。」

栄市郎を除いて写真館のリビングでクロノ、リンディ、なのは、フエイト、翔夜は話し合いを始めた。

「とりあえず、さっきフエイトとなのはから君の事は少し聞いたが、君が変わったあの姿と化け物の事を説明してくれるか？」

「解った、だが条件がある。」

クロノは翔夜にディケイドの姿と怪人達の説明を頼むが、翔夜はクロノに条件を出す。

「お前ら時空管理局の事を教えてくれ。」
「解った。」

翔夜は時空管理局についてクロノ達に聞く。

「まずは時空管理局のことね、時空管理局は次元世界などの世界を管理することを目的とし他にも災害の救助などを魔法等を使用し解決したりする組織よ。」

リンディは翔夜に時空管理局について説明をする。

「今度は、君が変わったあの姿について話してくれ。」
「ああ」

翔夜は鞆からディケイドドライバーを取り出す。

「これはディケイドドライバー、半年前にある人から貰ったディケイドドライバーになるための変身ツールだ。」

「デバイスみたいなものだね。」

「見たところ、かなり精巧に作られているけど、誰が作ったんだ。」

リンディとクロノはディケイドドライバーを見ながら、クロノは翔夜にディケイドドライバーの製作者について聞く。

「コレの製作者は結城 丈二、俺はその人からコレを受け取り、あ

の化け物達の事を聞いた。」

「そうなんだ。」

「解った、今度は君達に話があるんだ。」

「私達に？」

「何なのお兄ちゃん？」

リンディとクロノは翔夜の説明に理解し、クロノはなのはとフェイトにある話を始める。

「実は、数週間前に失った空間を^{ロストフィールド}確認したんだ。」

「「ロスト……フィールド」」

「何だ、ロストフィールドって？」

翔夜はクロノにロストフィールドについて質問する。

「ロストフィールドって言うのは、簡単に言えば消えた別世界の事よ、でもロストフィールドは外部からの干渉は出来ないし、内部からも反応が無いことが殆どだけ。」

翔夜の質問にフェイトが答える。

「でもクロノ君、ロストフィールドが確認された位で何か起きたの？」

なのははクロノに質問する。

「実は、数日前からそのロストフィールドで謎の反応が次々と他の世界に送られているんだ。」

「「えっ！？」」

クロノの発言に驚くのはとフェイト。

「まさか、謎の反応があのかけ物達の事か？」

「その通りだ真導君、現在、謎の反応は此処海鳴市とミッドチルダを中心に送られている、ちなみにロストフィールドの調査はユーノが現在調べている。」

「ユーノ君が!？」

「誰だ？」

「なのはに魔法を教えた人。」

クロノの話に驚くのはと話についてこれない翔夜、その翔夜に説明するフェイト。

「とにかく、ロストフィールドの事を調べる為に私とクロノもしくはらくはこの町に居るは。」

「解ったは、母さん。」

リンディとクロノは暫く海鳴市に居ることになる。

「それから、真導君。」

「何だ？」

「君も私達に協力してほしいんだけど。」

リンディは翔夜に協力を要請するが。

「ダメだ。」

翔夜はリンディの要請を断る。

「何で？」

「どうしてなの？」

フェイトとなのはは翔夜に訳を聞こうとするが。

「お前達の事は大体解ったが、あの化け物達には手を出すな、あの化け物達は俺が破壊する。」

翔夜はそう言つと写真館から出て行く。

第4話 時空管理局（後書き）

次回、仮面ライダー & a m p ; リリカルなのは

雄司

「何で、ついて来るんだよ!？」

アリサ

「まだ、あの転校生について聞いてないわ。」

アリサ

「あれは!？」

雄司

「グロンギ!!」

シン

「君達、早く逃げなさい!!」

雄司

「もう誰も、悲しませたく無いんだ!!」

Gum

「クウガ!？」

次回、『変身』

感想を待っています。

第5話 変身（前書き）

今回も短いです。

それでは仮面ライダー & a m p ・リリカルなのは、始まります。

第5話 変身

翔夜がクロノ達と話し合っている頃

海鳴市の市街地では

「何で、ついて来るんだよ!？」

「まだ、あの転校生について聞いてないわ。」

写真館に帰る途中の雄司とそれについて来るアリサが歩いていた。

「それより、何で翔夜の事を知りたいんだ？」

「何でって、それは……………」

雄司の質問に考え込むアリサ。

「あんまり、人の詮索をしない方が良いよ。」

雄司はそう言うたアリサから離れて行くが。

「何だ!？」

「あれは!？」

雄司達の近くで大きな爆発音が聞こえ、アリサが爆発した方を見ると。

爆発がした場所ではトラックが横転しており、周りの人達は逃げて

いた。

「此処にあのベルトがある。」

「忌々しいクウガのベルトが。」

「全員、アークルを死守するんだ。」

「了解」

トラックの近くにはを黒いライダースーツを着て拳銃を構えた数人の男達とクモ種怪人のズ・グムン・バ（グムン）とコウモリ種怪人のズ・ゴオマ・グ（ゴオマ）が戦っていた。

「あれは！？」

「グロンギ！！」

グロンギに驚くアリサと雄司。

「リント！！」

グムンは雄司達を見ると、雄司達に向かって襲いかかるとする。

「きゃーっ！！」

「アリサちゃん逃げて！！」

叫ぶアリサを庇うように雄司は前に出てグムンを止めるが。

「邪魔だ！！」

「わっ！！！！」

グムンは雄司をトラックに投げ飛ばし、再びアリサに襲いかかろうとするが。

「ぐっ!!」

グムンは後ろから何かを喰らい後ろ見ると。

「君達、早く逃げなさい!!」

ゴオマと戦っていた男達同様に黒いライダースーツを着た一人の男性がバースバスターを構えていた。

「君、早く逃げなさい!!」

「でも、アイツが……化け物に……ぶっ飛ばされて……」

男性はアリサに逃げるように言うが、アリサは雄司が投げ飛ばされた事に驚いていた。

「痛かった!!」

グムンに投げ飛ばされた雄司は横転したトラックの荷台で頭を抑えていた。

「何だ、このトラックは？」

雄司は一つのトランクを見つけ、トランクを開けようとする。

「コレは、クウガのベルト!？」

トラックの中に入っていたのはアークルだった。

「ぐわっ!!」

「強い!!」

「このままじゃ全滅する!!」

雄司がアークルを拾うと、ゴオマと戦っていた男達の叫びが聞こえる。

「俺も戦う時が来たみたいだぜ、翔夜。」

雄司は思い出していた、ショッカー帝国を倒す為に破壊者として戦う事を決めた仲間の事を。

「どうした、リントの戦士!!」

「くっ、このままじゃアークルが奪われる。」

グムンと戦っていた男性はアリサを守りながらトラックの方を見ていた。

その時、

トラックの荷台からアークルを持った雄司が出て来る。

「アイツ、生きていたの!?!」

「あれは、アークル!？」

雄司に驚くアリサと男性。

「あれは、クウガのベルト!？」

「リントがどうするつもりだ!？」

ゴオマとグムンは雄司の前に現れる。

「君、そのベルトを持って逃げるんだ!！」

男性は雄司に逃げるように言うが。

「嫌です。」

雄司はアークルを腰に着ける。

「君、何をしているんだ!？」

「誰も傷ついて欲しくないんです!！」

男性は雄司の行動に驚くが、雄司は叫ぶように男性に言う。

「リントが貴様に何が出来るんだ?」

ゴオマは雄司を殴ろうとするが。

「俺はもう誰も、悲しませたく無いんだ!！」

雄司はそう言うゴオマの攻撃を避け、ゴオマを殴り飛ばす。

「変身!!」

雄司は仮面ライダークウガ　マイティフォームに（クウガM）に変身する。

「その姿は!?!」

雄司の姿に驚くアリサ。

「クウガ、仮面ライダークウガさ。」

クウガMは仮面の下でサムズアップする。

「クウガ!!」

グムンはクウガMに向かって殴りかかるつもりが。

「ハッ!!」

クウガはグムンを攻撃を避け、パンチやキックでグムンにダメージを与えていく。

「おのれ!!」

「ぐっ!!」

グムンはクウガMに向かって糸を吐きクウガMの右腕に絡みつく。

「覚悟しろ、クウガ!!」

グムンはクウガMに向かって襲いかかろうとするが。

「ぐあっ!!」

突然、グムンは銃弾を喰らいクウガMの右腕に絡みついた糸が千切れる。

「アナタは!?!」

クウガMは銃弾が放たれた方向を見ると。

「俺は前園 シン、仮面ライダークウガ、一気に決めるんだ!!」
「ハ、ハイ!!」

バースバスターを構えた男性、前園 シン（シン）はクウガMにグムンを倒すように言う。

「はああああ………はあっ!!」
「ぐあああっ!!」

クウガMの必殺キック、マイティキックがグムンに喰らい、グムンは爆発する。

「おのれ、クウガ!!」

ゴオマはクウガに向かって襲いかかろうとするが。

「FINAL - ATTACK - RIDE………DE、DE、DEC
ADE」

「ハッ!!」

「ぐあっ!!」

電子音と共にゴオマに向かって12枚のカード型のエネルギーが出
現し、エネルギー弾がゴオマに当たりゴオマは爆発する。

「全く、写真館から出てみればグロンギかよ。」

クウガM達の前にライドブッカーをガンモードにしたディケイドS
が現れる。

「翔夜!!」

「お前、雄司なのか!?!」

「もう、どうなっているの?」

ディケイドSの登場に驚くクウガM、雄司が変身したクウガMに驚
くディケイドS、そんな二人に解らなくなっていたアリサ。

「副隊長、見つけました。」

シンは少し遠くでディケイドS達を見て、無線で誰かと話していた。

「ディケイドとクウガの継承者を。」

第5話 変身（後書き）

次回、仮面ライダー&リリカルなのは

紅牙

「君、良く此处に来るね。」

すずか

「黒月君、何なのこの蝙蝠は？」

キバット

「俺様はキバットバット？世、宜しくなお嬢さん。」

ホースファンガイア

「人間、覚悟しろ！！」

紅牙

「キバット！！」

キバット

「よっしゃ、キバっていくぜ！！」

次回、『運命・牙の戦士』

感想を待っています。

第6話 運命・牙の戦士（前書き）

今回はキバの登場です。

（最近、投稿する話が短いです。）

それでは仮面ライダー & amp; リリカルなのは、始まります。

第6話 運命・牙の戦士

海鳴中学校 音楽室

音楽室から美しいバイオリンの音色が聞こえていた。

「凄いな、黒月君。」

音楽室にはバイオリンを弾く男子生徒（黒月 紅牙）と、それを見るすずかが居た。

「君、良く此处に来るね。」

「あ、あのー、邪魔でしたか／＼／＼」

紅牙はすずかに気づき、すずかは顔を赤くする。

「別に良いよ、いつも僕の演奏を聞いているの?」

「ハ、ハイ、黒月君の演奏はとにかく上手いよ／＼／＼／」

「どういう意味で?」

「えっ、それは……………」

紅牙の質問に焦るすずか。

「フッフ、別に良いよ人の感想は人それぞれ違うからね。」

「うん／＼／＼／＼／」

紅牙は微笑しながらすすかを見ると、すすかは顔を更に赤くしていた。

「おい紅牙、そろそろ公園に行こうぜ。」

「えっ!？」

突然、音楽室の窓から金色の蝙蝠が現れ、すすかはそれに驚く。

「こらキバツト!! ゴメンね驚かせて。」

紅牙は金色の蝙蝠キバツトに怒り、すすかに謝る。

「黒月君、何なのこの蝙蝠は？」

すすかはキバツトに指を指しながら紅牙に聞くと。

「俺様はキバツトバツト?世、宜しくなお嬢さん。」

キバツトはすすかに挨拶をする。

「キバツト、あれほど学校に来ないでつて言った筈なのに。」

「ゴメンな紅牙、でも俺様は早く公園に行きたいんだ。」

「それで、本音は？」

「公園にある屋台の綿菓子を食べたい……………あっ!」

キバツトの本音を聞いた紅牙はキバツトに笑顔を見せながら、後ろには一瞬でキバツトが恐怖を感じるオーラが出ていた。

「ギャー！！！！！！！！！！」

音楽室にキバットの叫び声が響いていた。

海鳴市 市街地

「それより翔夜、本当に大丈夫なのか？」

「何が？」

「アリサちゃんや前園さんをほつといて。」

「大丈夫だろう……………多分な。」

「多分かよ！！」

さっきまでグロンギと戦っていた雄司と翔夜は市街地を歩いていた。

「大体、俺達がすぐに消えたのに、誰も追いかけてこないしな。」

「確かにそうだが。」

翔夜は自信を持って雄司に言うと、雄司は心配した表情で後ろを見ている。

海鳴市 公園

「黒月君にバイオリンの先生が居るんだ。」

「偶にこの公園に居るんだけどね。」

公園では紅牙とすずかが喋りながら歩いていた。

「言っておくけど、紅牙の先生はかなりのナンパ師だから気をつけるよ、すずかちゃん。」

「えっ／＼／」

「キバット、また痛めつけられたいの？」

何故か頭に大きなたんこぶを作ったキバットがすずかに余計な一言を言つと何故かすずかは顔を赤くし、紅牙は再びキバットに向けて恐怖のオーラを出していた。

「スイマセン、紅牙。」

キバットはそう言つと、紅牙達から離れていく。

「全く。」

「まあまあ黒月君、キバットも悪気が無いわけじゃないし。」

キバットに怒る紅牙とすずかは紅牙を宥めていると。

「キャー!!」

「助けて!!」

紅牙達の後ろから突然悲鳴が聞こえ、振り返ってみると。

「人間、覚悟しろ!!」

ホースファンガイアが女の子を襲おうとしていた。

「あれは!?!」

ホースファンガイアの出現に驚くすずか。

「ファンガイア!!」

「ぐっ!!」

紅牙はホースファンガイアを見ると、ホースファンガイアに向かって思いつき蹴り飛ばす。

「早く逃げるんだ。」

「ありがとう、お兄ちゃん。」

紅牙は女の子に逃げるように言うと、女の子は紅牙にお礼を言っ
て逃げていく。

「すずかちゃん、下がっていて。」

「でも、黒月君は大丈夫なの?」

紅牙はすずかに下がるように言うと、すずかは紅牙を心配する。

「大丈夫、慣れているから。」

紅牙はそう言うと、何処からかキバットが現れる。

「まさか、貴様は!!」

ホースファンガイアはキバットを見ると、突然慌てだす。

「キバット!!」

「よっしゃ、キバっていくぜ! ガブリ!!」

「変身」

紅牙は仮面ライダーキバ キバフォーム（キバK）に変身する。

「貴様がキバの継承者か!？」

ホースファンガイアはそう言つと剣を取り出しキバKに襲おうとする。

「ハッ!!」

「ぐあっ!!」

キバKはホースファンガイアの攻撃を避けるとキックやパンチでホースファンガイアを押ししていく。

「ぐっ、舐めるなよキバ!!」

ホースファンガイアはキバKのバックルを目掛けて切りかかろうとするが。

「どうだ、馬面。」

バックルにぶら下がっていたキバットがホースファンガイアの剣を受け止めていた。

「そろそろ決めるぜ、紅牙!!」
「ウェイクアップ!!」

キバKは赤いフェッスルをキバットに吹かせると、キバKは高く飛び上がる。

「はああっ!!」
「ぐああっ!!」

キバKの必殺キック ダークネスムーンブレイクが決まり、ホースファンガイアは爆発する。

「ふう」
「疲れたな、紅牙。」

キバKは変身を解く。

「黒月君、その姿は？」

すずかは紅牙に質問するが。

「ゴメン、すずかちゃん。」

紅牙はそれだけ言うとキバットと共に何処かに走り去っていく。

「黒月君」

すずかは寂しそうな顔をして紅牙の後ろ姿を見ていた。

その頃、海鳴中学校の屋上では。

「此処に電王の継承者が居るんだな。」

赤い鬼が学校全体を見ながら、誰かを捜していた。

第6話 運命・牙の戦士（後書き）

次回、仮面ライダー&リリカルなのは――継承者と魔法少女――

モモタロス

「此処は何処なんだ！！！！！！」

はやて

「おおきに、ところで名前は？」

健太郎

「俺は沢田 健太郎、よろしくはやてちゃん。」

バットイマジン

「見つけたぞ、新たな特異点！！」

モモタロス

「お前の願いを言え、叶えてやるよ！！」

M健太郎

「俺、参上！！！！」

次回、「電王、参上！！！！」

感想を待っています。

第7話 電王、参上！！！（前書き）

今回は電王の登場です。

それでは仮面ライダー & a m p ; リリカルなのは、始まります。

第7話 電王、参上!!!

紅牙とすずかが公園に向かっていた頃、

海鳴中学校 屋上

突然、屋上に赤い光の玉が落ちてくる。

「あゝ、痛かった。」

赤い光の玉は砂に変わり、砂は異形に変わっていく。

「全く、デンライナーから落ちるし、亀公達とは離れるし、良太郎の不幸が移っちまったかな？」

砂の異形は赤い鬼の異形に変わり、何故かお尻を抑えていた。

「それよりも」

赤い鬼は周りを見る。

「此処は何処なんだ!!!!!!!!!!」

赤い鬼の叫び声が学校の屋上に響き渡る。

「この本、面白いな。」

図書室では、なのは達の仲間、八神 はやてが一冊の本を読んでいた。

「さてと、次の本を読むか。」

はやとはそう言うと一緒に上の棚にある本を取ろうとするが僅かに届かずに、しかも数冊の本がはやてに向かって落ちてくる。

「しまっ「危ない!!」……………えっ!？」

はやてはよけようとした瞬間、一人の男子生徒がはやてを庇い、はやてはそれに驚く。

「大丈夫か？」

「大丈夫、これくらい平気だよ。」

はやては庇ってくれた男子生徒を心配するが、男子生徒は平気な顔をはやてに見せるが。

「んぶっ」

突然、数十冊の本が男子生徒の後頭部に目掛けて落ちてくる。

「何で大量に落ちてくるんや?……………って、ほんまに大丈夫か？」

はやては目の前の状況に思わずツッコミをいれて、再び男子生徒を心配する。

「大丈夫、慣れているから。」

男子生徒はそう言つと、少しフラツきながらも起き上がる。

「慣れているって、どういう事なん？」

男子生徒の一言に驚くはやて。

「それより、これを取りたかつたの？」

男子生徒ははやてが取ろうとした本をはやてに見せる。

「おおきに、ところで名前は？」

はやては本を受け取ると男子生徒に名前を聞く。

「俺は沢田 健太郎、よろしくはやてちゃん。」

沢田 健太郎（健太郎）ははやてに自己紹介する。

「えっ、何でウチの名前を知ってるん？」

「あゝ、何時も此処で見かけるから覚えたんだ。」

「そうなんや。」

健太郎の説明に納得するはやて。

海鳴中学校 屋上

「それにしても、本当に居るのか電王の継承者が？」

赤い鬼はグランドを見渡しなから嘆いていた。

「何だ、あれは？」

赤い鬼は何かを見つける。

海鳴中学校 グランド

「大丈夫か、沢田君？」

「大丈夫、いつもの事だから。」

ボロボロになっていた健太郎は此処に来るまで階段から転げ落ちたり、突然水を被ったり、ドアに挟まれたり、ずっと不幸な目に遭っていた。

「どんだけ不幸なん？」

はやては健太郎にツッコむと同時に少し心配していた。

「キヤー！！！」

「化け物だ！！！」

突然、グランドに居た生徒達が叫びだす。

「見つけたぞ、新たな特異点!!」

バットイマジンがグラウンドに現れ、健太郎達に襲いかかろうとする。

「何やアレは？」

「はやてちゃん、逃げて!!」

はやてはバットイマジンに驚き、健太郎ははやてを逃がそうとする。

「死ね!!」

「もうダメだ!!」

バットイマジンが健太郎に襲いかかろうとした瞬間、健太郎の前に赤い鬼が現れる。

「まさかイマジンに会すとはな。」

「貴様は!？」

バットイマジンを赤い鬼を見ると急に焦りだす。

「思わなかったぜ!!」

「ぐっ!!」

赤い鬼はバットイマジンを殴り飛ばすと健太郎の方を見る。

「オイ、お前!!」

「ぼ、僕の事!？」

赤い鬼は健太郎を呼び、健太郎はそれに驚く。

「お前の願いを言え、叶えてやるよ!!」

赤い鬼はそう言うと、ライダーパスを取り出す。

「僕の願い？」

健太郎はグラウンドに居た生徒達が逃げていく中、自分を心配して残っているはやてを見る。

「力が欲しい、誰かを守れる力が欲しいんだ!!」

健太郎はそう言うと、赤い鬼が持っていたライダーパスを取る。

「良く言っただ、お前の願いを聞いてやるよ!!」

赤い鬼は健太郎の体の中に入る。

「健太郎君!？」

はやては健太郎と赤い鬼の行動に驚く。

「俺、参上!!」

髪に赤いメッシュのついた健太郎はポーズをとると、自らの腰にデ
ンオウベルトが現れる。

「変身!!」

「SWORD FORM」

健太郎？は仮面ライダー電王 ソードフォーム（電王S）に変身する。

（一体、どうなっているの！？）

「悪い悪い、説明しないといけないな。」

電王Sの変身に驚く健太郎、ちなみに健太郎の声は赤い鬼にしか聞こえていない。

「この姿は仮面ライダー電王、お前の力だ。」

（僕の力。）

「貴様等、纏めて倒してくれる。」

バットイマジンは電王Sを見て襲いかかろうとするが。

「オラアッ！！」

「ぐっ！！」

電王Sはバットイマジンをヤクザ蹴りでぶっ飛ばす。

「まだまだ！！」

電王Sはバットイマジンの胸ぐらを掴むと。

「もういっちょー!!」
「ぐあっ!!」

電王Sはバットイマジンに頭突きを喰らわす。

「何か滅茶苦茶な戦い方だな。」

はやては電王Sの戦い方を呆気なく見ていた。

「そう言えば、お前の名前は？」

（俺は沢田 健太郎。）

「健太郎か、俺はモモタロスだ。」

（よろしく、モモタロス!!）

健太郎と赤い鬼は互いに自己紹介をすると、電王Sはデンガッシャーモモタロスを取り出し、デンガッシャーをソードモードにする。

「健太郎、見せてやるよ俺の必殺技を。」

「FULL CHARGE」

電王Sはデンガッシャーを構え、バットイマジンに向かって突っ込む。

「俺の必殺技、PART1!!」
「ぐあっ!!」

電王Sの必殺技、エクストリームスラッシュでバットイマジンを切

り裂き、バットイマジンは爆発する。

「あゝ、終わった終わった。」

電王Sは変身を解き、健太郎とはやては改めてモモタロスの姿を見ると。

「鬼やな。」

「そうだね。」

「俺は鬼じゃねえ!!」

モモタロスを鬼だと勘違いするはやてと健太郎。

そんな中、電王Sの戦いを遠くからシンが一部始終見ていたのは誰も知らない。

第7話 電王、参上!!! (後書き)

次回は未定です。

モモタロス「未定かよ!?!」

キバット「何か不安だな。」

感想を待っています。

第8話 翔夜の受難と初めての共闘（前書き）

今回は滅茶苦茶です。（タイトルで）

それでは仮面ライダー & a m p ; リリカルなのは、始まります。

第8話 翔夜の受難と初めての共闘

海鳴市 ???

「廃工場に市街地、公園や中学校か」

「ハイ、ここ数日でシヨッカー帝国の活動が活発なのが解ります。」

海鳴市のある施設の一室ではシンは上司と思われる人物と話し合
いをしていた。

「それにしても、副隊長よろしいのでしょうか？」

「何が？」

「我々が継承者にコンタクトをとらない事ですよ！！！」

シンは仏頂面で副隊長に怒鳴る。

「まあまあ前園ちゃん、落ち着いて。」

「コレが落ち着いていられますか？」

副隊長はマイペースにシンを宥め、シンは副隊長に呆れながらも落
ち着く。

「確かにアークルの護送の時は、クウガとディケイドに余計な接触
はするなと言っただけ。」

「副隊長、彼らにコンタクトを取らないんですか？」

前園は副隊長にコンタクトを取らない理由を聞こうとするが。

「前園ちゃん、何で焦るの？」

副隊長はマイペースを保ったままだった。

「忘れたのですか、我々の目的は継承者達と共にシヨッカー帝国と戦う事ですよ。」

「なら、もし継承者が敵になった時はどうするんだ？」

「そ、それは……………」

副隊長の一言で考え出すシン。

「継承者の方は4人が確認出来ているんだ、もしかしたら継承者の1人は既にシヨッカー帝国についているかも知れないんだぞ。」

「確かにそう言う可能性も有るかも知れませんが。」

「それに俺と隊長の変身ツールはまだ最終調整が終わってないからな。」

副隊長はそう言うつと席を立つ。

「どちらに行かれるんですか？」

シンは副隊長に尋ねるが。

「おでんを食べてくる。」

副隊長はそう言うつと部屋から出て行く。

「全く副隊長は。」

シンは呆れながら部屋を出ようとするが。

「コレは？」

シンはドアの前に落ちていた一枚の紙切れを拾い上げ、紙切れに書かれていた内容を読む。

『とりあえず継承者の監視は引き続き頼む、ついでに俺のデスクに置いてある報告書の作成も。』

「副隊長、またですか。」

紙切れを読んだシンは再び副隊長に呆れる。

真導写真館 翔夜の部屋

「すーすーzzzz」

グロンギと戦いから数日経ったある日、翔夜は自分の部屋で寝ていると。

「お兄ちゃん、起きてますか？」

翔夜の妹、真導 ナツミが翔夜の部屋に入ってくる。

「むっ、やっぱり寝てますね。」

ナツミは翔夜を見ると親指を構える。

「少々手荒いですが、笑いのツボ!」

「ハハハハハハ!」

ナツミは翔夜の首もとに親指を突くと突然、翔夜は笑いながら飛び起きる。

「ナツミ、笑いのツボを使うなよ!」

目を覚ました翔夜はナツミに怒るが。

「だって、今日はケーキ屋さんに行こうって約束したじゃない。」

「あつ、そうだったな!」

翔夜はナツミとの約束を思い出す。

「もしかして、忘れていましたか?」

ナツミは再び親指を構えていた。

「忘れていました。」

その瞬間、俺は二度目の笑いのツボを喰らった。

ちなみに何故ナツミが笑いのツボを使えるのは半年位前に会ったお姉さんに教わったらしい。

とりあえず笑いが止まった俺は着替えてナツミと共に翠屋に向かった。

ちなみに雄司は朝からランニングで何処かに出かけ、じいさんは写

真館の店番をしていた。

海鳴市 翠屋

「いらっしやいま………あつ、真導君。」

翠屋に入った真導兄妹は店手伝いをしていたなのはに会う。

「お兄ちゃん、お友達ですか？」

「あら、妹さんなの？」

ナツミに気づくのは。

「こんにちは、真導 ナツミです。」

「こんにちは、高町 なのはです。」

互いに自己紹介をする二人。

「なのはさんは、お兄ちゃんの彼女ですか？」

「「えっ!?!」」

ナツミの突然の一言に驚くのはと翔夜。それと同時に何処からか翔夜に向けて2つの殺気が放たれていた。

「違うんですか？」

「違うからな、ナツミ。」

「違うよ（ナ、ナツミちゃん、わ、私の事をし、真導君のか、彼女だとお、思っているの！？）／／／／／」

誤解するナツミ、誤解を解こうとする翔夜、そして顔が赤くなりながらドキドキしていたなのは。

ちなみに、この時に再び翔夜に向けて2つの殺気が放たれていた。

「あら、なのはのお友達？」

翔夜達の所になのはの姉・高町 美由希（美由希）が来る。

「同じクラスメイトの」

「真導 翔夜だ。」

「妹の真導 ナツミです。」

「翔夜君にナツミちゃんね、なのはの姉の美由希です。」

翔夜とナツミは美由希に自己紹介をする。

「翔夜君はもしかして、なのはの彼氏？」

「えっ？」

「お姉ちゃん／／／／／」

美由希の発言に驚く翔夜と再び顔を赤くするのは。そして再び翔夜に向けて2つの殺気が放たれていた。

「違うの？」

「違うよお姉ちゃん／／／／／」

まだ顔を赤くしながら誤解を解こうとするのは。

「それより、もの凄い殺気を感じるんだが。」

翔夜はさっきから自分に向けて放たれていた殺気を感じていた。

（なのは、聞こえる？）

（フェイトちゃん？）

突然、フェイトからの念話が聞こえる。

（どうしたのフェイトちゃん？）

（港に例の反応が確認されたの、すぐに向かってくれる？）

（解った。）

なのはは念話を終わるとすぐに翠屋から出て行く。

「ナツミ、此处に居ろ。」

翔夜はそう言っていると翠屋から出て行く。

「何なんだ、あの男は!？」

「なのはが、あんな顔をするし!!」

「もう、あなた達は。」

キッチンではなのはの父・高町 士郎と兄・高町 恭也が翔夜に向けて殺気を放っていたのを母・高町 桃子が呆れながら見ていた。

海鳴市 とある港

「人間達よ」

「消えろ!!」

港ではジャツカルロード スケロス・ファルクス（ジャツカルロード）とワームオルフェノクが暴れていた。

「時空管理局です、武器を捨てて投降してください!!」

空中からバリアジャケットを着たなのはが現れる。

「魔導師か？」

「失せろ!!」

ジャツカルロードは大鎌から衝撃波を放つ。

「うわっ!!」

ジャツカルロードの攻撃を喰らい、なのはは地面に叩きつけられる。

「死ね!!」

ワームオルフェノクはなのはに襲いかかろうとする。

（もう駄目!?!）

なのは心の底で諦めかけるが。

「はっ！！」

「ぐおっ！！」

なのはの所に翔夜は駆けつけ、翔夜はワームオルフェノクを殴り飛ばす。

「真導君！？」

なのはは翔夜を見て驚く。

「あの時、手を出さなって言っただよな。」
「そうだけど。」

なのははそう言つと立ち上がる。

「とにかく、無茶はするなよー！！」

翔夜はそう言つとデイケイドライバーを取り出す。

「真導君」

なのはもレイジングハートを構える。

「それから、翔夜で良いからな。」

「KAMEN - RIDER」

「変身!!」

「DECADE STRIKE」

翔夜はディケイドSに変身しライドブッカーをソードモードにして構える。

「おのれ!!」

ジャッカルロードは大鎌を振り回しながらディケイドSに襲いかかるうとする。

「はあっ!!」

ディケイドSのライドブッカーとジャッカルロードの大鎌がぶつかり合う。

「ディケイド、覚悟!!」

ワームオルフェノクはディケイドに襲いかかるうとするが。

「アクセルシューター!!」

ワームオルフェノクに向かって数十の魔力弾が放たれる。

「ぐはっ!!」

なのはの攻撃で吹っ飛ばされるワームオルフェノク。

「私が相手です。」

レイジングハートを構えたなのは、ワームオルフェノクの相手をする。

「はあっ!!」

「ぬあっ!!」

ディケイドSはライドブッカードでジャッカルロードを切り裂くが、ジャッカルロードはディケイドSの攻撃に耐える。

「しぶといな、ならコレはどうだ!!」

ディケイドSは一枚のカードを取り出しディケイドライバーに装填する。

「ATTACK・RIDE……ILLUSION」

ディケイドSはディケイドイリュージョンを発動しディケイドSの姿が5人になる。

「何だ!？」

「5人分の攻撃だ!!」

ジャッカルロードは大鎌で5人に分身したディケイドSに切りかかるが、ディケイドSはジャッカルロードの攻撃を避けながらライドブッカードで切りかかる。

「ぐはあっ!!」

ジャッカルロードはディケイドSの攻撃でワームオルフェノクの所まで吹っ飛ばされる。

「翔夜君!」

「一気に決めるぞ!!」

なのははディケイドSと合流するとディケイドSはライドブッカーをガンモードにして一枚のカードをディケイドライバーに装填する。

「FINAL - ATTACK - RIDE..... DE、DE、DEC
ADE」

「ディバインバスター!」

「はあっ!!!!」

「おのれ!!」

「ディケイドと魔導師!!」

ジャッカルロードはディメンションブラストをワームオルフェノクは砲撃魔法”ディバインバスター”を喰らい爆発する。

「終わったな。」

ディケイドSは変身を解くと、すぐに立ち去るつとする。

「翔夜君!!」

バリアジャケットを解除したのは翔夜を呼び止めようとするが。

「気をつけるんだな、なのは。」

翔夜はそう言っていると立ち去っていった。

「今、なのはって呼んだ／＼／＼／」

翔夜の一言になのはは顔を赤くしていた。

第8話 翔夜の受難と初めての共闘（後書き）

次回、仮面ライダー & a m p ; リリカルなのは

アंक

「お前、これで変身しろ!!」

和輝

「えっ!?!」

フェイト

「怪人!?!」

和輝

「変身!?!」

「タカ、トラ、バッタ、タ・ト・バ、タ・ト・バ、タトバ!?!」

フェイト

「今の歌って?」

アंक

「歌は気にするな。」

次回、『メダルの戦士』

感想を待っています。

第9話 メダルの戦士（前書き）

これまでの仮面ライダー & amp・リリカルなのは

一つ、人々を襲おうとするショッカー帝国。

二つ、ショッカー帝国に対抗すべく戦おうとする仮面ライダー。

三つ、そして仮面ライダーと共に戦おうとする魔法少女達。

それでは始まります。

第9話 メダルの戦士

翔夜となのはが怪人達を倒したその夜

海鳴市 公園

「グリードよ、オーズの力をこちらに渡せ!!」
「誰が渡すか!!」

真夜中の市街地にカマキリヤミーと数体の屑ヤミーが金髪の男性を追いかけていた。
男性の手には四角い箱のような物を大事に持っていた。

「なら、消えて貰うまでだ。」

カマキリヤミーはそう言うと、屑ヤミー達が金髪の男性に襲いかかるうとする。

「ちっ!!」

金髪の男性は右手から火炎弾を屑ヤミー達に放ち、屑ヤミー達は倒されメダルに変わるが、金髪の男性は突然右手を抑える。

「ほう、どうやら人間の姿になってグリードの力は使いにくいようだな。」

カマキリヤミーは両手の鎌から衝撃波を金髪の男性に向けて放つ。

「ぐはっ!!」

金髪の男性はカマキリヤミの攻撃を喰らうがその姿は消えていた。

「逃げたか、まあ良いだろう。」

カマキリヤミは周りを見渡すとその場から立ち去る。

「行ったようだな。」

近くに隠れていた金髪の男性は右手を抑えながらカマキリヤミが立ち去るのを見て突然、その場に倒れ込む。

「ぐっ、少し力を使いすぎたか……………」

金髪の男性はそのまま意識を失う。

「昨日の夜、此処に例の反応が?」

その翌日、フェイトは例の反応があった公園を調査していた。

「アレは!?!」

フェイトは調査をしていると、倒れていた金髪の男性に出会う。

「アナタ、大丈夫ですか!？」

数十分後

「此処は……………」

「気がついた!？」

金髪の男性が目は目を覚まし、フェイトはそれに気づく。

「此処は何処だ!？」

「公園よ、アナタは気絶していたの。」

金髪の男性は周りを見渡し慌てるが、フェイトはすぐに金髪の男性に説明する。

「貴様が俺の看病を？」

金髪の男性はフェイトに尋ねると、一人の少年がやって来る。

「俺も手伝ったんだけど。」

「誰だ？」

「俺は千樹 和輝、フェイトさんの助手だ。」

「私はフェイト・T・ハラウン、アナタは？」

「アंकだ。」

互いに自己紹介をする千樹 和輝（和輝）とフェイト、そして金髪
の男性。
アंक

「そう言えばアंक、この箱は。」

和輝はアंकが持っていた四角い箱を取り出すと。

「何だ!？」

(オーズの力が、このガキに反応しているのか!?)

突然、アंकの持っていた四角い箱が光り出す。

「今のは？」

「何だったの？」

驚く和輝とフェイト。

「やはり生きていたか、鳥系のグリードのアंकよ!!」

フェイト達の前にカマキリヤミーと数体の屑ヤミーが現れた。

「あれは!？」

「怪人!？」

カマキリヤミーに驚く和輝とフェイト。

「セットアップ！」

[s e t u p]

フェイトはバリアジャケットを纏い、バルディシュを構える。

「和輝君、アंकをお願い。」

フェイトは和輝にアंकを頼むと、バルディシュをサイズフォームにして屑ヤミー達を切る。

「フェイトさん。」

「オイ、和輝！」

和輝はフェイトを心配していると、アंकは和輝に持っていた四角い箱を投げる。

「コレは!?!」

和輝は四角い箱を受け取ると、四角い箱はオーズドライバーに変わる。

「お前、これで変身しろ!!」

「えっ!?!」

アंकの一言に驚く和輝。

「どうする、今の貴様はその女を助けられる力を持っている。」

アंकは赤色のメダル、黄色のメダル、緑色のメダルを和輝に投げる。

「助けるよ。」

和輝はアंकの投げたメダルを受け取る。

「手が届くのに、手を伸ばさなかったら死ぬほど後悔する。」

和輝はメダルをオーズドライバーに差し込む。

「それが嫌だから手を伸ばすんだ」

「そうか、（アイツ、あのバカと同じ事を言うな。）ならやってみる。」

アंकは思い出していた、彼の前のオーズを。

「変身！！」

「タカ、トラ、バッタ、タ・ト・バ、タ・ト・バ、タトバ！！」

和輝は仮面ライダーオーズ タトバコンボ（オーズ）に変身する。

「今の歌っは？」

「歌は気にするな。」

歌を気にするフェイト、気にしないアंक。

「ハッ！！」

オーズはトラクローを展開し屑ヤミー達を切り裂く。

「プラズマランサー！」

フェイトもプラズマランサーで屑ヤミーを倒す。

「おのれ、貴様がオーズだったか。」

カマキリヤミーはオーズとフェイトに向かって鎌で切り裂こうとするが。

「ハッ！」

「だぁ！」

「ぐっ！！」

フェイトがバルディシュでカマキリヤミーの鎌を受け止め、オーズがカマキリヤミーを蹴り飛ばす。

「プラズマスマッシャー！」

「ぐはっ！！」

フェイトはプラズマスマッシャーでカマキリヤミーを撃ち抜く。

「今よ和輝君！！」

「はい！！」

「スキヤニングチャージ！！」

「せいや！！」

「ぐおっ！！」

オーズの必殺キック”タトバキック”が決まり、カマキリヤミーは

爆発と共に数十枚のセルメダルを飛び散る。

「和輝君、今の姿は？」

「あれは、仮面ライダー……」

「オーズ、仮面ライダーオーズだ。」

フェイトは変身を解いた和輝にオーズの事を聞こうとすると、ア
ンクが答える。

「これで、継承者は五人か。」

和輝達の戦いを少し遠くからシンが見ていた。

現在、オーズが使えるメダルは

タカ

トラ

チーター

カマキリ

バッタ

第9話 メダルの戦士（後書き）

アंक達、グリードは9枚のメダルを揃っていますが、半分人間になっっているため完全態の時よりも力が弱くなっています。

次回、仮面ライダー & a m p ; リリカルなのは

ディケイドS

「いきなり、何するんだ!？」

キバK

「預言者から聞いたぞ、この世界の破壊者!!」

クウガM

「翔夜!!」

電王S

「俺も喧嘩に混ぜろよ!!」

健太郎

（モモタロス!?!）

和輝

「戦いを止めないと、アंक!!」

アंक

「ちっ、これで行け!」

なのは

「どうして、ライダー同士が戦うの!」?

次回、激突　ライダー対ライダー

感想を待っています

第10話 激突 ライダー対ライダー（前書き）

今回はライダー同士の戦いです。

それでは仮面ライダー&リリカルなのは、始まります。

第10話 激突 ライダー対ライダー

紅牙がずかとお会う少し前

「君がキバの継承者か。」

「アナタは？」

海鳴市のある公園、紅牙の前にフェルト帽にコートを着た眼鏡の男性が現れる。

「私は鳴滝、預言者だ。」

男性（鳴滝）は預言者と名乗る。

「僕に何か？」

「君に警告をしたい。」

鳴滝はそう言うと言つて紅牙にディケイドSの写真を見せる。

「コレは？」

「奴はディケイド、世界の破壊者だ。」

「世界の破壊者？」

「何か胡散臭いな。」

何処からかキバットが現れる。

「気をつける、ディケイドの継承者はこの世界を破壊する。」

鳴滝はそう言うと言つて灰色のオーロラを出現させ、鳴滝は灰色のオーロラ

ラの中に消えていく。

「世界の破壊者」

「夢か？」

海鳴中学校の屋上で紅牙は目を覚ます。

「おつ紅牙、目覚めたか？」

キバットが紅牙の所にやって来る。

「キバット、授業は？」

「もう終わったよ。」

紅牙はお昼から屋上でずっと寝ていた。

「それにしても良いのか紅牙？」

「何が？」

「すすかちゃんの事だよ、あの時は何も言わなかったけど？」

キバットは紅牙にすすかの事を聞く。

「これで良いんだよ、彼女まで巻き込みたくないんだ。」

紅牙はそう言っていると学校のグラウンドを見る。

「アレは？」

紅牙は何かを見つける。

海鳴中学校 グランド

「まさか学校にまで現れるのかよ、ショッカー帝国！！」
「うるさい、ディケイドの継承者！！」

グランドではモスファンガイアが現れ、学校の生徒達が逃げ、翔夜が変身したディケイドSがモスファンガイアと戦っていた。

「はっ！！」
「ぐっ！！」

ディケイドSはライドブッカーソードモードでモスファンガイアを切り裂き、モスファンガイアはディケイドSから少し離れる。

「おのれ！！」
「くっ！！」

モスファンガイアはディケイドSに向かって口から鱗粉を噴き出す。

「くっ、調子に乗るなよ！！」

ディケイドSはモスファンガイアの鱗粉攻撃を喰らいながらも一枚のカードを取り出す。

「KAMEN - RIDE.....W」

ディケイドSは仮面ライダーダブル サイクロンジョーカー（DSWCJ）に変わり、モスファンガイアの鱗粉攻撃を風の力で吹飛ばす。

「はあっ!!」

「ぐっ!!」

DSWCJはパンチやキックでモスファンガイアにダメージを与えていく。

「そろそろ終わらせるか。」

DSWCJはディケイドSの姿に戻ると一枚のカードをディケイドライバーに装填する。

「FINAL - ATTACK - RIDE.....DE、DE、DEC
ADE」

「はあ!!」

「ぐおっ!!」

ディケイドSはディメンションスラッシュでモスファンガイアを切り裂き、モスファンガイアは爆発する。

「翔夜君!!」

ディケイドSの所になのはが駆けつける。

「遅かったな、もう終わったよ。」

ディケイドSはそう言つと変身を解こうとするが。

「お前がディケイドの継承者か!？」

ディケイドSの前に紅牙が現れる。

「誰だ？」

「あの子は確か、隣のクラスの黒月君。」

なのはは紅牙を知っていた。

「キバット!!」

「あんまり気が進まないが、ガブリ!!」

紅牙はキバットを呼び、キバットは紅牙の右腕を噛みつく。

「変身」

紅牙はキバKに変身する。

「お前がキバ!？」

ディケイドSは紅牙の変身に驚いていると。

「ハッ!!」

キバKはいきなりディケイドSに殴りかかる。

「いきなり、何するんだ!?!」

「預言者から聞いたぞ、この世界の破壊者!!」

キバKはディケイドSにパンチやキックで攻めていき、キバKはディケイドSの攻撃を受け流す。

「預言者とか破壊者とか、解らないんだよ!!」

ディケイドSはライドブッカーソードモードでキバKに切りかかるうとするが。

「ガルルセイバー!!」

キバットは青いフェッスルを吹くと何処からかガルルセイバーが現れ、キバKはキバガルルフォーム（キバG）に変わる。

キバGはガルルセイバーでディケイドSの攻撃を防ぐ。

「何で黒月君が翔夜君と戦うの?」

なのははディケイドSとキバGの戦いに驚いていた。

「アレは翔夜、それにキバ!?!」

怪人の騒ぎを聞きつけた雄司はディケイドSとキバGの戦いを見て、雄司はアークルを出現させる。

「健太郎、アレは!？」

「電王とは違うけど。」

（とにかく行くぜ、健太郎!!）

はやてと健太郎はディケイドSとキバKの戦いを見てみると、突然モモタロスが健太郎に憑依する。

「「変身!!」」

「S W O R D F O R M」

雄司はクウガM、健太郎は電王Sに変身する。

「翔夜!!」

クウガMはキバGに向かって行く。

「俺も喧嘩に混ぜろ!!」

（モモタロス!?!）

電王SはディケイドSに向かって行く。

「僕の邪魔をするな!!」

「何故、翔夜を狙うんだ!？」

キバGはガルセイバーでクウガMに切りかかるうとするが、クウガMはキバGの攻撃を避けていた。

「行くぜ行くぜ!!」

「今度は電王か!？」

電王SはデンガツシャーソードモードでディケイドSに切りかかるうとするが、ディケイドSはライドブッカーソードモードで電王の攻撃を受け止める。

「はやてちゃん!」

「なのはちゃん、一体どうなっているの?」

「解らないよ。」

ライダー同士の戦いに驚くのはとはやて。

「ハッ!!」

「何か武器になる物は?」

キバGの攻撃を避けながら武器になる物を探すクウガMは。

「アレだ!!」

グラウンドに落ちていたスコップを拾うと。

「超変身!!」

クウガMはクウガ タイタンフォーム（クウガT）に変わり、拾ったスコップはタイタンソードに変わる。

「はあっ!!」

「ハッ!!」

クウガTのタイタンソードとキバGのガルルセイバーがぶつかり合う。

「オラアッ!!」

「くっ、コイツ戦い方が滅茶苦茶過ぎだろう!？」

電王SはデンガツシャーでディケイドSに切りかかり、ディケイドSはライドブッカードで電王Sの攻撃を受け流すが、電王SはそのままディケイドSを殴り、ヤクザ蹴りでディケイドSを吹っ飛ばす。

「もういっちょ!!」

電王SはディケイドSに殴りかかろうとするが。

「させるかよ!!」

「ATTACK - RIDE..... SLASH」

「ぐっ!!」

ディケイドSは電王Sの攻撃を喰らう瞬間、ディケイドスラッシュ

で電王Sを切り裂く。

「アレは!?!」

「仮面ライダー!?!」

「どうやらライダー同士が戦っているみたいだな。」

ライダー同士の戦いを見て驚く和輝とフェイト、それを冷静に見るアंक。

「戦いを止めないと、アंक!?!」

「ちっ、これで行け!?!」

アंकは和輝にメダルを投げる。

「解った。」

和輝はアंकの投げたメダルを受け取り、オーズドライバーを腰に着けると。

「変身!?!」

「タカ、カマキリ、チーター」

和輝はオーズ タカキリーターコンボに変身すると、チーターレッグのスピードでディケイドSと電王Sの戦いの間に入る。

「何だ!?!」

「コイツはオーズ!?!」

オーズの参戦に驚く電王SとディケイドS。

「喧嘩の邪魔をするなよ!!」

「お前も俺を狙っているのか!!」

電王SとディケイドSはデンガッシャーとライドブッカードオーズに切りかかるが。

「止めて下さい、どうしてライダー同士が戦うんですか!？」

オーズはカマキリソードで電王SとディケイドSの攻撃を防ぐ。

「どうして、ライダー同士が戦うの!？」

なのは達はライダー同士の戦いを見ていると。

「この音楽は!？」

電王Sがそう言うと、何処からか突然ミュージックホーンが聞こえてくる。

「この音楽は？」

「なのは、空を見て!!」

フェイトはそう言うと空に向かって指を指すと。

「電車が空を飛んでいる。」

はやては赤い電車が空を飛んでいるのを見る。

「デンライナー!？」

電王Sは赤い電車デンライナーを知っていた。

「あの電車、こっちに向かって来ていないか？」

クウガTがそう言うと、デンライナーはライダー達に向かって走って来る。

「「「「「えー!!!!!!」」」」」

ライダー達が叫んでいるとデンライナーはライダー達に向かって突っ込んで来る。

「オイ、お前達早く逃げろ!!!」

デイケイドSは他のライダー達に逃げるよう言っていると、デンライナーは突然ライダー達の前で止まる。

「止まった？」

「どうなっているんだ？」

デンライナーの停車に驚くキバGとオーズ、するとデンライナーのドアが開く。

「継承者の皆さん変身を解いて、デンライナーに来てください。」

客室乗務員と思われる女性がデンライナーから出て来る。

「「「「えっ!?!?!?!」」」」

女性の一言に驚くライダー達。

「それから、魔導師の皆さんもどつぞ。」

「「「えっ!?!?!」」」

なのは達も女性の一言に驚く。

T o b e c o n t i n u e d

第10話 激突 ライダー対ライダー（後書き）

次回、『継承者の秘密と伝説の語り手』

オーナー「次回は我々の出番ですよナオミ君。」

ナオミ「そうですねオーナー、コーヒーの準備しておきます。」

コハナ「感想を待っています。」

第11話 継承者の秘密と伝説の語り手（前書き）

今回は、デンライナーのオーナーが継承者の秘密を話します。

それでは仮面ライダー & amp; リリカルなのは、始まります。

第11話 継承者の秘密と伝説の語り手

「翔夜どうなっているんだ？」

「俺が知るかよー!」

「モモタロスは、この電車の事をデンライナーって言っていたけど。」

「

「結構広いな。」

「そうだね。」

デンライナーの車内では変身を解いた雄司、翔夜、健太郎、和輝、紅牙の面々と。

「そう言えばなのは、真導君の事を翔夜って呼んでいたけど？」

「何時の間に、そう言う仲に？」

「それは、その／＼／＼／＼／＼／」

フェイト、はやて、顔を真っ赤にしたのはが座っていた。

「コーヒーお持ちしました。」

先程の客室乗務員の女性が翔夜達にコーヒーを持って来る。

「それより、何で俺を狙ったんだ？」

翔夜は紅牙に狙われた理由を聞くと。

「それは、その……………」

『預言者が言っただ、ディケイドの継承者はこの世界を破壊するってな。』

紅牙の代わりにキバットが説明する。

「ふざけるな!!」

突然、雄司が紅牙の胸ぐらを掴む。

「翔夜は好きで破壊者になった訳じゃ無いんだ、それを誰かに言われたくらいで!!」

「よせ、雄司!!」

「落ち着いて下さい!!」

雄司は紅牙に怒りの形相で紅牙に怒っていると、翔夜と和輝に止められる。

「それにしても、継承者って一体？」

はやてが継承者に疑問を感じていると。

「それについては、私が説明しますよ。」

突然、貫禄ある中年の男性とモモタロス、モモタロスの角を引っ張る少女が現る。

「アナタ達は？」

和輝が男性に尋ねると。

「私はデンライナーのオーナー、ちなみに彼女は客室乗務員のナオミ君と、我々のサポートをしている。」

「ハナです。」

「痛いんだよ、コハナK…がつ!!」

^{オーナー}男性は客室乗務員のナオミとモモタロスを蹴り飛ばしていたハナの紹介をする。

「ですが今は、伝説の語り手でもありますけど。」

「伝説の?」

「語り手!？」

オーナーの一言に驚く雄司と和輝。

「あなた方にお話しましょう。」

オーナーがそう言うと、突然周りが暗くなる。

「かつて、あなた方が住む世界とは別の様々な世界には様々な悪の組織が人々を襲っていました。」

オーナーと翔夜達の景色は一つの地球と周りには様々な星が現れる。

「しかしある時、悪の組織に立ち向かう戦士が現れました。」

オーナーはそう言つと一つの星から映像が写される。

「クウガだ。」

雄司はそう言うと、写し出された映像にはグロンギと戦うクウガの姿があった。

「それが仮面ライダー」

なのははオーナーに尋ねると。

「その通りです、しかしある時、悪の組織達は一つの組織”大ショッカー”そして”スーパーショッカー”となって全世界を襲おうとしました。」

オーナーがそう言うと一つの星から様々な怪人達の映像が写る。

「しかし大ショッカーやスーパーショッカーは仮面ライダー達によって壊滅された筈なのですが。」

様々な怪人達が映し出された絵から鷹を中心に無数の蛇が絡みついた旗の絵に変わる。

「スーパーショッカーの残等が何者かと手を組み、ショッカー帝国となって他の世界を襲いだしたんです。」

旗の絵が変わり、様々な怪人達はクウガ、アギト、龍騎、ファイズ、ブレイド、響鬼、カブト、電王、キバ、ディケイド、W、オーズに向かって襲いかかろうとする。

「ショッカー帝国はライダー達に戦いを挑み、そしてとある世界で

ライダー達は変身出来なくなる覚悟でショッカー帝国を自らの力を全て使って封印したのです。」

オーナーはそう言うと、周りの景色は元のデンライナーの車内に戻る。

「そして、僅かに残ったライダー達の力は新たな変身者を探すべく何処かに飛んでいきました。」

オーナーはそう言うと椅子に座る。

「その力に選ばれた人間が継承者って訳だな？」

翔夜はそう言うとコーヒーを飲む。

「その通りです、真導君。」

オーナーはそう言うと何処からかスプーンを取り出し磨き始める。

「そう言えば真導君はどうして私達の協力を断ったの？」

フェイトは翔夜に質問する。

「……………」

フェイトの質問に黙る翔夜そして。

「悪いが話せない。」

翔夜はそう言つとデリライナーから出て行った。

T o b e c o n t i n u e d

第11話 継承者の秘密と伝説の語り手（後書き）

次回、『翔夜の過去』

翔夜「雄司！！」雄司の首を絞める。

雄司「俺まだ何もしていないって！！」

健太郎「止めた方が良いかね？」

和輝「止めといった方が身のためだと思っけど。」

紅牙「感想を待っています。」

第12話 翔夜の過去（前書き）

今回は翔夜の過去が少し明らかになります。

それでは仮面ライダー&リリカルなのは、始まります。

第12話 翔夜の過去

デンライナー車内

翔夜が出て行った後のデンライナーの車内では、

「何で真導君は、私達をショッカー帝国との戦うなって言っただろう？」

フェイトはそう言っていると雄司の方を見る。

「確かには、絶対何かある筈や？」

はやても雄司の方を見ると。

全員の視線が雄司に向くと。

「さて、俺も降りようかな。」

雄司は急ぎ足でデンライナーから出て行くつもりだが。

「『バインド！』」

「えっ？」

なのは、フェイト、はやては雄司をバインドで縛る。

「何で逃げるの、雄司君。」

はやては笑顔で雄司に問い詰める。

「俺は知らないよ、翔夜が他の人を巻き込みたくない理由何て!!」

「知っているんだね。」

「あつ」

雄司は知らないと言うが、フェイトは雄司が嘘をついているとすぐに解る。

「お願い冴島君、翔夜君に何があつたのか教えて。」

なのはは雄司に話すように頼むと。

「解つた、話すよ。」

雄司は翔夜の過去をなのは達に話す。

「アイツの両親はショッカー帝国に殺されたんだ。」

「「「えっ!?!」」」

雄司の言葉に驚くなのは達。

「何で、何があつたの?」

フェイトは雄司に理由を聞くと。

「半年前、アイツの両親は優秀な科学者だった、当時は結城博士の研究を手伝っていたんだけど、その時研究を知ったシヨツカー帝国は結城博士に刺客に送ったんだ。」

「それで、どうなった？」

「はやては雄司に尋ねると。」

「その時に俺と翔夜は結城博士の研究室に来ていたんだ、そこで両親は翔夜を庇って……」

「殺されたんだね。」

「なのははそう言う」と。

「ああ、生き延びた翔夜は結城博士からディケイドライバーを受け取り、ディケイドに変身して刺客を倒したんだ。」

「雄司はそう言う」と悲しい顔になる。

「真導君にそんな事があったんだ。」

「シヨツカー帝国とそんな因縁があったんだ。」

翔夜の過去を聞いた健太郎と和輝も悲しい顔になっていた。

「もしかして翔夜君は、私達が傷ついて欲しくないから、シヨツカー帝国と戦うなって言っているの？」

なのは雄司に質問する。

「多分な、もしかしたらアイツはショッカー帝国を1人で倒すつもりだろう。」

雄司は質問に答える。

「私、翔夜君を探してくる。」

なのはそう言つと翔夜を探しにデンライナーから出て行く。

「……………」

『オイ、紅牙!?!』

紅牙は無言でデンライナーから出て行くと、キバットは紅牙を追いかける。

「和輝、俺達も追いかけるぞ!！」

「解つた!!!」

雄司と和輝は紅牙達の後を追いかけようとデンライナーから出て行く。

「私も行くよ。」

フェイトも和輝達を追いかけようとデンライナーから出て行く。

「健太郎、ウチらも!!」

「どっちを追いかけるの？」

はやてと健太郎もなのはと翔夜か紅牙達のどちらか追いかけようとするが。

「待って下さい健太郎君、君にはもう一つお話があります。」

オーナーは健太郎を呼び止める。

T o b e c o n t i n u e d

第12話 翔夜の過去（後書き）

次回から紅牙side、健太郎side、翔夜sideの順番で話を進めるつもりです。

感想を待っています。

第13話 思いと友達と最強コンボ（前書き）

今回はあのグリードもちよっただけ登場です。

それでは仮面ライダー & a m p ・リリカルなのは、始まります。

第13話 思いと友達と最強コンボ

海鳴市 とある河原

「あの人もあんな過去があつたんだ。」

海鳴市のとある河原では翔夜の過去を聞いた紅牙は後悔していた。

「もしかして、預言者が言っていた事って間違いなのかな。」

紅牙は考えながら空を見上げると。

「おーい!!」

「黒月君!!」

雄司と和輝が紅牙の所にやって来る。

「君達、どうして此处に？」

和輝と雄司に驚く紅牙。

『お前を心配して来たんだよ紅牙。』

キバットも紅牙の所にやって来る。

「そうか、君は戦う理由が無いことに悩んでいるんだね。」
「ハイ」

紅牙は和輝に悩みを打ち明けていた。

「そう言えばどうして黒月はキバの力を手に入れたんだ？」

雄司は紅牙に質問すると。

「僕は半年前のある日、いつものように公園でヴァイオリンの先生の授業を教わった夜に、キバットに出会ったんだ。」

『その時にファンガイアも現れて大変だったぜ、倒したけどな。』

紅牙とキバットはライダーになった理由を話す。

「そうなんだ。」

「やっぱり、みんな色々あったんだな。」

理由を聞いた和輝と雄司は納得すると。

「二人はどうしてライダーに？」

今度は紅牙が雄司と和輝にライダーになった理由を聞くと。

「俺は誰も傷ついて欲しくなかったからな、あの時はちょっと無我夢中でクウガの力を手に入れたのかな。」

少し照れながら話す雄司。

「俺もフェイトさんを助けたくて、その思いがあったからオーズに変身したんだ。」

空を見上げながら話す和輝。

「そうなんだ。」

紅牙は二人の話を聞いていると。

「みんな!!」

フェイトに和輝達の所に駆けつける。

「フェイトさん!!」

「そう言えば和輝、お前は何でフェイトを慕っているんだ？」

フェイトを気づいた和輝は手を振っていると、雄司に質問される。

「一年位前に俺はフェイトさんに助けられたんだ、だからこの人の手伝いをするって決めたんだ。」

和輝が笑顔で雄司の質問に答えっていると。

「そうだ黒月君、俺達と友達なろうぜ。」

「えっ？」

突然雄司は紅牙と友達にならないかと言う。

「ほら、戦う理由が無いなら、友達の為に戦うってのも有りかなって思ってたさ。」

雄司はそう言うのと立ち上がり、紅牙に向けて手を差し伸べる。

「それ良い考えだよ!!」

そう言うのと和輝も紅牙に向けて手を差し伸べる。

「なら、私も黒月君のお友達に。」

フェイトも紅牙に手を差し伸べる。

「みんな、……………宜しく。」

紅牙は驚いていたが、雄司達と握手する。

『良かったな紅牙、友達が出来て!!』

キバットは嬉し泣きしながら紅牙の周りを飛んでいると。

「和輝、ヤミーの気配だ!」

何処からかアंकが現れ、ヤミーが現れた事を和輝達に知らせる。

「アंक急に現れるなよ、せっかく良い雰囲気だったのに。」

アंकの登場に呆れる和輝。

「知るか、それより早く行くぞ!!」

「解ったよ、フェイトさん!!」
「私も行くよ!!」

アंक、和輝、フェイトの三人はヤミーの現れた場所に向かっていく。

「冴島君、僕達も!!」

「ああ、それから雄司で良いよ!!」

紅牙と雄司も和輝達の後を追う。

海鳴市 市街地

海鳴市の市街地では数十体の鮫のヤミー、サメヤミーと巨大な虫のヤミー、オトシブミヤミーが人々に襲いかかるうとしていた。

「ヤミーがあんなに!?!」

「アंक、ヤミーにも色々種類がいるのか?」

「ああ、あのサメのヤミーはメズールのヤミーで巨大な虫のヤミーはウヴァのヤミーだな。」

ヤミーに驚くフェイト、和輝も驚きながらアंकに尋ねると、アंकは冷静にヤミーの説明を簡単にすると三枚のメダルを和輝に渡す。

「とにかく、止めよう!!」

和輝はメダルを受け取り、オーズドライバーに装填すると。

「ちょっと待った!!」

雄司と紅牙が和輝達と合流する。

「僕も手伝います、キバット!!」

『よっしゃ、キバットで大暴れだ!!』

紅牙はキバットを呼ぶと、何処からかキバットが現れる。

「初めてのライダー同士の共同戦線だな!!」

雄司もアークルを出現させる。

『ガブリ!!』

「『変身!!』」

「タカ、カマキリ、バッタ」

クウガMに変身した雄司、キバKに変身した紅牙、オーズ タカキ
リバコンボに変身した和輝。

「セットアップ!」

「s e t u p」

フェイトもバリアージャケットを纏い、バルディッシュを構える。

「行くぜ!!」

クウガMの合図と同時にキバK達はサメヤミーに立ち向かう。

「はあっ!!」

「ハッ!!」

クウガMとキバKはパンチやキックでサメヤミーを倒していく。

「はあっ、はっ!!」

オーズはカマキリソードでサメヤミーを切り裂く。

「アंक、鯨のヤミーが全然減らないよ!」

「メズールのヤミーは卵を破壊しないと幾らでも出てくるぞ!!」

フェイトはバルディッシュ サイズフォームでサメヤミーを切り裂くがサメヤミーの数が一向に減らず、アंकはフェイト達にアドバイスをする。

「でも、その卵って何処に有るんだ?」

「もしかして、アレじゃないかな?」

クウガMはサメヤミーを殴り飛ばしながら周りを見渡していると、

キバKはオトシブミヤミーの背中を指す。

オトシブミヤミーの背中の子い球体からサメヤミーが飛び出てくる。

「アレだな。」

背中の青い球体を確認したアソクはアレがサメヤミーの卵だと確信する。

「和輝、鯨のヤミーは俺達を防ぐからお前はあのデカいヤミーを！」

「解った！！」

クウガMの指示でオーズはオトシブミヤミーに向かって行く。

「超変身！！」

クウガMはクウガ ドラゴンフォーム（クウガD）に変わり、近くに落ちていた木の棒をドラゴンロッドに変える。

「はあっ！！」

クウガDはドラゴンロッドでサメヤミーを吹っ飛ばす。

「ハッ！！」

キバKはパンチやキックでサメヤミーを吹っ飛ばす。

「せいや!!」

オーズはオトシブミヤミーに向かってカマキリソードで切りかかる
うとするが。

「ぐぉん!!」

「うわっ!!」

オトシブミヤミーは前脚でオーズを吹っ飛ばし、オーズは壁に叩き
つけられる。

「流石に1人はキツいな。」

オーズはフラフラになりながらも立ち上がると。

「オーズ、俺のメダルを使え!!」

何処からかオーズに向かって一枚のメダルが投げられる。

「このメダルは!?!」

メダルを拾ったオーズは投げられた方向を見ると、オールバックに
緑色のジャケツトを着た男性が立っていた。

「死ぬなよ、オーズの継承者。」

男性はそう言つと姿を消す。

「今の人は？……とにかく使わせて貰うよ！！」

オーズはそう言つとタカのメダルを入れ替えて先程のメダルを装填する。

「クワガタ、カマキリ、バッタ、ガータ、ガタ、ガタキリツバ、ガタキリバ！！」

オーズはガタキリバコンボに変わる。

「『何だ、今の歌は！？』『』『アレはウヴァのコンボだ！？』」

オーズの歌に驚くクウガD、キバK、キバットとガタキリバコンボに驚くアंक。

「うおー！！！！」

オーズは空に向かって吠えと、オトシブミヤミーに向かって突っ込む。

「ぐおおおん！！」

オトシブミヤミーは卵から数十体のサメヤミーを出現させると、サメヤミーはオーズに向かって突っ込む。

「はぁあつ！！」

オーズは突然五十体程に分身して、サメヤミーにカマキリソードで切り裂いていく。

「分身した！」

フェイトはオーズの分身に驚く。

「凄いな。」

「確かに。」

クウガDとキバKもサメヤミーを倒しながらもオーズに驚いていた。

「「「スキヤニングチャージ！！」」」

「「「せいや！！」」」

「ぐおおおん！！」

オーズは必殺技のガタキリバキックでオトシブミヤミーと卵に決め、オトシブミヤミーは爆発し数十枚のセルメダルが飛び散る。

「はあっ！！」

『ウエイクアップ！！』

「ハッ！！」

「プラズマランサー！」

クウガDはスプラッシュドラゴンでキバKはダークネスムーンプレイクでフェイトもプラズマランサーでサメヤミーを倒す。

「終わった！」

サメヤミーを倒したクウガD達は変身を解くと、和輝は突然倒れてしまう。

「和輝君!!」

「どうしたの？」

「大丈夫か!？」

和輝を心配するフェイト、紅牙、雄司。

「どうやらウヴァの奴が和輝にメダルを渡したみたいだな。」

アंकは呟きながらクワガタのメダルを見ていた。

現在、オーズが使えるメダルは

タカ

トラ

チーター

クワガタ

カマキリ

バッタ

ゴリラ

第13話 思いと友達と最強コンボ（後書き）

次回は健太郎 sideのお話です。

感想を待っています。

第14話 八神家とタロウズ（前書き）

今回はほのぼのとした話です。

（ 戦闘はありません。 ）

それでは仮面ライダー&・りりカルなのは、始まります。

第14話 八神家とタロウズ

デンライナー 車内

「それでオーナー、お話しして？」

はやてがオーナーに尋ねる。

「ハイ、実はモモタロス君の仲間の事です。」

「モモタロスの仲間！？」

オーナーの一言に驚く健太郎。

「そう言えばオッサン、亀公達は何処に居るんだよ？」

モモタロスは仲間の事を聞こうとする。

「私も彼等と連絡が出来ない状況でして、少し困っているんですよ。」

オーナーはそう言うとナオミが持ってきたコーヒーを飲み始める。

「でも、多分モモタロスの仲間なら大丈夫でしょう？」

はやてはそう言っていると。

「そうはいかないですよ、はやてさん。」

ハナが溜め息をつきながらモモタロスの仲間の事を語り出す。

「アイツ等は私が見張らないと、何をすのか解らないし、……………それに」

ハナはモモタロスの顔を見て再び溜め息をつく。

「外見がモモタロスと似たり寄ったりだから。」

「「確かに」」

はやてと健太郎はモモタロスの顔を見て納得する。

「どういう意味だよ!!!」

モモタロスは三人の反応にツッコむ。

海鳴市 八神家

その頃、八神家では

「参る!!!」

「行くぜ!!!」

「どんと来るんやで!!!」

庭で剣の騎士・シグナムと鉄槌の騎士・ヴィータはそれぞれの武器を構え、斧を持った熊の異形に突っ込む。

「ハッ！」

シグナムは熊の異形に向かってレヴァンティンで切りかかるが。

「うおりゃー!!」

熊の異形は斧でシグナムの攻撃を防ぐが。

「後ろがから空きだ!!」

ヴィータはグラーフアイゼンで熊の異形の後ろを取るが。

「なんの!!」

熊の異形は片手でヴィータの攻撃を防ぐ。

「強いな、キンタロス!!」

「コレがイマジンとやらのパワーか!？」

「まだまだ、泣けへんな。」

ヴィータとシグナムは熊の異形キンタロスの強さに感心し、キンタロスは余裕で二人の相手をする。

「凄いですねキンタロスさん、シグナムやヴィータの二人を相手にして互角に戦うなんて。」

湖の騎士・シャマルはキンタロスとシグナム、ヴィータの戦いを見ていると。

「キンちゃんも僕達の中では一番強いからね。」

シャマルの隣に居た亀の異形はキンタロスの説明をする。

「でも、ウラタロスさんも強いですよ。」

「さあね。」

シャマルは亀の異形^{ウラタロス}に質問するが、ウラタロスは知らん顔をする。

「ねえねえ亀ちゃん、そう言えば継承者探しはどうするの？」

盾の守護獣・ザフィーラ（子犬Ver）とじゃれあっていた龍の異形は突然ウラタロスに尋ねる。

「リュウタロスちゃん、電王の継承者が気になるの？」

シャマルは龍の異形^{リュウタロス}に尋ねると。

「だってパスを持っているのはモモタロスだよ、絶対アテにならないよ。」

そう言っているとリュウタロスはザフィーラから離れる。

「確かにそうだね、そろそろ僕達も動かないといけないんだけどね。」

ウラタロスはそう言っているとキンタロス達がやって来る。

「キンタロス、今日も手合わせにつき合わせてすまないな。」

シグナムはキンタロスを御礼を言う。

「かまへんで、俺達はアンタ達に借りがあるんや。」

キンタロスはそう言うと言つて斧をしまふ。

「みんな、はやてちゃんが帰ってきましたよ。」

ウラタロス達の所にリインフォース・ツヴァイ（リイン？）がやって来る。

「おっと、二人共隠れるよ。」

ウラタロスの合図と共に三人は何処かに隠れる。

「ただいま、みんな居るかな？」

「「お邪魔します。」」

はやて、健太郎、ハナの三人が玄関から入ってくる。

「おかえりはやてちゃん、そちらの二人は？」

シャルは健太郎とハナに気づく。

「初めまして、沢田 健太郎です。」

「ハナでS「オイ、亀公達の匂いがするぞ!!」」

健太郎とハナが自己紹介をすると、突然モモタロスが出て来る。

「今の声って？」

「モモの字!？」

「何でもモモタロスが此処に居るの!？」

ウラタロス、キンタロス、リュウタロスはモモタロスに気づき玄関に出て来る。

「アンタ達、何で此処に居るの!？」

ハナはウラタロス達に気づく。

「はやて、コレはその……………」

「申し訳ありません、主はやて!!」

騒ぎを聞きつけたヴィータとシグナムははやて達の所に駆けつける。

「とりあえず、話し合おうか？」

はやてはモモタロス達と話し合う事にする。

居間には健太郎、はやて、シグナム、シャマル、ヴィータ、リイン
?と

「全くアンタ達は!」

怒りの形相のハナと

「何でこうなる……」

「僕達は何をしたの……」

「相変わらずやな……」

「ハナちゃん、酷いよ……」

ボロボロになったタロウズが居た。

「それで、シグナム達は三日前に空から落ちてきたモモタロスの仲
間を拾ったって言うわけやな？」

はやてはシグナム達から事情を聞いていた。

「ハイ、本当に申し訳ありません。」

「隠してゴメン、はやて。」

「はやてちゃんに、余計な心配をかけたくなかったの。」

シグナム、ヴィータ、シャマルの三人ははやてに謝っていると。

「別に気にしてないんだけどな。」

はやてはそう言うとモモタロス達を見る。

「先輩、あの子が電王の継承者？」

「ああ」

ウラタロスは小声でモモタロスに尋ね、モモタロスは質問に答える。

「何か良太郎に似ているね。」

「そうやな、良太郎と同じ雰囲気を感じるで。」

リュウタロスとキンタロスが健太郎を見ていた。

「そう言えば健太郎達は何者だ？」

「説明するよ。」

ヴィータは健太郎達の事を尋ねると、はやてはヴィータ達に健太郎達の事を説明する。

「ショッカー帝国に仮面ライダー！？」

「海鳴市でそんな事が起きているのか！？」

「それで、健太郎君ははやてちゃんとどういう関係？」

シグナムとヴィータははやての話に驚き、シャマルは健太郎にはやてとの関係を尋ねると。

「シャマル、急に何を聞くんや／＼／＼／＼」

「友達です。」

シャマルの質問にはやては顔を真っ赤にするが、健太郎はすぐに答える。

「そ、その通りや（まだ友達扱い何やね健太郎。）。」

はやては少し残念な顔をする。

（おやおや、どうやら電王の継承者はかなり鈍感だね。）

ウラタロスの顔は少しニヤニヤしていた。

「それより仮面ライダーの力が見てみたい、私と手合わせをしないか？」

シグナムは健太郎に手合わせを申し込む。

「えっ、でも僕だけじゃ……」

「良いぜ、相手をしてやるよー!」

健太郎が悩んでいると、モモタロスが手合わせをやりと言い出す。

「えっ、ちよつとモモタロス!？」

健太郎は慌てるがすぐにシグナムとの手合わせを始める事になり、その後三時間程の手合わせが行われた。

T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

第14話 八神家とタロウズ（後書き）

次回は翔夜sideの話です。

作者「」

雄司「どうして作者の奴、ノリノリ何だ？」

翔夜「この作品のスピノフを考えているんだって。」

感想を待っています

第15話 RIDER HERO（前書き）

今回は翔夜となのはが中心のお話です。

それでは仮面ライダー & a m p・リリカルなのは、始まります。

第15話 RIDER HERO

海鳴市 とある公園

デンライナーから出て行った翔夜は公園で写真を撮っていた。

「これで良いんだ、これで……………」

翔夜は先程の事を考えながら写真を撮ろうとすると。

「翔夜君！」

なのはが翔夜の所に駆けつける。

「なのは……………」

翔夜はなのはを見ると暗い表情になる。

「翔夜君の事、冴島君から聞いたよ。」

「アイツ、勝手に話したな！」

公園のベンチに座った二人は少し離れて話し合っていた。

「翔夜君、本当に一人でショッカー帝国と戦うの？」

なのはは翔夜に尋ねる。

「ああ、俺は一人でショッカー帝国を破壊する。」

翔夜は立ち上がり、なのはに告げる。

「俺は破壊者なんだ、だから俺に関わらないでくれ。」

翔夜はそう言うのと立ち去ろうとするが。

「見つけたぞ、破壊者!!」

翔夜達の前に灰色のオーロラが現れ、数体のショッカー戦闘員、デイスパイダー、そして鳴滝が現れる。

「お前が預言者の鳴滝か!?!」

翔夜は鳴滝に尋ねる。

「どうやら、私の事を知っているみたいだな。」

「結城さんから、お前の話は聞いているんでね。」

翔夜は鳴滝に指を指す。

「結城 丈二め、やはり私の事を感じているみたいだな。」

鳴滝は怒りの形相で翔夜を見る。

「お前は此处で俺が倒す!!」

翔夜はディケイドライバーを腰に着け、カードを取り出す。

「嘗めるなよ、破壊者!!!!」

鳴滝はそう言うと一緒に下がリディスプレイパイダーやショッカー戦闘員が前に出る。

「変身!!」

「KAMEN - RIDE..... DECADE STRIKE」

「はあっ!!」

翔夜はディケイドSに変身しライドブッカー ソードモードでショッカー戦闘員に切りかかる。

「私も!」

なのはもレイジングハートを取り出すが。

「なのは、お前は手を出すな!!」

「でも、翔夜君一人で!」

ディケイドSはなのはに戦うと言って、なのはは戸惑う。

「魔導師よ、破壊者に関わらない方が身のためだぞ!!!!!!!!!!」

鳴滝はなのはに向かって叫ぶ。

「翔夜君は破壊者じゃない、私達の仲間です！」

「えっ！？」

「何だと！？」

なのはの一言に驚くディケイドSと鳴滝。

「翔夜君は私達のヒーロー、仮面ライダーです。」

なのははそう言うとレイジングハートを起動する。

「セットアップ！」

なのははバリアジャケットを纏いレイジングハートを構える。

「ヒーローか、俺がそう呼ばれると思わなかったよ。」

ディケイドSは苦笑するとライドブッカードでショッカー戦闘員を切り裂いていく。

「ATTACK - RIDE..... BLAST」

「アクセルシューター！」

「ハッ！！」

なのははアクセルシューター、ディケイドSはディケイドブラストでショッカー戦闘員達を撃ち抜く。

「グウォン！！」

デイスパイダーがディケイドS達に向かって蜘蛛の糸を放つが。

「はあっ！！」

ディケイドSがライドブッカード蜘蛛の糸を断ち切った。

「ディバインバスター！！」

なのははデイスパイダーに向けてディバインバスターを放つ。

「グオオオン！！！！」

デイスパイダーはなのはの攻撃を食らって爆発する。

「後はお前だけだぞ、鳴滝！！」

ディケイドSは鳴滝にライドブッカード刃を向ける。

「こうなったら！！」

鳴滝は灰色のオーロラを出現させる。

「アイツ、まだ何かあるのかよ。」

ディケイドSはライドブッカードを構える。

「今日の所は引き上げだ!!」

鳴滝は急ぎ足で灰色のオーロラの中に逃げって行った。

「にやはは、逃げちゃったね。」

「ああ」

少し笑いながらバリアジャケットを解くのはと呆れた顔で変身を解く翔夜。

「ありがとう、なのは。」

「えっ／＼／＼」

翔夜は小さい声でなのはにお礼を言つとなのはの前から去っていった。

「翔夜君／＼／＼／＼」

なのはは顔を赤くしながら翔夜が去っていくのを見ていた。

（何で俺、なのはを見てドキドキしているんだ？）

翔夜は顔を赤くしながら何故か自らの心がドキドキしている事に気づいていた。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第15話 RIDER HERO（後書き）

緊急予告！！

雄司

「どうしたんだ、作者？」

翔夜

「何でも、この小説のスピンオフのタイトルが決まったらしい。」

タイトルは

仮面ライダー & amp ; リリカルなのは - スピンオフラジオ -
（仮）

なのは

「どんな内容なの？」

雑談有り、企画有り、裏話有りで色々なコーナーをやる予定です。

和輝

「それより、俺達のキャラ設定は？」

次回やります。

みんな

「これからも、仮面ライダー & a m p ・りりカルなのは - 継承者と魔法少女 - を宜しくお願いします。」

感想も待っています。

オリジナルキャラ紹介 PART 1（前書き）

ちょっとネタバレがあるので注意です。

オリジナルキャラ紹介 PART 1

名前：真導 翔夜 （しんどう しょうや）

性別：男

年齢：13

容姿

少し長い黒髪で右側に赤いメッシュがついている、瞳の色は黒

自己中で独善的、大ざっぱな性格だが常に仲間の事を信用している。色々な事を常人以上にやるが、趣味の写真撮影だけは酷い（雄司談）半年前にショッカー帝国に両親を殺され、ショッカー帝国と戦う為にディケイドの力を手に入れ戦う。
ちなみに、恋愛関係にはかなりの鈍感。

変身するライダーはディケイド Ver ストライク

名前：真導 ナツミ （しんどう なつみ）

性別：女

年齢：9

容姿

ロングの黒髪でちょっと茶色が混じっており、瞳の色は黒

翔夜の妹で、かなりのしつかり者。

数少ない翔夜を止められる者で笑いのツボの使い手。

翔夜達が仮面ライダーだと知らない。

名前：真導 栄市郎（しんどう えいいちろう）

性別：男

年齢：不明

容姿

白髪で常に眼鏡をかけている

翔夜とナツミの祖父で真導写真館の館長、とにかく謎の多い人物。

名前：冴島 雄司 （さえじま ゆうじ）

性別：男

年齢：13

容姿

ファイナルファンタジーに出てくるティータに似ているが髪の色は黒

翔夜の一番の友人で翔夜達が海鳴市に来る前から翔夜達の事を良く知っている。

友達思いで常に友達の事を思っている。

あまり頭は良くないらしく、それで何時も翔夜から馬鹿にされる。

ちなみに彼の両親は別世界とある財閥のトップらしい。

変身するライダーはクウガ

名前：黒月 紅牙 （くろつき こうが）

性別：男

年齢：13

容姿

家庭教師ヒットマンREBORNに出てくる古里 炎真に似ている
が髪の色は金

人見知りの性格でキバットと出逢うまでは学校にも行かずに何時も
自宅に引きこもっていた過去がある。

公園で出会ったとある天才からバイオリンを教わりその腕前はプロ
級。

変身するライダーはキバ

名前：沢田 健太郎 （さわだ けんたろう）

性別：男

年齢：13

容姿

家庭教師ヒットマンREBORNに出てくる沢田 綱吉に似ている。

気弱な性格でかなりの不幸体質、1日に数回は酷い目に遭う。

他人に対しては優しく、どんな時でも困っている人を助けようとす
る。趣味は読書と星を見ること。

恋愛関係は翔夜と同じぐらい鈍感。

変身するライダーは電王

名前：千樹 和輝（せんじゅ かずき）

性別：男

年齢：13

容姿

ウルトラマンネクサスに出て来る千樹 憐に似ている。

明るく人懐っこい性格、かなり天然で子供のような一面がある。
一年前にフェイトに助けられて以来、フェイトの助手（自称）をしている。

実はフェイトに恋している。

変身するライダーはオーズ

オリジナルキャラ紹介 PART 1（後書き）

次回からいよいよ新展開。

スピノフラジオも宜しく。

第16話 手紙と秘密基地とハッピー、バースデー！！（前書き）

これまでの仮面ライダー & a m p ・リリカルなのは、

一つ、継承者達は伝説の語り手の1人、デンライナーのオーナーに出逢う。

二つ、オーナーが継承者の秘密とショッカー帝国について話す。

三つ、継承者達は様々な思いを秘めながらもショッカー帝国と戦う事を改めて決意する。

それでは始めます。

第16話 手紙と秘密基地とハッピー、バースデー！！

デンライナーのオーナーと出逢ってから一週間後

海鳴市 とある古いビル

「此処だな。」

「結構古いビルだな。」

翔夜、雄司は海鳴市のとある古いビルに来ていた。

「手紙を見ると此処だけど。」

「本当に人が居るのかな？」

「それで、俺達継承者が居るのは解るけど。」

手紙を確認しながら古いビルを見る紅牙と健太郎、そして和輝は隣に居る人物に疑問を感じていた。

「どうしたの和輝君？」

「別におかしな事は無いけどな。」

「そうだよ和輝君。」

和輝の隣に居たフェイト、はやて、なのはの三人。

「なあ翔夜、手紙って俺達継承者だけに来たよな？」

「ああ、だから…何なんだ？／／／」

雄司は翔夜に尋ねるが、翔夜はなのはを見て少し赤くしていた。

（（翔夜（真導君）、もしかしてなのはちゃんの事が好きなのか？）（？））

翔夜となのは以外の面々は心の中で翔夜に疑問を感じていた。

「どうしても良いが、早く中に入るぞ!!」

何故かついて来たアंकの一言で全員は古いビルの中に入る。

「待っていたぞ。」

古いビルの中に入るとライダージャケットを着た前園 シン（前園）が立っていた。

「アナタは？」

「前園さん!!」

紅牙は前園を見て尋ねようとするが、面識があつた雄司は前園に驚く。

「知り合いなんですか？」

健太郎は雄司に尋ねる。

「この人は前園 シンさん、俺がクウガになった時に居た人。」

雄司は全員に前園の紹介をする。

「もしかして、前園さんが俺達に手紙を？」

和輝は前園に尋ねる。

「いや、俺はある人に君達を案内するように頼まれたただけだ。」

前園はそう言うのとエレベーターのボタンを操作する。

「ある人って、誰ですか？」

紅牙は前園に質問する。

「我々、組織のスポンサーだ。」

前園はそう言うのとエレベーターの扉が開き、全員はエレベーターの中に入る。

「何処に向かうんですか？」

「地下だ。」

健太郎の質問に前園が答えると、エレベーターはどんどん地下に向かって行く。

数分後

「着いたぞ。」

前園はそう言うと全員はエレベーターから出る。

「コレは？」

「凄い！」

エレベーターから出ると、そこには様々な電子機器と数人のオペレーターが座っていた。

「此処は作戦司令室、みんなコチラの部屋に来てくれ。」

前園は全員に簡単な説明をすると隣の部屋に案内する。

「此処で待っていてくれ。」

部屋を案内すると前園はみんなを部屋に入れる。

「この部屋は？」

「ミーティングルームだ。」

なのはの質問に答えた前園は部屋にあった電子機器を操作する。

「そろそろ教えて下さい。」

「アンタ達は一体？」

フェイトとはやてが前園に尋ねる。

「我々はライダー隊、シヨッカー帝国に対抗する組織だ。」

前園はそう言うのと部屋のモニターからライダー隊のマークのような物が映し出される。

「「「ライダー隊!?!」」」

「で、そのライダー隊のスポンサーが俺達は何の用なんだ?」

全員が驚くが翔夜は前園に質問しようとする。

「それは私が説明しよう、継承者諸君!」

モニターが突然変わり、テンションの高い男性が映し出される。

「「誰!?!」」

男性に驚く健太郎と雄司。

「鴻上か。」

「アंक、知っているの?」

アंकは男性と面識が有るようで、和輝はアंकに尋ねる。

「奴は、「ハッピー、バースデー、継承者諸君!」」

アंकは男性の説明をしようとするが、男性はいきなり叫ぶ。

「紹介しよう、我々ライダー隊のスポンサー、鴻上グループの会長、
鴻上 光生さんだ。」

前園は男性（鴻上）の紹介をする。

「それと同時に今は伝説の語り手でもあるよ、前園君。」

鴻上は前園に注意する。

「「「えっ！？」「」」

「伝説の語り手って、一体何人居るんだろう？」

全員が驚く中、和輝は疑問を感じていた。

「その様子だと既に伝説の語り手に出逢っているようだな、それと
オーズの継承者君、我々伝説の語り手は私を含めて三人居るんだよ。」

鴻上は和輝の質問に答えるとアंकの方を見る。

「相変わらずテンションが高いんだよ、鴻上。」

「君も相変わらずだね、グリードのアंक君。」

アंकと鴻上は互いに警戒心を一気に高めた。

「アंक、この人と知り合いなの？」

フェイトはアंकに尋ねる。

「知り合いと言うより、俺が居た世界の人間だ。」

アंकはフェイトの質問に答える。

「アंकが居た世界の人!？」

「もしかしてアंकは、別世界の人間？」

雄司が驚いていると、和輝はアंकに尋ねる。

「一応な。」

アंकは和輝の質問に答える。

「何で別世界の人間がこの世界の組織のスポンサー何だ？」

健太郎は鴻上に尋ねる。

「ライダー隊は別世界にも存在する組織で鴻上グループのように我々のスポンサーは様々な世界に存在する。」

鴻上の代わりに前園が健太郎の質問に答える。

「時空管理局みたいな組織なんか？」

はやては前園に尋ねる。

「それについては隊長達に話して貰う。」

前園はそう言うと、突然基地中にアラームが響く。

「このアラームは!？」

フェイトは前園に尋ねる。

「怪人が出現したらしいな。」

前園はそう言うと再び電子機器を操作する。

「ちょうど良い、前園君ライダー隊の戦略を彼等に見せてくれ。」

鴻上がそう言うと別のモニターが現れ、怪人が映し出される。

T o b e c o n t i n u e d .

第16話 手紙と秘密基地とハッピー、バースデー!!（後書き）

次回、仮面ライダー&リリカルなのは

???

「さてと、初陣と行きますか。」

「カポーン」

???

「ミッション、スタートだ。」

「ACCEL」

翔夜

「アレが？」

前園

「ライダー隊の副隊長と隊長だ。」

リンディ

「既に管理局が管理していた世界が3つもショッカー帝国に滅ばされているの。」

次回、『ライダー隊、始動』

翔夜

「全てを破壊し、全てを守れ!!」

感想を待っています。

第17話 ライダー隊、始動（前書き）

今回は最後にあの二人の登場です。

それでは仮面ライダー & a m p ・リリカルなのは、始まります。

第17話 ライダー隊、始動

海鳴市 とある山中

「破壊したい!!」

「強くなりたい!!」

海鳴市のとある山中ではカブトヤミーとクワガタヤミーが暴れていた。

「さてと、初陣と行きますか。」

「ミッション、スタートだ。」

何処からか二人の男性が現れる。

「この先に民間人が居る、此处で止めるぞ!!」

1人の男性はアクセルドライバーとエンジンブレードを取り出す。

「了解だ隊長。」

もう1人の男性はバーストライバーとバースバスターを取り出す。

ライダー隊 ミーティングルーム

ライダー隊のミーティングルームでは翔夜達がモニターでカブトヤミー達と二人の男性が対峙しているのを見ていた。

「あの二人は？」

紅牙は前園に尋ねる。

「ライダー隊の副隊長と隊長だ。」

「同時にライダー隊が開発したライダーシステムの装着者だよ。」

前園と鴻上が二人の事を簡単に紹介する。

「『ライダーシステム！』『』『』」

「我々の技術長が開発したシステムで、色々と使用制限があるんだ。」

雄司、健太郎、和輝の三人は驚くと、前園はライダーシステムについて簡単に説明する。

海鳴市 とある山中

「どうやら、継承者達が観ているらしい。」

「なら、良いところを見せないとな。」

エンジンブレードを持つ男性がそう言うと、バースバスターを持った男性は気合いが入る。

「油断するなよ、真田。」

「心配性だな、五十嵐隊長。」

エンジンブレードを持っていた男性（五十嵐）はそう言つとアクセルドライバーを腰に装着しアクセルメモリを取り出し、バーストライバーを持っていた男性（真田）はセルメダルを取り出す。

「ACCEL」

「変身!!」

「カポーン」

「ACCEL」

五十嵐は仮面ライダーアクセル（アクセル）に真田は仮面ライダーバースに変身しそれぞれの武器を構える。

「ハッ!!」

アクセルはエンジンブレードでカブトヤミーに切りかかる。

「破壊する!!」

カブトヤミーはアクセルのエンジンブレードを受け止め殴りかかるうとするが。

「ENGINE」

「ELECTRIC」

アクセルはエンジンブレードにエンジンメモリを差し込むとエンジンブレードから電流が流れ、カブトヤミーはアクセルから距離をとる。

「喰らえ!!」

バースはバースバスターでクワガタヤミーを撃ち抜くと、クワガタヤミーはバースに向かって突進してくる。

「ドリルアーム」

バースはバースドライバーにセルメダルを投入し電子音と共に右腕にドリルアームを装備する。

「いくぜ!!」

バースはドリルアームでクワガタヤミーを貫き、クワガタヤミーから数枚のセルメダルが飛び散る。

ライダー隊 ミーティングルーム

「凄い……」

「アレがライダー隊の実力……」

紅牙と和輝はアクセルとバースの戦いに驚いていた。

海鳴市 とある山中

「はあっ!!」

「ぐああっ!!」

アクセルはエンジンブレードでカブトヤミーを切りつけていた。

「ACCEL」

「MAXIMUM-DRIVE」

「はああっ!!」

アクセルはカブトヤミーに向かって必殺キック『アクセルグランツァ』を決め、カブトヤミーは爆発する。

「そろそろ決めますか。」

バースはバースバスターのセルバレットポッドを銃口部に装着する。

「セルバースト」

「ハッ!!」

バースは必殺技のセルバーストでクワガタヤミーを撃ち抜き、クワガタヤミーは爆発する。

「終わったか。」

「大したこと無いな。」

変身を解く五十嵐と真田は周りを見渡す。

「基地に戻るぞ。」

「了解、隊長。」

二人は基地に戻っていった。

数十分後

ライダー隊 ミーティングルーム

「継承者諸君、俺がライダー隊の隊長、五十嵐 リュウだ。」

「同じくライダー隊の副隊長、真田 アキラ、宜しく。」

山中から戻ってきた五十嵐と真田は翔夜達に自己紹介していた。

「それで、ライダー隊が俺達に何の用なんだ？」

翔夜は五十嵐に尋ねる。

「継承者と魔導師のみんなに我々ライダー隊に協力してほしいんだ。」

五十嵐は質問に答える。

「それって、一体？」

「何で私達も？」

五十嵐の一言に翔夜達となのは達

「ソレについては、私が説明するわ。」

突然モニターにリンディが映し出される。

「母さん！？」

「どうしたんですか！？」

リンディに驚くフェイトと和輝。

「実は昨日、管理局から緊急の連絡があったの。」

リンディはそう言うと別のモニターにある風景が映し出される。

「コレは」

「酷い」

映し出された風景は炎に包まれた廃墟で人々が怪人達から逃げていた。

「既に管理局が管理していた世界が3つもショッカー帝国に滅ばされているの。」

「何だって！？」

「ショッカー帝国が本格的に動き出したって訳だろう。」

リンディの一言で驚く雄司、翔夜は冷静にリンディに尋ねる。

「真導君の言うとおりよ、それで管理局もライダー隊と協力する事を決定したの、ただ、管理局も他の世界の防衛で海鳴市に人手が送れないの。」

リンディは翔夜達に管理局の決定を話す。

「それで私達がライダー隊に協力すれば良いんだね。」

「もちろん協力するよ、母さん。」

「ウチらに任せとき。」

なのは達はリンディの話でライダー隊に協力する事を決意する。

「そう言う訳だから五十嵐隊長、彼女達の指揮を任せるね。」

「解った、リンディ提督。」

リンディはなのは達の指揮を五十嵐に頼み、五十嵐はそれを承認する。

「母さん、五十嵐隊長と知り合いなの？」

フェイトはリンディに質問する。

「昔、ちょっとね。」

リンディはそう言うとモニターから消えた。

「それで継承者の方はどうするんだ？」

真田は翔夜達に質問する。

「正直、世界規模で話が解らないし」

「不安しか無いけど」

「この世界は俺達の世界だ」

「だから俺達も俺達にしか出来ない事を」

「やるんだろう。」

雄司、紅牙、健太郎、和輝、翔夜もライダー隊と協力する事を決意する。

「決まりだな」

「君達は民間協力者という事で我々ライダー隊と共にショッカー帝国からこの世界を守るという事で良いか？」

真田は笑顔で五十嵐を見ると五十嵐は翔夜達に意志の確認をする。

「「ハイ!!」」」

こうして、三人の魔導師と五人の継承者はライダー隊と共に戦うことを決めた。

ライダー隊 とある一室

「ショッカー帝国が本格的に動き出したか、一文字副司令官」

「ああ、だがこっちも継承者と魔導師と協力する事になったしな、
本郷司令官」

仮面ライダー1号の本郷と仮面ライダー2号の一文字はモニターで
継承者と魔導師を見ていた。

T o b e c o n t i n u e d .

第17話 ライダー隊、始動（後書き）

次回、仮面ライダー&リリカルなのは

和輝

「そう言えば、アंक以外のグリードって何処に居るんだろう?」

アंक

「俺は行かないからな。」

真田

「何かこうやって見ると、二人がデートしているみたいだな。」

フェイト・和輝

「えっ／＼／＼／＼」

????

「ただいま、メズール!!」

????

「おかえりガメル。」

????

「そう言えば、今日の夕食当番って?」

????

「俺が作るんだよ。」

次回、『搜索とデートとグリード一家』

フェイト

「次回は私と和輝のお話だよ。」

和輝

「アंक以外のグリード達も登場。」

感想を待っています。

第18話 搜索とデートとグリード一家（前書き）

今回はアंक以外のグリード達の登場です。

グリード達は基本的に人間の姿で行動しています。

それでは仮面ライダー & a m p ; リリカルなのは、始まります。

第18話 搜索とデートとグリード一家

翔夜達がライダー隊の基地で五十嵐から話を聞いていた頃

海鳴市 翠屋

「それでは、私は失礼します。」

藍色のワンピースを着た少女がエプロンをしまい桃子と士郎に挨拶する。

「御苦勞様、メズールちゃん。」

「気をつけて、帰るんだよ。」

桃子と士郎は少女メズールに挨拶し、メズールは二人に一礼すると翠屋から出て行った。

「大変だね、メズールちゃん。」

「ああ、ほぼ毎日バイトをやりながら家の仕事もやっているしな。」

桃子と士郎はメズールの事を話していた。

ライダー隊 食堂

「アंक、先からアイスばかり食べるなよ。」

「体に悪いよ、アंक」

「別に良いだろう、タダだしな。」

ライダー隊の食堂では和輝とフェイトはコーヒーを飲みながら大量のアイス食べていたアंकに注意をしていた。
ちなみに他のメンバーは五十嵐と共に今後の事について話し合っていた。

「千樹、テストロッサ。」

「前園さん？」

「どうしたんですか？」

前園が和輝達の所にやって来る。

「副隊長を見なかったか？」

前園は和輝達に尋ねる。

「見てないんですけど」

「副隊長、居ないんですか？」

和輝は不思議そうな顔をし、フェイトは前園に尋ねる。

「ああ、会議の途中で勝手に抜け出したんだ、おかげで隊長がかなり怒っているよ。」

呆れた顔で説明する前園。

「そうだ千樹、君に渡す物があるんだ。」

前園は和輝に一本の大剣を渡す。

「コレは？」

和輝は前園に尋ねる。

「メダジャリバー、鴻上会長からの贈り物だ。」

「その剣はオーズ専用の武器だからな、まだコアメダルが少ないからな、ちょうど良いだろう。」

前園とアंकはメダジャリバーの説明をする。

「ありがとうございます、前園さん。」

和輝はメダジャリバーを受け取ると前園にお礼を言う。

「そろそろ帰るぞ、和輝」

アंकはそう言うつと食堂から出て行くとする。

「どうしたんだよ、アंक！？」

和輝はアंकの突然の行動に驚きながらも尋ねる。

「此処に他のグリードが居ると思ったが、居ないしな。」

アंकは和輝の質問に答える。

「アंक以外のグリード？」

「そう言えば、アंक以外のグリードって何処に居るんだろう？」

アंकの一言で首を傾げるフェイト、和輝はアंक以外のグリードが何処に居るか気になる。

「確かにそうだな。」

「アंक以外のグリードを捜そうよ、フェイトさん。」

前園も和輝の言葉に納得し、和輝はフェイトと共にアंक以外のグリードを捜そうと言い出す。

「うん、そうだね。」

フェイトも和輝の言葉に賛成する。

「俺は行かないからな。」

アंकは和輝の言葉に拒否する。

「どうしてだよ、アंक!？」

「自分の仲間が気にならないの？」

アंकの一言に驚く和輝、フェイトはアंकに尋ねる。

「俺がアイツ等を気にするのはコアメダルだけだからな、別にアイツ等がどうなろうと関係無い。」

アंकは質問に答えると椅子に座るが。

「行こうよ、アंक」

「アंकが居ないと解らないんだから。」

「オ、オイ、だから俺は行かないからな!!」

和輝とフェイトはアंकを引っ張り出し食堂から出て行く。

「さて、俺も副隊長を捜すか。」

前園も副隊長を捜すべく食堂を後にした。

海鳴市 とある屋敷

海鳴市にある古い屋敷では銀髪で黒と黄色が混ざったパーカーを着た男性がソファに座りiPhoneの画面を見ていると。

「ただいま。」

「おかえり、メズール。」

メズールが帰ってくると男性はメズールに挨拶する。

「カザリ、継承者について何か解った？」

メズールは男性に尋ねる。
カザリ

「オーズの継承者以外はあまり情報が無いけど、どうやらこの世界にはクウガ、カブト、電王、キバ、ディケイド、そしてオーズの継承者が居るのは本当だよ。」

カザリはメズールの質問に答える。

「そうなんだ」

メズールはカザリの言葉に納得していると。

「ただいま、メズール!!」

「おかえりガメル。」

灰色のＴシャツを着た男性ガメルが元気良く挨拶するとメズールはガメルに挨拶する。

「あれガメル、ウヴァはどうしたの？」

カザリはガメルに尋ねる。

「ウヴァなら、俺のメダルと、前に奪ったカザリのメダルを持って、オーズの継承者に会いに行ったよ。」

ガメルはそう言うとポケットに入っていたお菓子をとり出し食べ始める。

「「えっ!!!」」

ガメルの言葉に驚くメズールとカザリだった。

海鳴市 とある市街地

「とは言っても」

「アंक以外のグリードが何処に居るのか」

「解らないって言った筈だろ。」

その頃、和輝、フェイト、アंकの三人はアंक以外のグリードを捜していたがアंक以外のグリードが何処に居るのか解らないでいた。

「やっぱり、お酒には焼き鳥だね。」

近くの焼き鳥屋から聞き慣れた声がする。

「今の声って」

「聞き覚えがあるんだけど」

「まさかな」

和輝達は焼き鳥屋を覗いてみると。

「おっ、千樹にフェイト、それにアンコじゃないか。」

翔夜達との話し合いを抜け出した真田が焼き鳥を食べていた。

「「何しているんですか、真田副隊長!？」」

「アンコじゃないアंकだ!！」

真田の行動にツツコミをいれる和輝とフェイト、アंकは真田に名前の事にツツコンでいた。

「副隊長はいいよ、何って、お昼を食べているだけだよ。」

真田はマイペースに和輝達に説明する。

「話し合いを抜け出してですか？」

「しかも、お酒まで飲んでいるし。」

更に真田にツツコミをいれる和輝とフェイト。

「酔わない程度に飲んでいるから大丈夫、それより二人でデートか？」

真田はマイペースに和輝とフェイトに尋ねる。

「そう言う問題じゃないでしょう。」

「それに、私達はアंक以外のグリードを捜しているんです。」

真田にツツコミをいれる和輝、フェイトは真田に説明をする。

「そうなんだ、頑張れよお二人さん。」

「オイ真田、さっきから俺を忘れているだろう。」

フェイトの説明で納得する真田、アंकは真田が自身を忘れている事にツツコんでいた。

「何かこうやって見ると、二人がデートしているみたいだな。」

「「えっ／＼／＼／＼／」」

真田の言葉に和輝とフェイトは顔を真っ赤にしていると。

「この気配は」

「どうしたんだ、アंक？」

アंकは何かを感じ店の外に出ると和輝もアंकを追うように店を出る。

「見つけたぞ、オーズの継承者。」

店を出ると二人を待っていたのはオールバックに緑色のジャケットを着た男性がだった。

「アナタはあの時の！？」

「やはりあの時、和輝にクワガタのメダルを渡したのはお前だったか、ウヴァー！！」

和輝は男性に少し驚き、アंकは男性に面識があった。
ウヴァ

「アंक、取引だ俺のメダルを返して貰う代わりにコレを渡す。」

ウヴァはそう言うと言とライオン、サイ、ゾウのメダルを和輝とアंकに見せる。

「カザリにガメルのメダルか」

アंकはそう言うと言とクワガタ、カマキリ、バッタのメダルを見ていると。

「ちょっとウヴァ、僕のメダルで何やっているの！？」

「ウヴァ、俺のメダル、返せ！！」

カザリとガメルが現れ、ウヴァの持っていたメダルを奪おうとする。

「アंक、一体どうなっているんだ!？」

「知るか、とにかく止めてこい!!」

和輝はアंकに尋ねると、アंकは和輝にメダルを渡す。

「変身!!」

「タカ、トラ、バッタ、タ・ト・バ、タ・ト・バ、タトバ!!」

和輝はオーズ タトバコンボに変身しメダジャリバーを構えるが。

「アンタ達は何やっているの!!!」

「「冷たい!!!!!!」」

カザリとガメルを追ってきたメズールの放水でウヴァ、カザリ、ガメルの三人の争奪は呆気なく終わった。

「どうなっているの？」

騒ぎを聞き駆けつけたフェイトは状況に驚いていた。

「で、俺達が副隊長を捜している間にこういう事が起きた訳だな。」
「ハイ」

五十嵐の頼みで真田を捜していた翔夜達は和輝達に出会い、和輝と

フェイトは事情を説明していた。

ちなみに真田は翔夜達と一緒に行動していた前園に捕まり、今頃は五十嵐の説教を受けているらしい。

「大体、アナタ達は少し自分勝手なのよ!!」

メズールはウヴァ、カザリ、ガメル、アंकの4人に説教していた。

「ごめんなさい、メズール」

「本当にスマン」

「何で僕まで？」

「何で俺も説教を？」

素直に謝るガメルとウヴァ、カザリとアंकは一応被害者なのに説教を受ける事に疑問を感じていた。

ちなみにメダルはメズールとフェイトの話し合いでクワガタとカマキリのメダルをウヴァに返す代わりにライオン、サイ、ゾウのメダルを渡すことになった。

「継承者のみんな、良かったら私達の家で夕飯はどうかしら？」

メズールは翔夜達を雄司に誘う。

「行こうぜみんな!!」

「お前が仕切るな、雄司」

「みんなで夕飯が良いかも。」

「私達も行つて良いですか？」

メズールの誘いに賛成する翔夜達。

「そう言えば、今日の夕食当番って？」

「俺が作るんだよ。」

カザリの質問に答えるウヴァ。

「ウヴァで大丈夫か？」

「心配ないよアंक、私が作るから。」

心配するアंकにメズールが作ると言う。

そんな楽しそうな雰囲気から一人の男性が見ていた。

「あれが俺達の力を受け継いだ継承者達か、面白そうだな。」

冒険者の格好をしていた男性は人の良さそうな笑顔を浮かべながら和輝達を見ていた。

現在、オーズが使えるメダルは

タカ

ライオン

トラ

チーター

バッタ

サイ

ゴリラ

ゾ
ウ

第18話 搜索とデートとグリード一家（後書き）

次回、仮面ライダー&リリカルなのは

???

「君はまだディケイドの本当の力を使いこなしてないみたいだね。」

翔夜

「どういう事だ？」

アリサ

「雄司と同じライダー!？」

雄司

「アナタは一体!？」

ユウスケ

「俺は小野寺 ユウスケ、君と同じクウガだ。」

次回、『接触』

感想を待っています。

オリジナルキャラ紹介 PART2（前書き）

今回はライダー隊のメンバーの紹介です。

今回もちょっとネタバレがあります。

オリジナルキャラ紹介 PART 2

名前：五十嵐 リュウ（いがらし りゅう）

性別：男

年齢：33

容姿

戦国BASARAに出てくる片倉 小十郎に似ている。

ライダー隊の隊長で隊長としての手腕はなかなかのものである。

人望が厚く他の隊員達から慕われている。

副隊長の真田とは腐れ縁で本人は真田を色々と嫌っているが戦闘で
の実力は認めている。

時空管理局とは因縁があるらしい。

変身するライダーはアクセル

名前：真田 アキラ（さなだ あきら）

性別：男

年齢：33

容姿

銀魂に出てくる近藤 勲に似ている。

性格は豪快かつ大雑把と言っかなかなりマイペース。

元医者でライダー隊の副隊長だが書類や会議関係の事は苦手でもサボっている。

隊長である五十嵐とは昔からの仲間（本人が勝手に思っている）で戦闘だけは互角の実力。

五十嵐と同じく時空管理局とは因縁があるらしい。

変身するライダーはバース。

名前：前園 シン（まえぞの しん）

性別：男

年齢：21

容姿

銀魂に出てくる土方十四郎に似ている。

元警察官でライダー隊の隊員。

生真面目な性格で真田がやるはずの書類関係は基本的に彼がやるら

し
い。

オリジナルキャラ紹介 PART 2（後書き）

感想を待っています。

第19話 接触（前書き）

今回からクウガ編です。

それでは仮面ライダー & a m p ・りりカルなのは、始まります。

第19話 接触

翔夜達がライダー隊との協力を決めてから数日後

海鳴市 とある森林地帯

「ハッ!!」

「ぐおっ!!」

海鳴市のとある森林地帯では翔夜が変身したディケイドSがサイ種怪人のズ・ザイン・ダ（ザイン）と戦っていた。

「リントの戦士よ我らの行くゲルルの為に死ね!!」

ザインはそう言うディケイドSに向かって突進するが。

「リントとかゲルルって何だよ!？」

ディケイドSはザインの攻撃を避けるとライドブッカーソードモードでザインを切り裂く。

「黙れリントの戦士!!」

ザインはディケイドSに殴りかかるが。

「俺は通りすがりの仮面ライダーだ。」

ディケイドSはザインの攻撃を避け。

「その心に刻んでおけ!!」

「FINAL - ATTACK - RIDE.....DE、DE、DEC
ADE」

「はあっ!!」

「ぐあああっ!!」

ディケイドSのディメンションキックが決まりザインは爆死する。

「何だっただ、あのグロンギは？」

変身を解いた翔夜は戦っていたグロンギの事を考えていると。

「君がディケイドの継承者か。」

何処からか冒険者の格好をしていた男性が現れる。

「誰だ!？」

翔夜は男性に気づくとすぐにディケイドライバーを取り出す。

「言っておくけど、俺は君の敵じゃないよ。」

男性はそう言うと翔夜に笑顔を見せる。

「君はまだディケイドの本当の力を使いこなしてないみたいだね。」

「どういう事だ？」

男性の言葉に翔夜は驚いていた。

「でも君ならディケイドの本当の力に気づくだろ。」

男性はそう言つと翔夜から離れていく。

「オイ、待てよ!!」

翔夜は男性を引き止めようとするが。

「頑張れよ、クウガの継承者と共に。」

男性は何処かに消えていった。

「あの人は一体？」

翔夜は男性の言つていった言葉に疑問を感じていた。

海鳴市 とある市街地

「次は何処にしようかな？」

「まだ行くの？」

市街地ではアリサと大量の荷物を持った雄司が歩いていた。

「当たり前でしょう、この前の約束何だから。」

「そうでした」

雄司はアークルを手に入れた数日後、アリサの追求で翔夜と自分が仮面ライダーであることを話し、翔夜から『コイツを好きに使って良いから、俺達の事は絶対に誰にも話すな。』と言われ、雄司はアリサの執事^{バシリ}になった。

「翔夜の奴、何で俺がこうなるんだ!？」

「そう言えば、アンタは真導の事をどう思っているの?」

雄司は翔夜を恨んでいると、アリサは雄司に翔夜の事を尋ねる。

「翔夜の事、アイツは俺の一番の友達だからな。」

雄司は笑顔でアリサの質問に答える。

「何なのそれ」

アリサは少し呆れながら雄司を見ていると。

「見つけたぞ、クウガ!!」

イカ種怪人のメ・ギイガ・ギ（ギイガ）、トラ種怪人のメ・ガドラ・ダ（ガドラ）、フクロウ種怪人のゴ・ブウロ・グ（ブウロ）が現れる。

「ゲロンギ!!」

雄司はブウ口達を見て荷物を置きアークルを出現させる。

「まさか、戦うの!？」

「アリサちゃんの下がっついていて……変身!!」

アリサは雄司の行動に驚いていると、雄司はアリサを下がらせクウガMに変身しガドラ達に殴りかかる。

「ハッ!!」

「ぐっ!!」

「クウガ、貴様も我らのゲルルの為に死ね!!」

クウガはガドラを殴るが、ギイガはクウガを何発も殴る。

「くっ!!」

クウガはギイガの攻撃を食らい、クウガはフラつきながらも近くに落ちていた木の枝を拾う。

「超変身!!」

クウガMはクウガDに変わり、木の枝はドラゴンロッドに変えガドラやギイガの攻撃を受け流していると。

「死ねクウガ!!」

「くっ、空からも攻撃が来るのか!？」

空中からブウ口が吹き矢でクウガDに襲いかかる。

「ぐおっ!!」

「隙有り!!」

油断したクウガDにガドラとギイガが襲いかかるが。

「ぐあああ!!」

突然、ガドラとギイガに向かって何発かの銃弾が命中する。

「今のは」

クウガDは銃弾が放たれた場所を見ると。

「冴島、フクロウは俺に任せてその二体を倒せ!!」

バースバスターを構えた前園はクウガDに指示をだすとブウロに向かってバースバスターを撃ち出す。

「解りました、はあっ!!」

「ぐおっ!!」

「ぐあっ!!」

クウガDはドラゴンロッドでガドラとギイガを吹っ飛ばしマイティフォームに戻ると。

「はああああ………はあっ!!」

「ぐあああ!!」

クウガMの必殺技”マイティキック”がガドラに喰らい、ガドラは

爆発する。

「後はイカのグロンギだけだな。」

クウガMはギイガに目を向けると。

「ぐっ!!」

前園が右肩を抑えて膝をついていた。

「前園さん!!」

クウガMは前園に気づき、前園の所に駆け寄ろうとするが。

「来るな、冴島!!」

前園はクウガMに向かって叫ぶが。

「うわっ!!」

突然、ブウロが空中から襲いかかる。

「気をつけろ、あのフクロウのグロンギは他のグロンギとは格が違うぞ!!」

前園は右肩を抑えながらも立ち上がりバースバスターを持つが。

「クウガとリントの戦士よ、死ね!!」

ブウロは空中からクウガMと前園に向かって吹き矢を乱射する。

「ぐっ!!」

「前園さん、うわぁ!!」

ブウロの攻撃に避けるしかない前園とクウガM。

「雄司、前園さん!!」

アリサは二人を心配すると。

「邪魔をするなリント!!」

ギイガがアリサに向かって襲いかかるとする。

「きゃー!!」

「アリサちゃん!!」

アリサの悲鳴にクウガMは助けに行こうとするがブウロの攻撃で動けないでいた。

「もうダメ……」

アリサが諦めかけた瞬間。

「ぐあっ!!」

ギイガに向かって一台のバイクがぶつかって来る。

「君、大丈夫!？」

アリサの目の前には赤いパーカーを着た青年がバイクから降り、アリサが無事がどうか聞いてくる。

「アナタは？」

アリサは青年に尋ねると。

「とにかく下がって!!」

「は、ハイ!!」

青年はアリサに下がるように言うと、アリサはすぐに下がった。

「誰だ、貴様は!？」

ブウロは青年に尋ねると。

「通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ!!」(一度で良いから言ってみたかったんだよな、この台詞。)

青年は何かに満足していると、腰にアークルが現れる。

「あれは!？」

「俺と同じアークル!？」

青年のアークルに驚く前園とクウガM。

「変身!!」

青年は雄司と同じクウガだが所々に金色の装飾が施されたクウガライジングマイティフォーム（クウガRM）に変身する。

「雄司と同じライダー！？」

アリサは青年の変身したクウガに驚いていた。

「クウガ！！」

クウガRMに向かってブウロは襲いかかるが。

「ハッ！！」

「ぐぁ！！」

クウガRMはブウロの攻撃を避けるとブウロの腹に強力なパンチを喰らわせ、ブウロは吹っ飛ばされる。

「俺はブウロをやるから、君はギイガを頼む。」

クウガRMはクウガMに指示するとブウロに立ち向かう。

「わ、解りました！！」

「冴島、コレを使い！」

クウガMはクウガRMの指示に従うと、前園はクウガMにナイフを渡す。

「ハイ、超変身!!」

クウガMはナイフを受け取るとクウガTに変わり、渡されたナイフはタイタンソードに変わる。

「ハアッ!!」

「グガアッ!!」

クウガTはタイタンソードでギイガを切り裂き確実にダメージを与える。

「ハアアアッ!!」

「クウガアアアッ!!」

クウガTの必殺技”カラミティタイタン”が決まりギイガは爆散する。

「ハアアッ!!」

「ぐあっ!!」

クウガRMはパンチやキックでブウロにかなりのダメージを与えていると、ブウロは空に向かって逃げようとしていた。

「逃げるのかよ!？」

クウガRMは慌てて周りを見渡すと。

「ちょっとお借りします。」

「オイ、何を!？」

クウガRMは前園が持っていたバースバスターを借りると。

「超変身!！」

クウガRMはクウガ ライジングペガサス（クウガRP）に変わり、持っていたバースバスターはライジングペガサスボウガンに変わると、ブウロに向かってライジングブラストペガサスを放つ。

「どわあああ!！」

クウガRPの攻撃を食らいブウロは空中で爆死する。

「終わったか、ありがとうございます。」

クウガRPは変身を解くと前園にバースバスターを返した。

「アナタは一体!？」

変身を解いた雄司は青年に尋ねると。

「俺は小野寺 ユウスケ、君と同じクウガだ。」

青年は雄司に笑顔を見せると自分の自己紹介をした。
ユウスケ

To be continued .

第19話 接触（後書き）

次回、『異変』

感想と質問を待っています。

第20話 異変（前書き）

クウガ編は5・6話ぐらいで終わらせる予定です。

（ 今回は戦闘はありません。 ）

それでは仮面ライダー&リリカルなのは、始まります。

第20話 異変

ライダー隊 ミーティングルーム

「昨日まででライダー隊の負傷者は1000人、応援で呼んでいた警官隊は250人、嫌な数字だよ。」

ライダー隊のミーティングルームでは真田がグロンギの被害状況の報告をしていた。

「グロンギの急な出現か」

「何が目的何やろう？」

真田の報告を聞いた五十嵐とはやて（はやては翔夜やなのは達の代表として翔夜やなのは達の指揮をとっている。）は疑問を感じていた。

「こつちもさっきの戦いで紅牙君が重傷を負ったし」

「モモタロスも」

「あのグロンギ達、かなり強かった。」

フェイト、健太郎、和輝の三人も体の一部に包帯を巻いていた。

「グロンギ達はゲルルを行っている」

突然、ユウスケが語りだす。

「そう言えば、俺が戦っていたグロンギもそんな事を言っていたな。」

「
「ゲルルって？」

先程の戦いを思い出す翔夜、なのははユウスケに質問する。

「ゲルルはグロンギ達が行う殺しのゲームだけど、本来ゲルルを行うグロンギは一回に一体だけなんだけど。」

ユウスケはゲルルの説明をする。

「今回のゲルルは複数のグロンギが参加しているからか。」

「その通り、それから思い出した俺がこの世界に来た理由。」

翔夜の言葉にユウスケは何かを思い出したように納得する。

「クウガに変身する奴って、全員こうなのか？」

翔夜が嘆きながら呆れた目で雄司とユウスケを見ていた。

「そう言えば五代さんに言われたんですよ、『継承者達が居る世界で大きな異変が起きている』って、それで俺がこの世界に応援として来たんだ。」

ユウスケは色々と思い出したように喋り出していると。

「世界の異変？」

「一体、何が起きてるのですか？」

「グロンギ達のゲルルの内容は？」

「それよりユウスケさん、俺達継承者の事を知っているのですか？」

「その五代さんって人も継承者の事を知っているのですか？」

「その五代って奴は、何者何だ？」

「ユウスケさん、あの金のクウガは何ですか？」

上からフェイト、なのは、はやて、和輝、健太郎、翔夜、雄司がユウスケに質問する。

「ちょっと、みんな落ち着いて！！」

突然の質問責めに焦るユウスケ。

「全員、落ち着け！！」

五十嵐の一喝で全員が一瞬で落ち着く。

「まず世界の異変の事だけど、今、グロンギ達に行っているゲルルが原因らしい。」

ユウスケは世界の異変について話す。

「それで今回のゲルルは何なんだ？」

五十嵐はユウスケにゲルルの事を尋ねる。

「その今回のゲルルの事だけど俺も色々調べてみたけど、奴らがゲルルを成功すると何か復活する事だけしか解っていないんだ。」

ユウスケは今回のゲルルの事を翔夜達に話していると。

「グロンギ出現、グロンギ出現！！」

突然、オペレーターがグロンギの出現を知らせる。

「オペレーター、グロンギの出現ポイントは！？」

五十嵐はオペレーターグロンギの出現ポイントを聞く。

「市街地に数十体のグロンギを確認、更に山奥でも強力な反応を確認！！」

オペレーターはグロンギの出現ポイントを知らせる。

「市街地と山奥か、どうみる隊長？」

「恐らく市街地の方はゲルルを行い、山奥の方は何か別の事をやるつもりだろう。」

オペレーターの報告を聞いた真田が五十嵐に尋ねると、五十嵐は冷静にグロンギの行動を分析する。

「五十嵐隊長、山奥の方のグロンギは俺が行きます。」

「隊長、俺にも行かせて下さい！！」

「俺も山奥の方が少し気になる。」

ユウスケ、雄司、翔夜の三人は山奥の方へ志願する。

「解った、小野寺、冴島、真導の三人は山奥の方のグロンギを、残

りは俺と共に市街地に向かう。」

五十嵐は山奥に向かうのと市街地に向かうメンバーを決める。

「了解!!」「」

全員は五十嵐の指示に従い山奥と市街地に向かっていった。

海鳴市 山奥

「いよいよ、ゲルルも終盤だね。」

「コレで奴が蘇るぜ。」

「来い、クウガと継承者達よ!!」

海鳴市の山奥ではメガネをかけた知的な雰囲気的女性、革ジャンを着た男性、軍服の男性がクウガ達を待っていた。

「みんな、雄司……………」

その近くではアリサが縄に縛られていた。

T o b e c o n t i n u e d .

第20話 異変（後書き）

次回、『強敵』

感想と質問を待っています。

第21話 強敵（前書き）

雄司

「そう言えば、ユウスケさんってクウガの力をどれくらい使いこなしているんですか？」

ユウスケ

「アメイジングの力までは使いこなせるんだけど、ライジングの力も何度も使っていると暫く変身出来なくなるんだ。」

アリサ

「そう言えばユウスケさんや雄司が使うアークルって、自己回復能力があるらしいね。」

ディケイドS

「面白そうだな。」 壊者オーラ＋FINAL ATTACK R
IDEのカード装備

オーズ タカゴリゾ

「止める、翔夜！！」 ディケイドSを必死に抑える。

健太郎

「えっと、仮面ライダー&リリカルなのは、始まります。」

第21話 強敵

海鳴市 市街地

数十体のグロンギが人々に襲っていた。

「かなり居るな、隊長」

「呑気に言っている場合か、真田」

グロンギを見て漫才みたいに会話をしていた真田と五十嵐はそれぞれの変身アイテムを構えていた。

「とにかく、街のみんなを助けないと。」

「キンタロス、行くよ。」

『よっしゃ、任せとき。』

オーズドライバーを構える和輝と健太郎はキンタロスを呼びライダーパスを構える。

「行くよ、なのは！」

「うん、今頃は翔夜君達も頑張っているんだから。」

フェイトとなのはもそれぞれのデバイスを構える。

「ACCEL」

「……変身！」「……」

「カポーン」

「ACCEL」

「タカ、トラ、バッタ、タ・ト・バ、タ・ト・バ、タトバ！」

「AX FORM」

アクセルに変身した五十嵐、バースに変身した真田、オーズ タト
バコンボに変身した和輝、電王 アックスフォーム（電王A）はそ
れぞれの武器を構える。

「セットアップ！」

「[set up]」

フェイトとなのははバリアジャケットを纏い、それぞれのデバイス
を構える。

海鳴市 とある山奥

その頃、海鳴市のとある山奥ではメガネをかけた知的な雰囲気的女
性、革ジャンを着た男性、軍服の男性が何かを待っていた。

「来たね。」

女性がそう言うと、翔夜、雄司、ユウスケの三人がやって来た。

「あれは!？」

「まさか、お前達がこの世界に居たとはな」

女性達を見た雄司は驚いていると、ユウスケは彼等を少し焦りを見せる。

「知っている奴なのか？」

翔夜はユウスケに尋ねる。

「五代さんから聞いた事が有るんだ、ジャーザ、バベル、ガドル、グロンギの中でもかなり強い奴らだ。」

ユウスケはそう言うと、アークルを出現させる。

「待てリントの戦士よ、貴様等に返す物が有る。」

男性ガドルがそう言うと、もう一人の男性バベルが縄に縛ったアリサを連れてくる。

「アリサちゃん!!」

「何で此処に!？」

「恐らく、人質だろう。」

アリサに驚く雄司とユウスケ、翔夜は冷静に分析をしていた。

「この娘を使って、貴様等を誘き出すつもりだったが、その必要も無いだろう。」

ジャーザ女性はそう言うと、アリサを縛っていた縄を切る。

「みんな!!」

アリサは雄司達の所に急いで駆け寄る。

「ジャーザ、バベル、貴様等に任せよう。」

ガドルはそう言うのと近くの岩に座り込む。

「解ったわ。」

「ゲルルのスタートだ!!」

ジャーザは女性の姿からサメ種怪人、ゴ・ジャーザ・ギにバベルは男性の姿からバッファロー種怪人、ゴ・バベル・ダに変わる。

「君達はバベルを、俺はジャーザをやる!!」

ユウスケは翔夜と雄司に指示を出す。

「大体、解った。」

「アリサちゃんは隠れてって!!」

翔夜はデイクイドライバーを取り出しカードを構え、雄司はアークルを出現させる。

「『変身!!』」

「KAMEN - RIDE..... DECADE STRIKE」

翔夜はディケイドSに雄司はクウガMにユウスケはRMに変身し、それぞれの相手に立ち向かう。

「おらぁー!!」

バベルはハンマーを振り回しながらディケイドSとクウガMに襲いかかる。

「くっ!!」

「さて、どうやって戦うか？」

クウガMはバベルの攻撃を必死に避け、ディケイドは一枚のカードを取り出し、ディケイドライバーに装丁する。

「K A M E N - R I D E W」

ディケイドSはDSWCJに変身し、更にもう一枚のカードをディケイドライバーに装丁する。

「F O R M - R I D E H E A T M E T A L」

DSWはサイクロンジョーカーからヒートメタル(DSWHM)に変わり、メタルシャフトを構える。

「行くぜ!!」

「おらぁっ!!」

DSWHMのメタルシャフトとバベルのハンマーがぶつかり合う。

「おりゃあ!!」

「ぐっ、やっぱりパワーは向こうの方が上か。」

メタルシャフトを吹っ飛ばされたDSWHMはバベルから距離をとる。

「今度はコレだぜ。」

DSWHMは一枚のカードをディケイドライバーに装丁する。

「FORM - RIDE..... LUNA TRIGGER」

DSWHMはルナトリガー（DSWLT）に変わると、トリガーマグナムでバベルに向けてエネルギー弾を放つ。

「ぐっ!!!!」

バベルはエネルギー弾を避けようとするが、DSWLTの放ったエネルギー弾は変幻自在に曲がりバベルに当てていく。

「今だ、雄司!!」

「うおお!!」

DSWLTはディケイドSに戻ると、クウガMはバベルを殴り飛ばす。

「決めるぜ、翔夜!!」

「ああ!!」

「FINAL - ATTACK! RIDE..... DE、DE、DEC
ADE」

「はああああ!!」

「おのれ、リントがあああ!!」

デイケイドSのデイメンションキックとクウガMのマイティキック
が決まり、バベルは爆死する。

「はああ!!」

「くっ、嘗めるな!!」

クウガRMはパンチやキックでジャーザを攻めるが、ジャーザは大
剣でクウガRMに切りかかる。

「危なっ!!」

クウガRMはジャーザの攻撃を紙一重で避ける。

「（海東さんみたいな真似はしたくないけど）コレは貰うよ!!」

クウガRMはジャーザから大剣を奪うと。

「超変身!!」

クウガRMはクウガ ライジングタイタン（クウガRT）に変わり、
奪った大剣はライジングタイタンソードに変わる。

「はあっ!!」

クウガRTはライジングタイタンソードでジャーザを斬りまくる。

「はああああ!!」

「おのれ、クウガああ!!」

クウガRTのライジングカラミティタイタンがジャーザに決まり、ジャーザは爆死する。

「後はお前だけだ、ガドル!!」

クウガRTはライジングタイタンソードの刃をガドルに向ける。

「どうやら、次は俺の番だな。」

ガドルは男性の姿からカブトムシ種怪人、ゴ・ガドル・バに変わる。

T o b e c o n t i n u e d .

第21話 強敵（後書き）

次回、『復活』

感想と質問を待っています。

第22話 復活（前書き）

今回はアイツが復活します。

（ダグバではありません。）

それでは仮面ライダー&リリカルなのは、始まります。

第22話 復活

海鳴市 とある山奥

ディケイドS、クウガM、クウガRTはガドルと戦っていた。

「はっ!!」

「はあっ!!」

ディケイドSとクウガMはガドルに殴りかかるが。

「はあああっ!!」

「うわっ!!」

「くっ!!」

ガドルは二人の攻撃を避けると、クウガ、MとディケイドSを片手で吹っ飛ばす。

「はあっ!!」

クウガRTはライジングタイタンソードでガドルに切りかかるが。

「その程度か、クウガ」

ガドルはクウガRTからライジングタイタンソードを奪ったガドルは目の色が紫に変わると、奪ったライジングタイタンソードは大剣に変わり、ガドルは剛力体になる。

「おりやつ!!」

「ぐわあっ!!」

ガドルは大剣でクウガRTを切り裂くと、クウガRTはRMに戻る。

「コイツ、今まで戦ったグロンギより」

「圧倒的に強い!!」

ガドルの強さに怖じ気づくディケイドSとクウガM。

「弱気になるな、継承者達!!」

「ユウスケさん」

怖じ気づいたクウガM達に気合いを入れるクウガRM。

「今は君達がディケイドやクウガの力を持っているんだ、それを忘れるな!!」

クウガRMはそう言うときガドルの方を見る。

「何をしても無駄だクウガ、間もなくゲルルは達成される。」

ガドルはそう言うとき目の色が金色に変わり電撃体の姿に変わる。

（出来れば、コレを使うのはもうちょっと後にしておきたかった。）

クウガRMは何かを決意すると自身の姿が変わっていく。

「ユウスケさん!？」

「何をするつもりなんだ!？」

クウガRMの変化に驚くクウガMとディケイドS。

クウガRMの姿が黒くなり、右足に装備されていたマイティアンクレット左足にもが装備され、クウガRMはクウガ アメイジングマイティ（クウガAM）に変わった。

「その姿は!?!」

クウガAMの姿に驚くガドル。

「行くぞガドル、はあああああ!?!」

クウガAMは必殺技の構えに入る。

「面白いぞ、クウガあああああ!?!」

ガドルも必殺技の構えに入る。

「おりゃあああ!?!」

「はあああつ!?!」

クウガAMのアメイジングマイティキックとガドルのゼンゲビ・ビブ（電撃キック）が空中でぶつかり合う。

「くつ!?!」

「アイツ等、滅茶苦茶だろつ!?!」

二人の必殺技で発生した衝撃波に圧されるクウガMとディケイドS。

衝撃波が収まるとクウガAMとガドルが立っていた。

「どっちが？」

「勝ったんだ!？」

二人の勝敗を気にするディケイドSとクウガM。

「くっ!!!!」

クウガAMは変身が解けると膝をつく。

「ユウスケさん!!」

「ちっ!」

ユウスケを心配するクウガM、ディケイドSはライドブッカーを構えるが。

「これでゲルルは達成された。」

ガドルはそう言うと倒れ爆発する。

「どういつ事なんだ？」

ガドルの言葉にディケイドSは疑問を感じていると。

「何だ!？」

「アレは!？」

突然、空が黒い霧に覆われ、その中心には紫色の球体が出現した。

「くっ、グロンギ達にはめられたよ。」

空を見たユウスケが悔しがっていた。

「オイ、それってどういう事だよ!？」

「教えて下さい、ユウスケさん!!」

ユウスケの言葉に驚くディケイドS、クウガMはユウスケに尋ねると。

「おそらく、今回のゲルルはグロンギがある一定の数を倒された時に達成され、アレを復活させるつもりだったんだ。」

「つまり俺達は」

「ゲルルの手伝いをしていた訳か」

ユウスケはディケイドS達に今回のゲルルを説明をすると、ディケイドS達は落ち着いていたが内心は悔しがっていた。

「まさか、アイツが復活するなんて!!」

ユウスケは立ち上がるが足下がフラツいていた。

「ユウスケさん!？」

クウガMは変身を解き、ユウスケを支える。

「悪い、ライジングを連続で使った上にアメイジングまで使ったか

「体が動かないよ……………」

クウガは苦笑いすると気絶する。

「ユウスケさん!？」

ユウスケの状態に驚く雄司。

「雄司、お前はユウスケさんとアイツを病院まで運べ。」

ディケイドSはそう言つと、戦っている間に気絶していたアリサの方を見る。

「アリサちゃん!？」

アリサの状態に驚く雄司。

「俺はアレを追う。」

ディケイドSは紫色の球体を見ると、紫色の球体は市街地に向かった。

「あの方向はなのはちゃん達が居る……………」

「雄司、早く二人を病院に連れて行け!！」

雄司が紫色の球体に向かった方向を見ていると、ディケイドSは紫色の球体を追った。

その頃、市街地では

「空が突然、黒くなったで!？」

「それに、グロンギ達が喜んでる!？」

電王Aとオーズはそれぞれの武器でグロンギ達を切り倒しながら現在の状況に驚いていた。

「何が起きているんだ!？」

バースはバースバスターでグロンギを撃ち抜きながら現在の状況に驚いていた。

「おそらく、ゲルルが達成されたんだろう。」

アクセルはエンジンブレードで一体のグロンギを切り裂き、冷静に現在の状況を分析する。

「みんな、強いエネルギー体がこっちに接近してくるよ!!」

フェイトはそう言うと、アクセル達の前に紫色の球体が現れる。

「アレは？」

なのはが紫色の球体に近づこうとするが。

「我、復活する!!」

突然、球体が光り輝くと球体は消滅し変わりに一体の怪人が出現する。

「我はン・ガミオ・ゼダ、新たな闇となる者だ!!」

怪人^{ガミオ}はそう言うと、周りに居た全てのグロンギを闇に変え吸収すると、金色だった体が黒くなる。

「コレで、この世界は俺の物だ!!」

ガミオはそう言うと、周りに雷撃を放つ。

「フェイトちゃん!!」

「危ない!!」

なのはとフェイトはガミオの雷撃を食らいそうになるが。

「フェイトさん!!」

「危ないで!!」

オーズと電王Aが二人を庇いガミオの雷撃を食らう。

「ぐあっ!!」

雷撃を食らった二人は変身が解ける。

「和樹!!」

「健太郎君!!」

フェイトとなのはは二人に駆け寄る。

「隊長、コレってピンチだな!!」

「呑気に言っている場合か、真田!!」

バースとアクセルはガミオに立ち向かおうとするが、新たに現れたグロンギ達に足止めされる。

「奇妙なリントだな。」

ガミオはなのはとフェイトの方を見る。

「死ね!!」

ガミオはなのはとフェイトに襲いかかる。

「もうダメ……」

「翔夜君……」

なのはとフェイトは諦めかけていると。

「ATTACK - RIDE - SLASH」

「はぁっ!!」

「ぐっ!!」

駆けつけたディケイドSがディケイドスラッシュでガミオを切り裂

く。

「翔夜君!!」

なのははディケイドSに気づく。

「貴様はあの時のリントの戦士!!」

ガミオはディケイドSを見ると周りは黒い霧に覆われる。

「どうやら、ディケイドの事を知っているみたいだな。」

ディケイドSはライドブッカードを構える。

T o b e c o n t i n u e d .

第22話 復活（後書き）

次回、『決意』

感想と質問を待っています。

第23話 決意（前書き）

今回は雄司達が中心の話です。

それでは仮面ライダー & a m p ・リリカルなのは、始まります。

第23話 決意

海鳴市 市街地

「はあっ!!」

「ぐおおお!!」

ディケイドSのライドブッカーソードモードとガミオの爪がぶつかり合うが、ガミオがディケイドSを圧していた。

「コイツはどうだ。」

「ATTACK - RIDE - BLAST」

「ハッ!!」

ディケイドSはガミオをに向かってディケイドブラストを放つが。

「小癪な!!」

ガミオは目の前にバリアを張りディケイドブラストを防ぐ。

「喰らえ!!」

ガミオはディケイドSに向かって雷撃を放つ。

「ぐあっ!!」

ディケイドSはガミオの攻撃を食らい変身が解ける。

「翔夜君!!」

なのはとフェイトは翔夜の所に駆け寄ろうとするが。

「此处は通さないぜ!!」

数体のグロンギがなのは達を足止めしようとする。

「なのは、今は目の前の敵に集中しよう。」

「うん、解ったよフェイトちゃん。」

フェイトとなのははそれぞれの武器を構えグロンギ達に立ち向かう。

海鳴大学病院 とある病室

その頃、雄司は気絶したアリサとユウスケを病院に運び看病していた。

「うつ……………雄司?」

「アリサちゃん、良かった気がついて。」

アリサが目を覚まし、雄司はアリサを見て安心する。

「雄司、真導は?」

アリサは雄司に翔夜について尋ねる。

「翔夜は戦いに行ったよ、仮面ライダーとして。」

雄司はそう言う外を見る。

「アンタは行かないの？」

アリサは雄司に質問する。

「大丈夫、俺は翔夜を信じているからな。」

「雄司はアリサの質問を笑顔で答える。」

「アンタ達って本当に良く解らないよ、アンタと真導って本当に友達？」

アリサは少し呆れながらも雄司に尋ねる。

「友達だよ、アイツは俺のやりたい事を初めて認めたんだ。」

「雄司がやりたい事？」

雄司の言葉にアリサは尋ねる。

「ちょっと昔の話だよ。」

雄司は翔夜との一つの思い出を語りだした。

く雄司の回想く

一年前 真導写真館 翔夜の部屋

「雄司、お前に夢はあるのか？」

翔夜は雄司に尋ねる。

「どうしたんだよ翔夜？」

「いや、最近ちょっと夢を考えるようになったんだ。」

雄司は翔夜を見ると、翔夜は少し寂しそうな顔をしていた。

「そうなんだ、俺は夢は無いけどやりたい事はあるよ。」

「やりたい事、それって何だよ？」

雄司は納得し翔夜にやりたい事を話す。

「世界中の人々を笑顔にしたい、それが俺のやりたい事かな。」

雄司は部屋の外を見る。

「そ、そうなんだ。」

「オイ、俺は何時もコレを言うと笑われるんだけど。」

ちょっと驚いていた翔夜と雄司は少し呆れた顔になっていた。

「別に、流石に俺でも人のやりたい事をバカにするつもりはないよ。」

翔夜は苦笑いしながら雄司を見る。

「だが、お前ならそれが出来るだろう。」

翔夜はそう言つと外を見る。

く回想終了く

「それが真導の事を友達と言う理由か。」

アリスは雄司の話を聞いて納得していた。

「笑顔か」

いつの間にかユウスケも目を覚まし雄司の話を聞いていた。

「ユウスケさん？」

雄司はユウスケが目を覚ました事に気づく。

「雄司君、君はどうして世界中の人々を笑顔にしたいんだ？」

ユウスケは雄司に質問する。

「それは、……………誰かが悲しむのは誰だって嫌じゃですか。」
「えっ？」

雄司の言葉に驚くユウスケとアリサ。

「俺、もしかして何か変な事を言っただんですか？」

雄司は二人の反応を見て若干引いていた。

「はぁー、やっぱりアンタってバカだね。」

アリサはため息を吐きながら雄司を見る。

「雄司君、アークルを出して。」

「は、ハイ!!」

雄司はユウスケの指示に従いアークルを出現する。

するとユウスケもアークルを出現させ、金色の光を雄司のアークルに向けて放つ。

「ユウスケさん、一体何を？」

「君がクウガの継承者で良かったよ。」

さっきの現象に疑問に感じていた雄司に対してユウスケはサムズアップする。

「何だか良く解らないですが、俺はそろそろ翔夜の所に行きます!!」

雄司はそう言っていると病室から出て行き翔夜の居る市街地に向かった。

「さてと俺の役割も終えたし、行こうかな？」

ユウスケはそう言つとベットから起き上がる。

「ちょっと、アナタは何が目的だったの？」

アリサはユウスケに尋ねる。

「ああ、俺の目的はクウガの継承者である彼を見極めるつもりだったんだ。」

ユウスケはそう言つと病室から出て行つた。

「どういう事なの？」

アリサはユウスケの言葉の意味が解らなかつた。

T o b e c o n t i n u e d .

第23話 決意（後書き）

次回、仮面ライダー&リリカルなのは

雄司

「翔夜!!」

ガミオ

「貴様等、リントに何が出来るんだ!!」

翔夜

「だが少なくとも、コイツは誰かを笑顔にするために戦っているんだ。」

「FINAL・FORM・RIDE・KU、KU、KUUGA」

ディケイドS

「ちよっと、痛いぞ!」

次回『超絶』

感想と質問を待っています。

第24話 超絶（前書き）

クウガ編のラストです。

それでは仮面ライダー & a m p ・りりカルなのは、始まります。

第24話 超絶

海鳴市 市街地

「おらっ!!」

「ぐっ!!」

ガミオの猛攻撃を食らい続けボロボロになる翔夜。

「トドメだ!!」

ガミオは翔夜にトドメをさそうとするが。

「翔夜!!」

「がつ!!」

駆けつけた雄司がガミオに向かってドロップキックを放ち、ガミオは吹っ飛ばされる。

「雄司!!」

「翔夜、後は俺に任せろ!!」

雄司はそう言うときアークルを出現させる。

「食らえ!!」

ガミオは雄司と翔夜に雷撃を放つ。

「ぐあ!!」

ガミオを攻撃を食らい、地面に倒れる翔夜と雄司。

「見たか、コレがグロンギの力だ。」

ガミオはそう言う、空に浮かび上がり倒れた翔夜達を見下す。

「貴様等リントも我らグロンギのY「ふざけるなよ!」、何!？」

ガミオが喋っていると倒れた翔夜がガミオに向かって言い放つ。

「お前の力は誰かを傷つける為の力に過ぎないんだよ!！」

翔夜はフラつきながらも立ち上がる。

「黙れ、貴様等リントに何が出来るんだ!！」

ガミオは翔夜に向かって雷撃を放つ。

「くつ、だが少なくともコイツは誰かを笑顔にするために戦っているんだ。」

翔夜はガミオの攻撃を紙一重で避け、雄司に指を指す。

「そうだろう、雄司!！」

「ああ!！」

翔夜の言葉に雄司は立ち上がりアークルを出現させる。

「おのれ、貴様は一体何者なんだ!？」

ガミオは翔夜に尋ねる。

「通りすがりの仮面ライダーだ!」

翔夜はディケイドライバーを腰に装着する。

「その心に刻んでおけ!！」

翔夜はディケイド・ストライクのカードをガミオに見せつける。

「変身!！」

「K A M E N - R I D E - D E C A D E S T R I K E」

翔夜はディケイドS、雄司はクウガMに変身する。

「コレは!？」

変身した直後、ライドブッカーから二枚のカードが飛び出ると、それをディケイドSはキャッチする。

「行くわよ、なのは!」

「解ったわ、フェイトちゃん!」

フェイトとなのはは5体のグロンギと対峙していた。

「ショートバスター！」

「プラズマランサー！」

なのはとフェイトは砲撃魔法をグロンギ達に放つ。

「ぐえっ！！」

グロンギ達はなのは達の攻撃を食らいフラつく。

「ハーケンセイバー！」

フェイトはグロンギ達の間合いに一瞬で入り、バルディッシュでグロンギ達を切りつけていき、グロンギ達は一カ所に集まる。

「今よ、なのは！」

フェイトはグロンギ達から離れる。

「全力全開、スターライトブレイカー！！！」

なのははグロンギ達に砲撃魔法”スターライトブレイカー”をグロンギ達に放ちグロンギ達は爆死する。

「さてと、俺達も決めますか隊長。」

「当然だ」

「ENGINE」

「JET」

バースはバースバスターでアクセルはエンジンブレードから放たれるエネルギー弾をグロンギ達に放つ。

「「がつー!!」」

バースとアクセルの攻撃を食らいグロンギ達はフラつく。

「ブレストキャノン」

「セルバースト」

「セルバースト」

「セルバースト」

「ブレストキャノン、チャージ完了!!」

バースはブレストキャノンを召喚し、更に数枚のセルメダルを投入しエネルギーをチャージする。

「ENGINE」

「MAXIMUM-DRIVE」

アクセルはエンジンメモリをエンジンブレードに装填しグロンギ達に向かって走る。

「はぁあっ!!」

「ブレストキャノン、ファイヤー!!」

アクセルのダイナミックエースがグロンギ達に決まり、更にバースのブレストキャノンを食らいグロンギ達は爆死する。

「はぁあっ!!」

クウガMはガミオに向かって殴りかかるが。

「ぬおっ!!」

ガミオはクウガMの攻撃を受け止めるが。

「ハッ!!」

「があっ!!」

ガミオの死角からディケイドSがライドブッカー ソードモードで切り裂き、ガミオはダメージを食らう。

「はぁあっ!!」

「ぐおっ!!」

クウガMとディケイドSは同時に強力なパンチでガミオを吹っ飛ばす。

「おのれええ、リントの戦士とクウガア!!」

怒りだしたガミオは念力で近くにあった巨大な瓦礫をクウガMとデ

イケイドSに投げ飛ばす。

「ヤバいぞ、翔夜!!」

「コレを使ってみるか。」

クウガMはガミオの攻撃に焦るが、ディケイドSは一枚のカードを取り出しディケイドライバーに装填する。

「FINAL - FORM - RIDE - KU、KU、KUUGA」

「ちょっと、痛いぞ!」

「えっ、一体何するんだ!？」

ディケイドSはクウガMの背中を触るとクウガMの姿が変わりクウガゴウラムに変わり、飛んできた瓦礫を体当たりで破壊する。

「どうなっているんだよ、翔夜!？」

クウガゴウラムは自分に起きた現象に驚くが。

「俺が知るか、とにかく行くぞ!!」

ディケイドSはそう言うത്とライドブッカーを取り出し、クウガゴウラムの上に乗リガミオに向かって突進する。

「おのれえええ!!」

ガミオは雷撃をクウガゴウラムに向かって放つが、クウガゴウラムは雷撃を避けてライドブッカー ソードモードでガミオを切り裂く。

「おのれええ、はっ!!」

ガミオは周りの瓦礫をクウガゴウラムに向かって念力で投げ飛ばす。

「うおおお!!」

デイクイドSはクウガゴウラムから降りると、クウガゴウラムは瓦礫を弾き飛ばしながらガミオを顎で挟み、そのまま空中に飛び上がる。

「FINAL - ATTACK - RIDE..... KU、KU、KUUGA」

デイクイドSは一枚のカードをデイクイドライバーに装填すると、クウガゴウラムはガミオを顎で挟みながらもデイクイドSに向かって降下し、デイクイドはガミオに向かってキックを放つ。

「はあああっ!!」

デイクイドアサルトが決まり、クウガゴウラムはクウガMの姿に戻る。

「リントよ...再び闇が.....晴れるぞ」

ガミオはそう言っていると爆死する。

「終わったか。」

「手強い相手だった。」

ディケイドSとクウガMは変身を解くと、突然二人の周りに銀色のオーロラが現れる。

「此処は？」

「どうなっているんだ？」

翔夜と雄司の周りの景色は何処かの夜の市街地に変わっていた。

「どうやら、ディケイドの力を知ったみたいだね。」

翔夜達の前に冒険者の格好をしていた男性とユウスケが現れる。

「アンタは！？」

「ユウスケさん、どうなっているんですか？」

ユウスケ達に驚く翔夜と雄司。

「雄司君、翔夜君、クウガの力を完全に手に入れたね。」

ユウスケは雄司達に笑顔でサムズアップする。

「えっ？」

「どういう事だ？」

ユウスケの言葉に驚く雄司と翔夜。

「まず雄司君、君はクウガとして戦う意味を知った事でクウガの本当の力を手に入れたんだ。」

「クウガの本当の力？」

男性の言葉に驚く雄司。

「そして翔夜君、他のライダーと絆を手に入れる事でディケイドは本当の力を引き出すんだ。」

「大体解った、アンタ達は俺達を試していたんだな。」

男性の言葉に翔夜は納得する。

「まあその通りだね、君達継承者の力が全て揃えばショッカー帝国を倒せる筈。」

男性はそう言うのと翔夜達の周りに銀色のオーロラが出現する。

「ちょっと待てよ、アンタは一体？」

翔夜は男性に尋ねる。

「俺か、俺は2000の技を持つ男だよ。」

男性はそう言うのとクウガの面影と重なりサムズアップする。

「頑張れよ、継承者！！」

ユウスケは翔夜達に笑顔でサムズアップする。

「もしかしてアナタが」

雄司が男性の正体に気づくが銀色のオーロラは二人を包み込み二人は元の場所に戻っていった。

「行きましたね、五代さん。」

「そうだね。」

ユウスケと男性（五代）はその場に座り込む。

「ユウスケ君、良いのかい金のクウガの力を彼に渡して？」

五代はユウスケに尋ねる。

「今は無理だと思いますけど、彼ならいずれ使いこなしますよ。」

ユウスケは五代の質問に答える。

「それにしても、あの二人を見ていて君と土君を思い出すよ。」

五代はそう言うとユウスケの方を見る。

「土の奴、今頃なにしているだろう？」

ユウスケはそう言うと夜空を見上げていた。

真導写真館

「翔夜君、その写真は？」

真導写真館では翔夜が写真を見ている所をなのはが尋ねる。

「ああ、ちよつと前に撮った写真を現像したんだいつの間にか写真が変わっていたんだ。」

写真に写っていたのは翔夜と雄司がそれぞれライダーに変身しようとする姿とその後ろに五代とユウスケが笑顔でサムズアップをしていた。

「それより、何でお前達が居るんだ？」

翔夜はなのはと雄司に説教していたアリサに質問する。

「冴島君と一緒に夕飯を食べようって。」

「私はこのバカ（雄司）の説教となのはに夕飯を誘われたの。」

翔夜の質問に答えるのはとアリサ。

「駄目かな、翔夜君／＼／／」

上目遣いで翔夜に尋ねるのは。

「べ、別に良いが（その目は反則だろう）／＼／＼／／／」

翔夜は顔を真っ赤にしながらなのはを見る。

「皆さん、夕飯の準備が出来ました。」

キッチンで夕飯の準備をしていたナツミが大きな鍋に入ったカレーを持ってくる。

「あれ、今夜は天ぷらじゃないの？」

雄司は鍋を見て疑問に感じる。

「ちょっと前に小野寺君って青年がそのカレーを持って来てね、みんなで食べてたそうだよ。」

炊飯器を用意していた栄市郎は全員に説明する。

「ユウスケさんが？」

「とにかく、食べるか。」

栄市郎の説明に驚く雄司、他のメンバーはカレーを食べ始めていた。

T o b e c o n t i n u e d .

第24話 超絶（後書き）

次回は未定です。

感想と質問を待っています。

第25話 現状と出張（前書き）

今回はかなり短いです。（笑）

それでは仮面ライダー & a m p ・りりカルなのは、始まります。

第25話 現状と出張

ガミ才達を倒してから一週間後

ライダー隊 とある一室

「シヨツカー帝国がアギトの世界を襲ったと？」

「ああ、数日前にシヨツカー帝国の軍団がアギトの世界を襲ったんだが、風見と筑波がアギトの世界のライダー達と共に撃退は出来た。」

本郷は一文字の報告を聞いて難しい顔をしていた。

「今は響鬼の世界で調査をしていたアマゾンと合流しだい、シヨツカー帝国を追うみたいだ。」

一文字はそう言うで一冊のファイルを取り出す。

「だが、これでは他の世界でのシヨツカー帝国の搜索が出来ないな。」

本郷は一文字の取り出したファイルを見始める。

「神や沖達は自分達の世界と他の世界の守る事で動けないし、ブラツクの二人もシヨツカー帝国の調査で無理だしな。」

「他のライダー達も同じ様な理由だし、結城はライダーシステムの開発で居ないからな。」

二人はファイルを見ながら難しい顔をしていると。

「あの二人に頼むか。」

「ああ」

二人は何かを閃いた。

ライダー達 隊長室

「と言うわけだ、真田」

「つまり、別の世界に出張っていう訳だな。」

ライダー達の隊長室では五十嵐と真田が話し合っていた。

「それにしても、司令官達も思いきった事をするよ。」

「それだけ現状は厄介だという事だ。」

真田と五十嵐は報告書を見てそれぞれの感想を言っていた。

「それで俺達が居ない間、継承者達はどうするんだ？」

真田は五十嵐に質問する。

「暫くは前園が隊長代理として、継承者達をフォローするつもりだ。」

五十嵐は真田の質問に答える。

「それにグロンギ事件の後に真導が言っていた話が本当なら、俺達

はショッカー帝国の搜索と修行をするぞ。」

五十嵐はそう言うつと机に置いていたコーヒーを飲む。

「修行つて、何で!？」

真田は五十嵐の言葉に驚く。

「お前もこの前の戦いで解つただろう、俺達は今まで色々な場所で戦ってきたが、ライダーとしての戦闘はまだまだだ。」

「確かにそうだけど。」

五十嵐の言葉に納得する真田。

「だから修行だ」

「解りました、隊長」

真田は五十嵐の言葉に諦め、数日後二人はショッカー帝国の搜索として様々な世界を出張する事になった。

T o b e c o n t i n u e d .

第25話 現状と出張（後書き）

次回、仮面ライダー&リリカルなのは

紅牙

「すずかちゃんに謝らないといけないな。」

翔夜

「誰なんだ？」

名護

「ディケイドの継承者である君に私の試練を受けて貰おう。」

ポーラベアファンガイア

「見つけたぞ、我等の王子！！」

健太郎／和樹

「えっ！？」

紅牙

「どうして、それを！？」

次回、『レッスン・イクサの試練と紅牙の秘密』

次回からキバ編

感想と質問を待っています。

第26話 レッスン・イクサの試練と紅牙の秘密（前書き）

今回からキバ編です。

それでは仮面ライダー&リリカルなのは、始まります。

第26話 レッスン・イクサの試練と紅牙の秘密

五十嵐と真田が別世界に向かってから3日後

キャスルドラン 王の間

「はあ〜」

王の間では椅子に座った紅牙がため息を吐いていた。

『どうしたんだ紅牙、ため息なんかついて？』

紅牙の所に心配していたキバットが飛んできた。

「すずかちゃんの事を思い出していたんだ。」

『あの子の事が、お前はあの時はすぐに逃げたからな。』

それから紅牙とキバットは数分間何かを考えていた。

『紅牙、あの子に謝ったらどうだ？』

「えっ!？」

キバットの提案に驚く紅牙。

その後、紅牙は数分間黙り込んでいると。

「すずかちゃんに謝らないといけないな。」

紅牙はすずかに謝ることを決めた。

「そう言えばキバット、キバーラは？」

紅牙はキバットの妹であるキバーラの事を尋ねる。

『アイツなら、まだ寝ているぜ。』

キバットはそう言つと、近くに置いていた机の上に座る。

『そろそろアイツにも、変身者を決めてほしいんだけどな。』

キバットはキバーラの事を心配していた。

翌日

海鳴市 とある路上

「それで翔夜君、次はどのライダーと仲良くなるの？」

「仲良くなるって、そう言う訳じゃ無いだろう。」

学校を終えたなのは翔夜と共に家に帰る途中だった。

「あの男が言っていた通りなら、ユウスケさんと同じ様に俺達を試しに来るだろう。」

「その通りだ。」

突然、翔夜達の後ろで声がした。

「誰なんだ？」

翔夜達は後ろを振り向いて見ると、スーツ姿の男性が立っていた。

「君がディケイドの継承者だね。」

男性は翔夜に指をさしながら尋ねる。

「翔夜君の知り合い？」

「アンタは一体？」

なのはは翔夜の知り合いだと思うが、翔夜は男性が誰か解らなかった。

「私は名護 啓介、今年で23になる男だ。」

男性（名護）は翔夜達に自己紹介する。

「それで、アンタは俺に何の用だ？」

翔夜は名護に質問する。

「ディケイドの継承者である君に私の試練を受けて貰おう。」

名護は翔夜の質問に答えるとイクサベルトを腰に巻きイクサナックルを構える。

「どういう事なんだ？」

翔夜もディケイドライバーを腰に巻きカードを構える。

「私の試練をクリアすれば君にキバの本当の力をくれてやろう。」

「レ・ディ・イー」

「大体解った、要するにお前を倒せば良いんだろっ。」

「KAMENIRIDE」

「変身！！」

「フ・イ・ス・ト・オ・ン」

「DECADE STRIKE」

名護は仮面ライダーイクサ バーストモード、翔夜はディケイドS
に変身しそれぞれの武器を構える。

「継承者、その実力、私に見せて貰おう。」

イクサBはイクサカリバーをカリバーモードにして構え、ディケイ
ドSに言い放つ。

「良いぜ、だが、返り討ちにしてやるがな！！」

ディケイドSはライドブッカーをソードモードにしてイクサBに切

りかかる。

「どうなっているの？」

なのはは二人の戦いに驚いていた。

海鳴中学校 音楽室

「どうしだの、突然呼び出して？」

「すずかちゃん、この前はごめんね。」

その頃、海鳴中学校の音楽室ではすずかを呼び出した紅牙がすずかに謝っていた。

「へえ、黒月君って以外としっかりしているんだね。」

「ほんまやな。」

「それよりもフェイトさんにはやてさん」

「こんな事をして良いんですかね？」

「別に良いでしょう。」

「それより、アイスが食いたい。」

音楽室の扉の隙間からフェイト、はやて、和樹、健太郎、アリサ、アंकが二人の様子を見ていた。

「別に良いよ、それより紅牙君って一体何者なの？」

「それは、その……………」

すずかの質問に紅牙は黙り込んでいると。

「見つけましたよ!!」

突然灰色のオーロラが出現すると中からポーラベアファンガイア（ポーラベア）とライノセラスファンガイア（ライノセラス）が現れる。

「あれは!?!」

「ファンガイア!!」

ファンガイアを見た和樹と健太郎は扉を開けて紅牙の所に駆け寄る。

「和樹君、健太郎君!?!」

二人に驚く紅牙。

「手を貸すよ、紅牙!!」

「ゴメン、盗み聞きするつもりは無かったんだけど。」

和樹と健太郎はそれぞれの変身アイテムを取り出す。

「邪魔をするな、人間が!!」

「ようやく、我等の王子を見つけたのだからな!!」

ライノセラスとポーラベアは怒りながら和樹達に言う。

「「えっ!?!」」

ポーラベアの言葉に驚く和樹と健太郎。

「ごめん、今は説明出来ないんだ、キバット!」

『キバツていくぜ!』

「何だか解らないけど、アング、メダル!」

「ちっ、早く終わらせてアイスを食べに行くからな!」

「モモタロス、いくよ!」

『久しぶりに、暴れるぜ!』

「「「変身!」」」

「S W O R D F O R M」

「タカ、トラ、バッタ、タ・ト・バ、タ・ト・バ、タトバ!」

「俺、参上!」

「フェイトさんとはやてさんは、すずかさん達をお願いします。」

電王Sは決まりのポーズをして、オーズはフェイトとはやてにすずかを守るように頼む。

「二人共、いくよ!」

キバK、電王S、オーズはポーラベアとライノセラスに立ち向かう。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.

第26話 レッスン・イクサの試練と紅牙の秘密（後書き）

次回、『夢想・キバの王子と灼熱コンボ』

感想と質問を待っています。

第27話 夢想・キバの王子と灼熱コンボ（前書き）

雄司「前回までの仮面ライダー & a m p ・リリカルなのは！！

・放課後、翔夜となのはは名護という人に会い、いきなり戦い始める。

・その頃、音楽室では紅牙はすずかちゃんに謝っていると、ライノセラスファンガイアとポーラベアーファンガイアに近くで盗み見をしていた和樹や健太郎達と共に戦う事になる。

翔夜「何で、お前があらすじをやっているんだ？」

雄司「今回のキバ編、今の所出番が無いから。」

第27話 夢想・キバの王子と灼熱コンボ

海鳴中学校 グランド

「おらあっ！！」

「くぐあっ！！」

音楽室からグラウンドに移動したライノセラスはキバK達を殴り飛ばしていた。

「行きますよ！」

ポーラベアーは高速移動でキバK達の間合いに入り、大剣で切り裂いていく。

「くぐああっ！！」

ポーラベアーの攻撃に倒れ込むキバK達。

（なのは、翔夜君と一緒に来て！）

フェイトは念話でなのはに伝える。

（こっちもすぐに向かいたいんだけど。）

なのははディケイドSとイクサBの戦いを見ていた。

「はあっ!!」

デイクイドSはライドブッカーソードモードでイクサBに切りかかるが。

「甘いな!!」

イクサBはデイクイドSの攻撃を紙一重で避け、イクサカリバーカリバーモードでデイクイドSを切り裂く。

「筋は良いが、剣の腕は30点だな。」

「何だと!？」

イクサBはデイクイドSの評価をすると、イクサカリバーをガンモードにして構える。

「銃の腕はどうかな？」

イクサBはイクサカリバーでデイクイドSを狙い撃つ。

「くっ、嘗めるなよ!!」

デイクイドSはイクサBの攻撃を避け、ライドブッカーをガンモードにして、更に一枚のカードをデイクイドライバーに装填する。

「ATTACK RIDER BLAST」

「はっ!!」

ディケイドSはディケイドブラストをイクサに向けて放つが。

「その程度か!!」

イクサはイクサカリバーをガンモードからソードモードに変え、ディケイドブラストを全て切り落とす。

「銃の腕は12点だな。」

イクサBはディケイドSの評価をする。

（すぐに行けないと思う。）

なのははディケイドSとイクサBの戦いを見て、念話でフェイトに状況を伝える。

「そうだ、二人はサイのファンガイアを頼む。」

オーズは何かを思いつくと、キバKと電王Sに指示をする。

「別に良いが」

「一人で大丈夫ですか？」

オーズの指示に疑問を感じる電王SとキバK。

「大丈夫、秘策があるから。」

オーズはそう言うと二枚のコアメダルを取り出す。

「和樹の奴、まさか!？」

オーズの思いつきに気づいたアंकは慌ててメダルホルダーを開く。

（和樹の奴、いつの間にライオンとチーターのメダルを盗ったんだ？）

メダルホルダーを見るとライオンとチーターメダルが入っていた。なかった。

「ライオン・トラ・チーター、ラッタ、ラッター、ラトラーター」

オーズはタトバコンボからラトラーターコンボに変わる。

「はあっ!!」

「ぐっ!!!!」

「眩しい!!!!」

オーズはライオディアスでライノセラスとポーラベアーを怯ませる。

「はっ!!」

「ぐおっ!!」

オーズはチーターレグのスピードで素早くファンガイア達の間合いに入るとそのままポーラベアーを蹴り飛ばす。

「嘗めないでくださいよ!!」

ポーラベアーも高速移動でオーズに襲いかかるとする。

「凄いな」

「僕達も行きましょう!!」

電王Sはオーズの力に驚き、キバKは紫色のフェッスルを取り出しキバットに吹かせる。

『ドツガハンマー!!』

キバKはキバフォームからドツガフォーム（キバD）に変わる。

「健太郎達はアイツを引きつけて、僕が決める!!」

『ドツガバイト!!』

「解ったよ!!」

（任せて）

「FULL CHARGE」

「おのれええ!!」

ライノセラスはキバD達に襲いかかる。

「俺の必殺技!!」

「ぐっ!!!!」

電王Sはデンガシャーでライノセラスの動きを封じる。

「はあああ!!」

空高くジャンプしたキバDはライノセラスに向かってドツガハンマーを振り下ろす。

「スペシャルバージョン!!」

電王SのエクストリームスラッシュとキバDのドツガ・サンダーズラップが決まり、ライノセラスは爆死する。

「ハッ!!」

「はあっ!!」

高速移動をしながらポーラベアーの大剣とオーズのトラクローがぶつかり合っていた。

「スキヤニングチャージ」

「せいや!!」

ラトラーターコンボの必殺技”ガツシユクロス”が決まり、ポーラベアーは爆死する。

「和樹!!」

「やりましたね!!」

変身を解いた健太郎と紅牙はオーズの所に駆け寄る。

「ハイ、お二人も……………」

オーズは二人を見て変身を解くと、そのまま倒れ込んでしまう。

「和樹!？」

「大丈夫かいな!？」

「全く、無闇にコンボを使うな!！」

倒れ込んだ和樹を見たフェイト、はやて、アंकはすぐに駆け寄った。

キャッスルドラン 王の間

その頃、王の間ではライオンファンガイア（ライオン）やスワローテイル（スワローテイル）ファンガイアが王の間を荒らしていた。

「やはり此処にはキバが居ないようだな。」

一人の男性が王の間の椅子に座り周りを見渡す。

「あらら、大変な事になっているね。」

そんな彼等に気づかれないように、キバットの妹、キバーラは彼等の様子を見ていた。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.

第27話 夢想・キバの王子と灼熱コンボ（後書き）

次回、『威風堂々・キングの企みと重量コンボ』

感想や質問を待っています。

第28話 威風堂々・キングと重量コンボ（前書き）

アंक「これまでの仮面ライダー & a m p ; リリカルなのは、

・ディケイドSはイクサBに大苦戦

・その頃、健太郎達はライダーに変身するがファンガイア達に苦戦、しかし和樹が俺が持っていたコアメダルを盗ってラトラーターコンボに変身しファンガイア達を倒す。

・しかし、キャッスルドランではライオンファンガイアとスワローテイルファンガイア、そして謎の男性が占拠していた。」 イラつきながらもあらすじの台本を読む。

和樹「何でイラついているんだ、アंक？」 原因

アंक「お前のせいだろう!!」 アイスを食べていた。

第28話 威風堂々・キングと重量コンボ

キャッスルドラン 王の間

「遂に我等の城を取り戻したぞ！！！」

王の間で喜びながら叫ぶライオンファンガイア。

「喜ぶなルーク、いずれ俺が戻る城だったんだ、取り戻して当然だ。」

椅子に座っていた男性はライオンファンガイアに言い放つと、椅子から立ち上がる。

「キング、キバの捜索に向かわせたライノセラス達がやられました。」

突然、王の間にライフエナジーが現れるとスワローテイルファンガイアは男性に報告する。

「場所は何処だ、ビショップ」

スワローテイルファンガイアの報告にキングは冷静に聞く。

「海鳴中学校です、他の仮面ライダーが居るみたいですが、どういたしましょうか？」

スワローテイルファンガイアはキングに尋ねる。

「キングが命ずる、ルークとビショップはショッカー帝国の戦闘員と共にキバを此処に連れてこい、他の仮面ライダー達は始末しろ。」
「「御意!」!」」

キングがライオンファンガイアとスワローテイルファンガイアに命令すると、二人はキャッスルドランを後にする。

「早く我の所に来い、息子よ」

キングは窓を見て嘆いていた。

「もう終わるか、ディケイドの継承者」

イクサBと戦っていたディケイドSは地に伏せていた。

「ただだぜ、今度はこっちがお前を評価してやるよ。」

ディケイドSは一枚のカードを取り出し、ディケイドライダーに装填する。

「KAMEN - RIDE - KUUGA」

ディケイドSはクウガM（DSクウガM）に変わり、イクサBに殴りかかる。

「私を評価するだ！？」

イクサBはDSクウガMの攻撃を避けるとイクサカリバーでDSクウガMに切りかかるが、DSクウガMはイクサBからイクサカリバーを奪う。

「まず、武器を奪われたからマイナス30点！！」

DSクウガMはイクサBに言い放つと一枚のカードをディケイドライバーに装填する。

「FORM - RIDE..... KUUGA、TITAN」

DSクウガMはクウガ タイタンフォーム（DSクウガT）にフォームライドすると奪ったイクサカリバーはタイタンソードに変わる。

「はあっ！！」

DSクウガTはタイタンソードでイクサBを切りつけていく。

「まだだぜ行くぜ！！」

DSクウガTはそう言うとも一枚のカードをディケイドライバーに装填する。

「FORM - RIDE - KUUGA、DRAGON」

DSクウガはタイタンフォームからドラゴンフォーム（DSクウガD）にフォームライドし、タイタンソードはドラゴンロッドに変わ

る。

「ハッ!!」

「ぐっ!!」

DSクウガDはドラゴンフォームのスピードでイクサBを翻弄しドラゴンロッドで叩きつけていく。

「相手の攻撃を食らいすぎだな、マイナス30点だ!!」

DSクウガDはそう言うത്マイティフォームに戻り一枚のカードをデイクイドライバーに装填する。

「FINAL - ATTACK - RIDE..... KU、KU、KUU
GA」

「はああっ!!」

「ぐおおっ!!」

DSクウガMの必殺技”マイティキック”がイクサBに決まり、イクサBは吹っ飛ばされ変身が解ける。

「変身が解けたからマイナス40点、これでマイナス100点だな。

」

DSクウガMは名護に言い放つと変身を解く。

「翔夜君、少しやりすぎじゃないの?」

なのはが翔夜の所に駆け寄る。

「大丈夫だろう、キバの本当の力を教えて貰おうか？」

翔夜は名護に尋ねる。

「どうやら君の実力なら、キバの本当の力を手に入れられるだろう。」

名護はそう言うと、突然出現した灰色のオーロラに入って行く。

「オイ、キバの本当の力は！？」

翔夜は名護を追いかけようとするが、名護は灰色のオーロラの中に消えて行く。

「さて、どうするか？」

灰色のオーロラが消えると翔夜はその場で考え込む。

「翔夜君、紅牙君達が大変なんだよ！！」

「何だって！？」

なのはは紅牙達の状況を翔夜に説明する。

海鳴中学校 音楽室

ライノセラス達を倒した、紅牙達は音楽室で休んでいた。

「それで、紅牙君って一体？」

「アイツ等は、お前の事を王子とか言っていたが？」

健太郎とアंकは紅牙に尋ねる。

「僕はファンガイアの王子です。」

「しかも、コイツの親父はそのファンガイアのキングだしな。」

紅牙とキバットは健太郎達に真実を話す。

「「紅牙君が!?!」」

「「ファンガイア!?!」」

すずか、アリサ、はやて、コンボの影響で倒れた和樹を看病していたフェイトは紅牙とキバットの言葉に驚いていると、学校のグラウンドで爆発音がする。

『健太郎、ショッカーの奴らだぜ!?!』

健太郎の所にモモタロスがショッカーの出現を知らせに現れる。

「フェイト達は和樹を頼む、行くよ紅牙君!?!」

「えっ、でも僕は？」

健太郎の言葉に困惑する紅牙。

「今はそんな事を言っている場合じゃ無いよ!!」

健太郎はそう言うと、紅牙を連れてグラランドに向かう。

海鳴中学校　グラランド

「キバよ、隠れてないで出て来い!!」

ライオンファンガイアとショッカー戦闘員がグラランドで暴れていた。

「隠れるつもりは無いよ!!」

ライオンファンガイア達の前に健太郎と紅牙が現れる。

「見つけたぞキバ、貴様をキングの前に連れて行く!!」

ライオンファンガイアはそう言うとショッカー戦闘員は健太郎と紅牙に襲いかかる。

「変身!!」

健太郎は電王ロッドフォーム（電王R）、紅牙はキバKに変身する。

（何でウラタロスなの!?!）

「先輩には任せれないと言うか最近、僕の出番が無いからね。」

メタ発言をする電王Rはデングツシャーをロッドモードにして襲いかかるショッカー戦闘員を薙払う。

「ハッ!!」

キバKはショッカー戦闘員をパンチやキックで倒していくと、ライオンファンガイアに向かって蹴り飛ばそうとするが。

「効かん、フン!!」

キバKの攻撃を受け止めたライオンファンガイアはキバKを殴り飛ばす。

（紅牙君!!）

「あのファンガイア、かなり強いね。」

電王RはキバKのフォローに向かおうとするが、ショッカー戦闘員が邪魔をする。

「キングの所に行こうか。」

「くっ!!」

ライオンファンガイアはキバに駆け寄ろうとするが、キバKは立ち上がりライオンファンガイアから少し離れる。

「させるか!!」

ライオンファンガイアとキバKの前に和樹が駆けつける。

（和樹君！？）

「あれ、倒れたいたんじゃ無いの？」

電王Rは和樹に驚いていた。

「話はフェイトさん達から聞きました、ファンガイア、紅牙は俺達の仲間だ！！」

和樹はライオンファンガイアに言い放つと、オーズドライバーを腰に巻き三枚のメダルを取り出す。

「変身！！」

「サイ・ゴリラ・ゾウ、サゴーズ……サゴーズオオッ」

和樹はオーズ サゴーズコンボに変身する。

「和樹君、そのコンボは！？」

キバKはサゴーズコンボの姿になったオーズに尋ねる。

「またアंकからメダルを拝借。」

オーズは仮面の奥で苦笑いすると、ライオンファンガイアを見る。

「何が来ようと無駄だ！！！！」

ライオンファンガイアはサゴーズコンボに殴りかかる。

「ハッ!!」

オーズは片方のゴリバゴーンでライオンファンガイアの攻撃を防ぐと、もう片方のゴリバゴーンでライオンファンガイアを殴り飛ばす。

「おのれえええ!!」

ライオンファンガイアは指先からロケットクローを放つ。

「はあああ!!」

オーズはバゴーンプレッシャーを放ち、ロケットクローを撃ち落とすとそのままライオンファンガイアにダメージを与える。

「スキヤニングチャージ」

「せいや!!」

サゴーズコンボの必殺技”サゴーズインパクト”が決まり、ライオンファンガイアは爆死する。

「なかなか、凄かったね。」

電王Rがオーズの所に駆け寄る。

「どうやらルークを倒したようだな。」

突然灰色のオーロラが出現すると中からキングが現れる。

「アレは!?!」

オーズはキングに驚く。

「父さん!!!!!!」

キバKはキングを見て叫ぶ。

「今度は私が相手しよう。」

キングはそう言うとビートルファンガイアの姿に変わる。

「大変な事になったな、?世」
『全くだ』

海鳴中学校の屋上では一人のバイオリンケースを持った男性と黒いキバットが様子を見ていた。

T o b e c o n t i n u e d .

第28話 威風堂々・キングと重量コンボ（後書き）

次回、『アンコール・天才のメロディー』

感想と質問を待っています。

第29話 アンコール・天才のメロディー（前書き）

キバ編もいよいよ後半へ

それでは仮面ライダー & a m p ・リリカルなのは、始まります。

第29話 アンコール・天才のメロデー

「はあああ!!」

ビートルファンガイアはオーズと電王Rに雷撃を放つ。

「ぐあっ!!」

オーズと電王Rはビートルファンガイアの攻撃を食らい、変身が解けその場に倒れる。

「継承者も大したこと無いな」

ビートルファンガイアは倒れた二人に言い放つとキバKを見る。

「紅牙、久し振りだな。」

「父さん、何故人間を襲うんですか!？」

紅牙はビートルファンガイアに尋ねる。

「人間は我らファンガイアにとって餌に過ぎない、だから襲うのさ!」

「違うよ、何時か人間とファンガイアは手を取り合っていける僕はそう信じている!!」

ビートルファンガイアの言葉に反論するキバK。

「その通りだぜ、紅牙!!」

キバKの所にクウガMに変身した雄司が駆けつける。

「雄司君!!」

クウガMの登場に驚く紅牙。

「誰だ貴様!!」

ビートルファンガイアはクウガMに尋ねる。

「紅牙の友達、仮面ライダークウガこと冴島 雄司!!」

クウガMはビートルファンガイアに名乗るとビートルファンガイアに殴りかかる。

「紅牙の友達だと!?!」

「ああ、事情はイマイチ解らないが、俺達は紅牙の友達なんだよ、だから友達の為に体を張れるんだ!!」

「何!!」

ビートルファンガイアはクウガMの攻撃を受け止めるが、クウガMはビートルファンガイアを投げ飛ばす。

「おのれええ、人間風情が!!」

クウガMに怒り狂ったビートルファンガイアはクウガMにエネルギー弾を放つ。

「ぐあああ!!」

ビートルファンガイアの攻撃を食らったクウガMは変身が解け地面に倒れ込んでしまう。

「人間風情がファンガイアのキングである俺に逆らうとは、やはり愚かだな。」

ビートルファンガイアは雄司を足で踏みつけながら言い放つ。

「父さん、止めてください!!!」

キバKはビートルファンガイアに叫ぶ。

「なら紅牙、貴様は俺と共に城に来い!!!」

ビートルファンガイアはそう言う人と人間の姿に戻る。

「……………解りました、父さん。」

キバKは変身を解きキングの所に歩み寄る。

『オイ、紅牙!!!』

キバットは紅牙は止めようとする。

「キバット、雄司に伝えといて、僕も友達の為に体を張るって。」

紅牙はそう言うと、ビートルファンガイアと共にキャッスルドランに向かって行った。

「くっ…………紅牙」

「何で行くの、紅牙君」

「紅牙君は、俺達の為に」

目を覚ました雄司、和樹、健太郎はキバットから事情を聞き悔しい表情になっていた。

『みんな……………』

キバットは三人を心配して見ていると。

「案ずるな、貴様等は此处で消えて貰おう。」

雄司達の前にスワローテイルファンガイアと数体のショッカー戦闘員が現る。

「ファンガイア!!」

「まだ、居たのかよ!!」

「幾ら何でも、しつこいよ!!」

雄司達はそれぞれの変身アイテムを取り出し変身しようとするが。

「動くな、こつちには人質が居るのだから!!」

スワローテイルファンガイアはそう言うと言った数体のショッカー戦闘員が縄で縛ったフェイト、はやて、アリサ、すずかを連れてくる。

「フェイトさん!!」

「はやてちゃん!!」

「アリサちゃんにすずかちゃん!!」

雄司達はフェイト達を見て驚く。

「私はルークとは違って、策を考える者でね。」

スワローテイルファンガイアはそう言うと言と剣を取り出し構える。

「卑怯だぞ!!」

「はやてちゃん達を解放しろ!!」

和樹と健太郎はスワローテイルファンガイアを睨みつけながら言い放つ。

「卑怯で結構、勝てば良いのだからな。」

スワローテイルファンガイアはそう言うと言とすずか達に剣を向けようとするが。

「「「イー!!」」」

「何!?!」

突然、黒いキバットが現れるとショッカー戦闘員やスワローテイルファンガイアを吹っ飛ばし、その隙にすずか達はスワローテイルファンガイア達から離れていく。

「誰だ、一体!?!」

スワローテイルファンガイアは周りを見渡すと一人の男性が現れる。

「誰だ貴様！？」

スワローテイルファンガイアは男性に尋ねる。

「紅 音也、偉い人だ。」

男性（音也）は自らの名を名乗るとすずか達の方を見る。

「全く、さっきから見ていると、女性を人質にするとは、最低だな。」

音也はそう言うと、スワローテイルファンガイアを睨みつける。

「この俺が判決を下そう。」

音也はスワローテイルファンガイアに指を指す。

「死だ、行くぞ？世」

音也はそう言うと、さっきの黒いキバット（キバットバット？世）が飛んでくる。

『絶滅タイムだ、ガブリ！！』

「変身」

音也は仮面ライダーダークキバ（ダークキバ）に変身する。

「アレは！？」

「キバなのか？」

「でも色が違うー！！」

ダークキバの登場に驚く雄司達。

「一人で何が出来るんだー！！」

スワローテイルファンガイアはダークキバに言い放つとショッカー戦闘員と共にダークキバに襲いかかる。

「誰が一人だけかな。」

「FINAL - ATTACK - RIDE..... DE、DE、DEC
ADE」

「デイベインバスター！」

「はあっ！ー！！」

数十体のショッカー戦闘員にデイベインバスターとデイメンションブラストが放たれ、数十体のショッカー戦闘員は爆死する。

「無事みたいだな。」

「みんなー！！」

翔夜が変身したディケイドSとバリアジャケットを纏ったのはが雄司達の所に駆けつける。

「なのは！」

「翔夜、遅いぜ！！」

フェイトと雄司はディケイドS達の登場に喜ぶ。

「どうやら、名護はディケイドの継承者に負けたみたいだな。」

ダークキバはディケイドSを見る。

「アンタは？」

ディケイドSはダークキバに尋ねる。

「紅 音也、今は仮面ライダーダークキバだけだな。」

ダークキバはディケイドSに簡単な自己紹介をする。

「おのれええ、戦闘員！！」

「「「イー！！」」」

スワローテイルファンガイアはショッカー戦闘員と共にディケイドS達に襲いかかる。

「アクセルシューター！」

なのははショッカー戦闘員達にアクセルシューターを放ち、ショッカー戦闘員達は怯む。

「ATTACK-RIDE-SLASH」

「ハッ!!」

ディケイドSが怯んだショックで戦闘員達にディケイドスラッシュで切り倒す。

「お前の相手は俺だ。」

「嘗めるなああ!!」

スワローテイルファンガイアは剣でダークキバに切りかかるが、ダークキバはスワローテイルファンガイアの攻撃を避け、そのまま力ウンターでパンチやキックを食らわしていく。

「決めるか。」

『ウェイクアップ・2』

「はあああッ!!」

ダークキバの必殺技”キングスバーストエンド”が決まる。

「ファンガイア………は、最高の………種族だああ!!!!」

スワローテイルファンガイアはそう叫ぶと爆死する。

「さーて、継承者達よ大変な事になっているみたいだな。」

ダークキバは変身を解き翔夜達に言い放つ。

「………どういう事だ(なの)?」

変身を解いた翔夜となのは達は音也の言葉に疑問を感じていた。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.

第29話 アンコール・天才のメロディー（後書き）

次回、『終止符・親と子の想い』

感想と質問を待っています。

第30話 終止符・親と子の想い（前書き）

健太郎「これまでの仮面ライダー & リリカルなのはは」

モモタロス

M 健太郎「紅牙はキングと共にキャッスルドランに向かった、しかも亀公に出番を取られた、orz」

ウラタロス

U 健太郎「ビショップ事スワローテイルファンガイアがショッカー戦闘員と共にはやてちゃん達を人質にして襲いかかるうとする、本当に酷い奴だね。」

キンタロス

K 健太郎「しかし、紅音也という偉そうな奴がはやてちゃん達を助けると、黒いキバに変身したのには、驚いたで。」

リュウタロス

R 健太郎「そして、翔夜と言うかデイクイドSがなのはちゃん達と一緒にスワローテイルファンガイアを倒したんだよね。」

はやて「所で何で此処あらずじに居るん？」

イマジンズ「出番が無いから。」

シグナム「主、はやて」

シャマル「私達も出番が」

ヴィータ「欲しい!!」

ザフィーラ「うむ」

リン？「リンは今回は出番があるよ。」

それでは仮面ライダー & a m p ・リリカルなのは、始まります。

第30話 終止符・親と子の想い

「とりあえず、改めて紹介しよう俺は紅 音也、将来は歴史の本に載るほどの人間だ、覚えといて損は無いぞ。」

音也は翔夜達に自己紹介するが。

（何か翔夜以上の俺様キャラみたいだけど）
（でも、あの人が変身したライダーは強かったですよ）
（それに、あのライダーはキバに似てたし）

雄司、健太郎、和樹の三人は小声で音也に聞こえないように喋っていた。

『音也、紅 音也じゃないのか!?!』

キバットは音也を見て驚いていた。

「キバット君、音也さんを知っているの?」

すずかはキバットに尋ねる。

『この人は紅 音也、紅牙のバイオリンの先生なんだ。』

キバットは音也の事を翔夜達に話す。

「それでバイオリンの先生が、紅牙の事を話に来たのか?」

翔夜は音也に尋ねる。

「一応な、紅牙と紅牙の父親であるキングの話だ。」

音也はそう言うのと紅牙とキングの話始める。

「紅牙の父親はファンガイアのキングだが、母親は人間で、紅牙が生まれた頃の二人はファンガイアと人間の共存を夢に努力をしていた、だが紅牙が5歳の頃だ、キングは突然母親のライフエナジーを吸収し、母親は死んでしまった、それから5年後、それを知った紅牙はキャッスルドランと共にキングの前から姿を消したんだ。」

音也はそう言うのと、持っていたバイオリンケースからバイオリンを取り出す。

「そうだったんだ。」

「紅牙にそんな過去が会ったんだ。」

フェイトと和樹は音也の話を聞いて少し悲しくなっていた。

「何で、紅牙君のお父さんは愛していた人を殺したの？」

「なのはちゃん」

なのははいつの間にか目に涙を見せていて、はやてはなのはの心配をしていた。

「俺は解らないな、紅牙の思いとキングの思いが。」

「オイ翔夜、何言っているんだ!？」

翔夜の言葉に雄司は翔夜を睨む。

「俺は父親が死んでいるからな。」

翔夜は少し悲しそうな目で全員に言い放つ。

「それより、継承者諸君に俺の一千万円の価値がある演奏をしよう。」

音也は翔夜達にバイオリンの演奏をする。翔夜達の周りに美しいバイオリンの音色が響く。
数分後

「何だろう、今の曲を聞いて。」

「悲しい気持ちも」

「辛い気持ちが晴れていく。」

音也の演奏が終わると翔夜達の気持ちが晴れる。

「音也さん、今の演奏は？」

「ずかば音也に尋ねる。」

「人の心は音楽を奏でている、その心が悲しいなら悲しい音楽になり、辛い心なら辛い音楽になるのさ。」

音也はそう言うと言っていたバイオリンをバイオリンケースにしまふ。

「俺は息子にそれを伝えられたからな。」

音也は翔夜にそう言い放つ。

「大体、解った。」

翔夜はそう言つたその場から離れようとする。

「翔夜君!？」

「何処に行くんだよ!？」

翔夜を呼び止めるのはと雄司。

「決まっているだろう、紅牙を取り戻しに行くんだよ。」

翔夜はそう言つたキャッスルドランに向かっていく。

「私達も!」

「そうやな!」

「和樹君、健太郎君、行こう!」

「ハイ!!」

「アリサちゃんとすずかちゃんは写真館で待ってて。」

「解ったよ、雄司!」

「紅牙君を助けて!」

すずかとアリサ以外は翔夜同様にキャッスルドランに向かった。

「私達も行こうか?」

「そうだね、アリサちゃん。」

すずかとアリサも写真館に向かった。

グランドには音也が一人残っていた。

「行っただ、渡」

音也はそう言っていると銀色のオーロラが出現し中から音也の息子、紅渡が現れる。

「気づいていたんですね、父さん。」

「それでも、お前の父親だからな。」

音也は苦笑いしながら渡を見る。

「ありがとうございます、僕の代わりに継承者達にキバの力を教えてくれて。」

渡は音也にお礼を言う。

「戦えない息子の為だ、気にするな渡。」

音也はそう言っていると出現した銀色のオーロラに入っていく。

「それから、紅牙君の事もあります。」

「アイツは鍛えがいがあつたよ。」

音也はそう言っていると笑う。

「そうですか。」

渡も笑っているとキバの面影と重なる。

キャッスルドラン 王の間

「紅牙」

「父さん、やはり人間を全て殺すつもりですね？」

その頃、キャッスルドランの王の間ではキングと紅牙は睨み合っていた。

「当然だ、それでもお前は人間とファンガイアが手を取り合っていると言っのか！？」

キングは紅牙に尋ねる。

「ハイ、僕はこの半年間で色々な人間に会いました、その人達は半分ファンガイアである僕に優しく、時には厳しく接してくれました。」

紅牙は色々な人達を思い出しながらキングに話す。

「だから僕は人間とファンガイアはいつか手を取り合っていけると信じています。」

紅牙は決意の目でキングを見る。

「そうか、なら私はキングとしてお前を殺す。」

キングはそう言うのとビートルファンガイアの姿に変わり大剣を構える。

「父さん、僕は負けません!!」

紅牙はザンバットソードを取り出しその刃をキングに向ける。

「これで、親子の戦いも決着が着くね。」

二人に気づかないようにキバーラは戦いを見ていた。

その頃、翔夜達は

「まさか此処に来て、まだファンガイアやショッカーが居るのかよ!!」

キャッスルドランを前に翔夜達の前には数体のファンガイアとショッカー戦闘員が立ちはだかる。

「真導君達はキャッスルドランの中に行って下さい、アंक!!」

「コンボは絶対にするなよ!!」

和樹はそう言うと言クから投げられたメダルを受け取る。

「此処は任せときなのはちゃん、リイン行くで!」

『はいはい、はやてちゃん。』

はやてはそう言うと言リイン?が飛んでくる。

『健太郎、僕が行くけど良いよね?』

「ちょ、ちよっと、リュウタロス!?!」

リュウタロスは健太郎に憑依する。

「答えは聞いてない。」

リュウタロス

R 健太郎はデンオウベルトとライダーパスを取り出す。

「雄司君、紅牙君を助けてあげて!」

フェイトは待機中のバルディッシュを取り出す。

「「変身!!」」

「「セットアップ!」」

[G U N F O R M]

「タカ・トラ・バッタ、タ・ト・バ、タ・ト・バ、タトバ!!」

「[set up]」

健太郎は電王 ガンフォーム（電王G）に、和樹はオーズ タトバ コンボに変身し、はやてとフェイトはバリアジャケットを纏い、それぞれのデバイスを構える。

「解った、此処は頼んだぞ！」

「みんなも無理をしないで！」

「紅牙は任せとけ！！」

翔夜、なのは、雄司はキャッスルドランの内部に入っていく。

「イー！！」

一体のショッカー戦闘員が翔夜達の邪魔をしようとするが数発の銃弾がショッカー戦闘員に命中する。

「お前達の相手は僕達だけ良いよね？」

電王Gは怪人達に言い放つ。

「答えは聞いてない！！」

電王Gの台詞と同時にオーズ達は怪人達とぶつかり合う。

To be continued .

第30話 終止符・親と子の想い（後書き）

次回、仮面ライダー&リリカルなのは

雄司

「迷ってしまった!!」

キバーラ

「アナタに力を貸すわ。」

なのは

「変身!」

キング

「トドメだ、紅牙!!」

翔夜

「それでも、紅牙はどんな事があっても信じている筈だ人間とファ
ンガイアが手を取り合っていける事を。」

「FINAL・FORM・RIDE……KI、KI、KIVA」

次回、『フィナーレ・王子の友情とキングの真実』

???

「面白い事になっているね、翔夜。」

感想と質問を待っています。

第31話 フィナーレ・王子の友情とキングの真実（前書き）

キバ編のラストです。

それでは仮面ライダー & a m p ・リリカルなのは、始まります。

第31話 フィナーレ・王子の友情とキングの真実

「行くよー!」

電王Gはデンガッシャーをガンモードにしてステップを踏みながらファンガイアやショッカー戦闘員を撃ち抜いていく。

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け。石化の槍、ミストルティン!」

はやては石化砲撃魔法のミストルティンをショッカー戦闘員やファンガイアに放ち、ショッカー戦闘員やファンガイアは石になる。

「はやてちゃん、凄い〜!」

はやてに驚く電王G。

「トリプルスキヤニングチャージ」

「せいやあああああっ!」

オーズはオーズバッシュでショッカー戦闘員やファンガイアを切り裂く。

「プラズマスマッシャー!」

フェイトはプラズマスマッシャーでショッカー戦闘員やファンガイアを撃ち抜く。

キャッスルドラン 内部

「翔夜君、雄司君は？」

「えっ！？」

キャッスルドランの内部に入ったのはと翔夜、しかし雄司が居ない事に気づく二人。

「アイツ、また迷子かよ！」

『二人共、王の間はこっちだ！』

翔夜は呆れながらもキバットの指示に従いなのはと共に先に進む。

その頃、雄司は

「迷ってしまった！！」

雄司は翔夜達とは別の場所で迷っていた。

「アレは！？」

雄司は近くで二人の人影を見つける。

「ハッ！！」

「フン!!」

紅牙のザンバットソードとビートルファンガイアの大剣がぶつかり合っていた。

「紅牙!!」

「雄司君、どうして此处に!?!」

紅牙は雄司に気づき驚く。

「隙有りだ!!」

ビートルファンガイアは紅牙に向けて衝撃波を放つ。

「うわあっ!!」

ビートルファンガイアの衝撃波を食らい紅牙は床に叩きつけられる。

「紅牙!!」

紅牙の所に駆け寄る雄司。

「人間、私はキングとして息子を殺すんだ!!」

キングは大剣を構えながら雄司に言い放つ。

「そんな事はさせない、……変身!!」

雄司はクウガMに変身しビートルファンガイアを殴りかかる。

キャッスルドラン 王の間

「此処には居ないみたいだね。」

「ああ」

周りを見渡すなのはと翔夜は机に置いていた写真を見ていた。

『早く紅牙を探そうぜ!』

『紅牙ならキングと戦っているよ。』

キバットの妹のキバーラが現れる。

『キバーラ、今まで何してたんだ!?!』

キバットはキバーラを心配した表情で尋ねる。

『キングの動向を見ていただけよ、それより早く紅牙を助けた方が
良いよ。』

「どういう事だ?」

キバーラの言葉に翔夜が尋ねる。

『どうやらキングは本気で紅牙を殺すみたい。』

キバーラはそう言うとなのはの周りを飛び回る。

「とにかく行くか、なのは、キバット!」

翔夜はキバーラの話の聞くと王の間から出ようとするが。

「そうはさせないぜ!」

イヤーウィッグファンガイア（イヤーウィッグ）が現れ翔夜達の邪魔をする。

「まだ、居たのかよ!?!」

翔夜はディケイドライバーを構えようとするが。

「翔夜君、此处は私に任せて。」

『面白そうね、アタシもやるわ。』

なのはとキバーラはそう言っていると翔夜の前に立つ。

「『えっ?』」

キバーラの言葉に驚く翔夜、なのは、キバット。

「アナタに力を貸すわ。」

「わ、私に!?!」

キバーラはそう言つとなのはの指を噛む。

『かっぷっ!』

「変身！」

なのはは仮面ライダーキバーラ（Rキバーラ）に変身する。

「コレは一体？」

Rキバーラは自らの姿に驚く。

『驚いている場合じゃ無いよ。』

キバーラはそう言うと、イヤーウィッグは両腕のシザーアームでRキバーラに襲いかかるうとするが。

「ハッ！」

Rキバーラはキバーラサーベルを取り出しイヤーウィッグの攻撃を受け止める。

「翔夜君、早く行って!!」

「解った、行くぞキバット!!」

『キバーラ、此処は頼んだぞ!!』

イヤーウィッグをRキバーラに任せ、翔夜とキバットは紅牙の所に向かった。

その頃、雄司と紅牙は

「どうしたんだ人間、その程度か？」

ビートルファンガイアの猛攻にクウガMはボロボロになり倒れかけていた。

「このまま、殺したい所だが」

ビートルファンガイアはクウガMの後ろで立ち上がろうとしていた紅牙を見る。

「トドメだ、紅牙!!」

キングは紅牙に向けて雷撃を放つが。

「させるか!!」

クウガMは紅牙の盾になりビートルファンガイアの攻撃を受ける。

「ぐあああつ!!」

「雄司君!!!!」

クウガMは変身が解け、紅牙はすぐに雄司の所に駆け寄る。

「雄司君、どうして君達は僕をそこまでして助けるの!？」

紅牙は涙目になりながら雄司に尋ねる。

「紅牙……友達を助けるのに……理由なんて……無いんだよ、助けたいから……助ける、それで……良いんだよ。」

雄司はそう言うと紅牙にサムズアップする。

「雄司君……………うん!!」

雄司の言葉に紅牙は納得すると雄司にサムズアップする。

「何故だ、所詮は人間とファンガイアに友情なんて無いはず!!」

キングは雄司と紅牙の友情を見てそれを否定する。

「違うな、お前は人間を餌としてしか見ていないんだ!!」

雄司達の所に翔夜が駆けつける。

「翔夜君!!」

翔夜に驚く紅牙。

「遅いん…だよ、後は……………任せた…からな……………」

雄司は翔夜に言い放つと意識を失う。

「後は任せろ、雄司」

翔夜は雄司に言い放つと、ビートルファンガイアを見る。

「どんなに人間を信じていても、ファンガイアは自らの本能で人間

を殺す、何故それが解らないんだ!!」

ビートルファンガイアは少し悲しい声で翔夜達に言い放つ。

「それでも、紅牙はどんな事があっても信じている筈だ人間とファンガイアが手を取り合っていていける事を。」

翔夜はそう言っていると紅牙を見る。

「僕は絶対やってみせます、何時か人間とファンガイアが手を取り合っていていける世界を!!」

紅牙は決意を新たにビートルファンガイアを見る。

「貴様、一体何者なんだ!？」

ビートルファンガイアは怒りながら翔夜に尋ねる。

「通りすがりの仮面ライダーだ!」

翔夜はディケイドライバーを腰に装着する。

「その心に刻んでおけ!!」

翔夜はディケイド・ストライクのカードをビートルファンガイアに見せつける。

「キバット!!」

『よっしゃ、キバって派手にいくぜ! ガブリ!!』

紅牙はキバツと呼ぶ。

「変身!!」

「KAMEN - RIDE..... DECADE STRIKE」

翔夜はディケイドS、紅牙はキバKに変身する。

「おのれえええ、纏めて始末する!!」

ビートルファンガイアは大剣を構えディケイドS達に襲いかかる。

「ハッ!」

「ぐおっ!!」

イヤーウィッグと戦っていたRキバーラはキバーラサーベルでイヤーウィッグを切り裂く。

『決めるよ、なのはちゃん!』

「はい!」

Rキバーラは背中に光の翼を生やし、キバーラサーベルを構える。

「ソニックスタップ、ハッ!!」

「ぎゃあああ!!」

Rキバーラの必殺技”ソニックスタブ”が決まりイヤーウィッグは爆死する。

キャッスルドラン 屋上

「ハッ!」

キバKはザンバットソードでビートルファンガイアに切りかろうとするが。

「フン!」

ビートルファンガイアは大剣でキバKの攻撃を受け止めるとそのままキバKを圧していく。

「ATTACK - RIDE..... SLASH」

「はああっ!」

「ぐおっ!」

デイクイドSはデイクイドスラッシュでビートルファンガイアを切り裂く。

「はあああっ!」

「ぐおおっ!」

キバKはビートルファンガイアがディケイドSの攻撃で怯んだ隙にザンバットソードでビートルファンガイアを縦に切り裂く。

「くっ、こうなったら!!」

ビートルファンガイアは立ち上がると空に向かって飛び上がる。

「何をするつもりだ!?!」

ディケイドSはビートルファンガイアを見て疑問に感じていると。

「倒されたファンガイアのライフエナジーよ我に力を!!」

ビートルファンガイアはそう言うとな数のライフエナジーがビートルファンガイアに集まり、ビートルファンガイアはそれを紫色のエネルギー弾に纏める。

「このままじゃ!!」

「マズいな!!」

キバKとディケイドSはビートルファンガイアのエネルギー弾に焦っている、ディケイドSのライドブッカーから二枚のカードが飛び出るとそれをディケイドSはキャッチし、一枚のカードをディケイドライバーに装填する。

「FINAL・FORM・RIDE……KI、KI、KIVA」

「ちょっと、痛いぞ!!」

「えっ、真導君一体何を!？」

ディケイドSはキバKの背中に触れるとキバKは変形しキバアローに変わる。

「ハッ!！」

ビートルファンガイアは紫色のエネルギー弾をディケイドS達に放つ。

「FINAL - ATTACK - RIDE..... K I、K I、K I V
A」

「はあああ!！」

『キバって、いくぜ!！」』

キバアローからディケイドファングが放たれ、紫色のエネルギー弾を弾くとそのままビートルファンガイアに貫く。

「これで.....良い」

ビートルファンガイアはそう言うと爆発する。

「終わったな。」

「はい!！」

ディケイドSはビートルファンガイアを見ると変身を解き、キバアローもキバKの姿に戻りそのまま変身を解く。

「翔夜君!！」

「紅牙!!」

なのはと雄司が翔夜達の所に駆けつける。

「どうやら、外の方も終わったみたいだな。」

翔夜は外を見て安心してしていると何かを見つける。

「紅牙、写真館に行こうぜ!」

「すずかちゃんやアリサちゃんが待っているから。」

「はい!」

雄司、なのは、紅牙は写真館に向かおうとする。

「翔夜、帰らないのか?」

翔夜を見た雄司が尋ねる。

「先に行け、俺はまだやることが有るみたいだ。」

翔夜はそう言つと王の間に置いていた写真を見る。

「解つた、早く来いよ!!」

雄司は翔夜にサムズアップするとその場から去っていく。

「面白い事になっているね、翔夜。」

キャッスルドランの近くにあるビルでは翔夜達に気づかれないように一人の少年が翔夜を見ていた。

「今度は僕も参戦するからね。」

少年は翔夜に指鉄砲を向けると、その場から立ち去っていった。

キャッスルドラン 王の間

「……………息子よ、後は頼んだぞ」

王の間ではキングがビートルファンガイアから人間の姿に戻り椅子に座っていた。

「なる程な、アンタは紅牙の意思を知りたかった訳だな。」

翔夜が王の間に現れる。

「君は……………何故解ったんだ？」

キングは翔夜に尋ねる。

翔夜は黙ってキングが持っていた小さい頃の紅牙とキング、そして紅牙の母親が仲良く写った写真を取り出す。

「こんな写真を持っている親が息子を本気で殺すつもりだとは思わなかったからな。」

翔夜はそう言うと言をキングに渡す。

「ある時、私はファンガイアの本能を抑えきれなくなり、人間である妻を殺してしまった。」

キングは翔夜に真実を語り始める。

「その時、私は人間とファンガイアが共存できない事に絶望し、息子である紅牙にそれを話そうとしたが」

「紅牙はそれを拒み、アンタは部下のファンガイアと一緒に出て行った訳か？」

翔夜はキングに尋ねる。

「そのとおりだよ、私はショッカー帝国と手を結び、紅牙に夢を諦めさせようとした、だがあの子の意思はあの頃の私とは違うみたいだな。」

「ああ、アイツには俺達、仲間が居るからな。」

翔夜はそう言うと言をキングを見る。

「もし紅牙のファンガイアとしての本能が抑えきれなくなったら伝えてくれ、お前はけして一人じゃない、支えてくれる仲間が居ると

.....」

キングはそう言うと言を静かに息を引き取る。

「ああ、必ず伝えよう。」

翔夜はそう言つと王の間から出て行つた。

真導写真館

真導写真館から美しいバイオリンの音色が聞こえていた。

「凄いですね。」

「まさに、10年に1年の天才だね。」

真導写真館にはバイオリンを弾く紅牙と、それを見るナツミ、栄市郎、翔夜、なのは、雄司、アリサ、すずかが居た。

演奏が終わると紅牙はお辞儀をする。

「皆さん、今日は本当にありがとうございます。」

「良かったぜ、紅牙!!」

「良い演奏だったよ。」

紅牙に拍手をする雄司とアリサ。

「ここで、私事ですが一つ宜しいでしょうか?」

「おめでとうございます。」

「めでたいね。」

二人を祝福する雄司、アリサ、ナツミ、栄市郎。

『良かったな紅牙、俺は涙でいっぱいだよ!!』

『良かったね、二人共。』

キバットは泣きながらキバーラと共に二人を祝福する。

「これで、めでたしか。」

写真にはバイオリンを弾く紅牙とキバクその後ろにはそれを見守る父親であるキングが写った写真を見ながら翔夜は二人を祝福していた。

「あの二人、嬉しそうね。」

なのはは翔夜の隣に座ると顔を近づける。

「ああ、そうだな／＼／＼／＼（何で俺はなのはにドキドキするんだ？）」

翔夜はなのはを見て顔を赤くしていた。

T o b e c o n t i n u e d .

第31話 フィナーレ・王子の友情とキングの真実（後書き）

次回は特別編！！

翔夜「一体何をするつもりなんだ、作者？」

お楽しみに

翔夜「オイ！！」

感想と質問を待っています。

特別編 継承者と魔法少女の日常（前書き）

今回はギャグ短編集です。

何時もと書き方が違います、後キャラ崩壊がかなりあります。

特別編 継承者と魔法少女の日常

・テスト（雄司の場合）

数学のテストの時間

雄司（テストが解らねー！） 数学の公式を考え中
アリサ（馬鹿ね、ちゃんと勉強をしないからよ！） 順調に答えを埋めていく

雄司（こうなったら、変身！） クウガに変身する
アリサ（馬鹿、何やっているの！？）
クウガM（先生も居ないし、他のみんなはテストに集中しているから大丈夫さ。） 拳銃の玩具を取り出す

アリサ（ちよっと、何をやっているの！！） クウガM（超変身！！）
ペガサスフォームにフォームチェンジする
クウガP（ペガサスフォームの研ぎ澄まされた山勘でテストをやるのさ！） 問題を解いていく

テストの結果

雄司「50秒しか持たなかった、orz」 赤点
アリサ「やっぱり馬鹿だ。」 平均点より上

・テスト（健太郎&イメージズ）

国語のテストの時間

健太郎「うゝん、こうかな？」 問題を解いていく

モモタロス『健太郎、何やっているんだ？』 健太郎の意識に語りかける

健太郎（モモタロス、国語のテストだよ。）モモタロス『面白そうだな、俺もやるぜ！』 健太郎に憑依する

健太郎（ちよつと、モモタロス！？）モモタロスに憑依される

M健太郎「いくぜ、いくぜ！」 健太郎のテストをやるうとする

ウラタロス『先輩には無理だね。』モモタロスを挑発する

M健太郎「何だと、このテストで勝負するぞ亀公！！」

ウラタロス『負けるのは先輩だけだね。』キンタロス『なんや、面白そうやないか。』 乱入

リュウタロス『僕もやるけど良いよね、答は聞いてない。』 上に同じく

健太郎（ちよつと、みんな！？）

テストの結果

健太郎「良かった」 赤点ギリギリ

コハナ「全くアンタ達は」 メリケンサックを装備

イマジンズ「」「スイマセン」「」 コハナに殴られる

・音楽室の怪談

アリサ「すずか、聞いた？」

すずか「何を？」

アリサ「最近、夜の音楽室に変な声が聞こえるのよ。」

すずか（それって）

すずかの回想

紅牙「キバット、お前は！！」　ザンバットソードを装備
キバット「ごめんなさい、紅牙！！」　鎖で縛られる

回想終了

すずか（言わない方が良いね。）
アリサ「ん？」

・図書室の怪談

はやて「健太郎君、聞いた？」

健太郎「何を？」

はやて「最近、図書室の本が次の日に何冊か消えるんやけど。」

健太郎「ああ、実はね。」

健太郎の説明

コハナ「全くアンタ達は！！」　日本刀を装備
イマジンズ「」「」「スイマセン」「」「切り傷だらけ

モモタロスがSFをウラタロスが恋愛関係、キンタロスが時代劇
関係、リュウタロスが子供向けの本を健太郎の体を使って盗んでい
た。

説明終了

健太郎「と言う訳なんだ。」
はやて（健太郎君って、つくづく不幸やな。）

・グリードの食事当番事情

メズールの場合

メズール「みんな、召し上がれ。」 美味しそうな料理を出す。
ガメル「メズールの料理、美味しい。」

カザリの場合

カザリ「出来たよ。」 冷たい物ばかり出す
和樹「猫科のグリードだしね。」

ガメルの場合

ガメル「みんな、出来た。」 飴やチョコレート等のお菓子を出す
フェイト「しょうがないよ、コレは。」

ウヴァの場合

ウヴァ「食べる。」 蜂蜜を出す
アंक「お前が一番酷いぞ!!」

・恋心（翔夜の場合）

翔夜「何で最近、なのはを見ると胸がドキドキするんだ。」

雄司（翔夜の奴、なのはちゃんの事で悩んでいるのか？）　遠くから見ていた

翔夜「どうなって、いるんだ俺!？」

雄司（鈍感だな、翔夜も。）

翔夜「……………」
考え込む

雄司（見ていて面白いな。）

数十分後

翔夜「医者に相談するか？」

病院に行こうとする

雄司「鈍感すぎるだろう!」

- ・恋心（和樹の場合）

アंक「オイ、和樹」

和樹「どうしたんだ、アंक？」

アंक「お前、フェイトの事が好きだろう?」

和樹「な、な、何を、や、や、藪からぼ、棒に!？」

アंक「滅茶苦茶、動揺している時点でバレバレだろう。」
実は

和樹の欲望を見ていて気づいた

和樹「そりゃあ、初めて会った時から好きだったけど／＼／＼／＼／」

顔をかなり真つ赤にする

「アンクなら、告るんだな。」

アイスを食べ始める

フェイト「和樹君、アंक、何やっているの？」
通りすがり

和樹「フェ、フェイトさん、実はその……！」

アンク（せいぜい、頑張れよ。）

和樹「実は前から……………」

フェイト「前からどうしたの？」

和樹「アंकがアイス食べ過ぎだと思っていましたんです。」

フェイト「確かにそうだね。」

アंक「オイ、何言っているんだ、和樹！！」 3本目のアイスを食べていた

フェイト「アंकは暫くの間、アイス禁止！」 アंकのアイスを取り上げる

アंक「和樹！！」

和樹（ゴメン、アंक！！） フェイトの後ろで謝っていた

・ライジング会得秘話

雄司「そう言えば、ユウスケさんはどうやってライジングフォームを会得したんですか？」

ユウスケ「五代さんに教えて貰ったんだ。」

雄司「俺も会得出来ますか？」

ユウスケ「止めといた方が良いよ。」

ユウスケ回想

ユウスケ「ぎゃあああああ！！！！」 発電所でビリビリ状態

五代「小野寺君、頑張って耐えれば金のクウガになれますよ！」

サムズアップ

ユウスケ「普通に無理でしょう！！！！」 それでも耐えていく

回想終了

ユウスケ「ぐらいな事をやるから。」
雄司「ウソダンドドコードン！」

・キャッスルドランの部屋事情

すずか「原作のキバではガルル・バツシャー・ドツカの三人がキャッスルドランに居るけど。」
雄司「こっちのキャッスルドランには居ないみたいが、どうやってフォームチェンジするんだ？」
キバット「俺様が答えよ、専用の部屋に普段ガルル達は彫刻の姿で待機しているのだ。」
すずか「そうなんだ。」
雄司「キャッスルドランって結構広いけど、他にはどんな部屋があるんだ？」
キャッスルドランで迷った人
紅牙「他には僕とキバットが良く居る王の間とか自分の部屋、書斎とかトレーニングルームもあるよ。」
キバット「そして、キャッスルドランを維持するためにライフエナジの貯蔵庫や愛しの我が妹、キバーラの部屋もあるんだぜ。」
すずか「キバット君の部屋は？」
キバット「無いんだ……」
涙ポロポロ
紅牙「あつたんだけど、キバーラに盗られたんだよ。」
すずか・雄司「ドンマイ！」

・笑いのツボ

なのは「ハッ！」 親指を構える

ナツミ「違いますなのはさん、こうです。」 上に同じく

翔夜「何やっているんだ？」 通りすがり

雄司「なのはちゃん、笑いのツボを会得するみたい。」 上に同じく

翔夜「マジかよ!？」 驚愕の表情

数日後、なのはは笑いのツボをマスターした。

特別編 継承者と魔法少女の日常（後書き）

次回、仮面ライダー & a m p ; リリカルなのは

恭也

「尋常に勝負!!」

士郎

「娘は渡さん!!」

なのは

「翔夜君、頑張つて。」

翔夜

「何でこうなるんだ!?!」

次回、翔夜の初デート「前編」

次回は前後編です。

感想や質問を待っています。

第32話 翔夜の初デート「前編」(前書き)

今回は前後編の前編

それでは仮面ライダー&リリカルなのは、始まります。

第32話 翔夜の初デート「前編」

キャッスルドランでの戦いから一週間後

海鳴市 とある道場

「何で、こうなるんだ？」

とある道場では胴着に袴姿で竹刀を持った翔夜と

「何処からでも、来い！！」

翔夜と同じ格好に竹刀を構えた恭也が居た。

「翔夜君、頑張つて。」

「恭也、頑張れよ！」

「あなた、そろそろ諦めたら。」

「良いじゃないのお母さん、面白そうだし。」

なのは、士郎、桃子、美由希のメンバーは翔夜と恭也の試合を見ていた。

何故こうなったかは昨日の夜にさかのぼる……………

真導写真館

「水族館のチケット？」

「商店街の福引きで当てただけで、明日は友達と勉強会があるの。」

ナツミは翔夜に水族館のチケットを渡そうとしていた。

「なのはさんと行ってきて下さい。」

「何で、なのはなんだよ!？」

翔夜は渋々ナツミから水族館のチケットを受け取り、翌日、翔夜はなのはが居る翠屋に向かった。

翠屋

「と言う訳なんだ。」

「良いけど(これってもしかして翔夜君とデート。)／／／／／」

なのはは翔夜から水族館のチケットを受け取るうとするが。

「ちょっと、待った!！」

「娘は渡さん!！」

突然、翔夜達の前に恭也と士郎が現れる。

「誰だ!？」

「私のお兄ちゃんとお父さん。」

驚く翔夜になのはは二人の自己紹介をする。

「俺達は二人の交際を認めん!」

「認めて欲しければ、恭也と剣道の試合で勝って貰おうか!」

恭也と士郎は翔夜に言い放つ。

「まず、付き合っても無いけど。」

「お兄ちゃん、お父さんもノノノノノ」

恭也と士郎の言葉に翔夜はツツコミ、なのはは顔を真っ赤にしていた。

「尋常に勝負!」

「何でこうなるんだ!？」

そして、冒頭に至る。

「どうした、何故かかって来ないんだ!？」

恭也は竹刀を構えない翔夜にイライラしながら尋ねる。

(正直言って、どうしたら良いんだ?)

翔夜はこの状況に解らないでいた。

「そつちが来ないなら、行くぞ!!」

恭也はそう言うのと素早く翔夜の間合いに入り竹刀で翔夜を叩こうとする。

「おつと!!」

恭也の攻撃に気づいた翔夜は瞬時に恭也の攻撃を竹刀で受け止めるが。

「はあああつ!!」

「くつ!!」

恭也の猛攻に翔夜は押されていた。

「ハッ!!」

「ぐつ!!」

恭也の竹刀は翔夜の右肩に当たり翔夜は右肩を抑えながら恭也から離れる。

「どうした、そんな腕じゃなのはは渡さんぞ!!」

恭也は竹刀を構え翔夜に迫る。

「翔夜君!!」

なのは翔夜を見て叫ぶ。

（このまま負けるのも嫌だな。）

翔夜はなのはを見て竹刀を構える。

「やる気になったか？」

恭也は翔夜に尋ねる。

「本気で行くぜ!!」

翔夜は素早く恭也の間合いに入り竹刀で叩こうとする。

「くっ!!」

恭也は翔夜の攻撃を竹刀で受け止める。

「はあああっ!!」

恭也は再び翔夜に猛攻を食らわせようとするが、翔夜は恭也の攻撃を受け流し。

「はあっ!!」

「ぐはっ!!」

翔夜の竹刀から放たれた強烈な一撃が恭也の胴に入り恭也はそのまま倒れ込む。

「恭也が負けた!？」

恭也が倒れたのを見て驚く士郎。

「翔夜君!」

「なのは／＼／＼／／」

翔夜に抱きつくなのは、翔夜は顔を真っ赤にしていた。

「あらら」

「仲が良いことで。」

桃子と美由希はなのは達を見て微笑んでいた。

「水族館に行くか？」

「うん、ちよつと待ててね。」

なのはは準備をするために自宅に戻った。

「まさか、この俺が負けるなんて。」

「なかなかの強さだったな。」

胸を抑えていた恭也と士郎は翔夜に言い放つ。

（一応、仮面ライダーだからな。）

翔夜は二人に聞こえないように呟く。

「ところで、どうして翔夜君はなのはの事が好きなの？」

美由希は翔夜に尋ねる。

「正直言つて、俺はなのはが好きかどうか解らないんだ。」

「何！？」「」

翔夜の言葉に士郎と恭也は翔夜を睨む。

「どういつ事なの？」「」

桃子は翔夜に尋ねる。

「ただ、……なのはと会っている内に胸がドキドキになることが増えたんだ。」

翔夜は少し照れながら自分の気持ちを桃子達に話す。

（（（（それって、好きって事じゃないのか！？））））

翔夜の言葉に心の中でツッコむ桃子達。

「とりあえず、この後なのはと一緒に水族館に行くなら帰りに気持ちを伝えたら。」

美由希は翔夜にアドバイスをする。

「解つた。」

翔夜はそう言うと美由希達に一礼して道場を後にする。

「どうなるかな、なのはと翔夜君？」

「上手くいくと思うよ。」

「私はあの二人の交際を認めたからな。」

「それにしても、あの少年の強さは一体？」

桃子、美由希、士郎、恭也は翔夜となのはの事を話していた。

T o b e c o n t i n u e d .

第32話 翔夜の初デート「前編」(後書き)

次回、『翔夜の初デート(後編)』

感想と質問を待っています。

第33話 翔夜の初デート「後編」(前書き)

今回は前後編の後編

それでは仮面ライダー&リリカルなのは、始まります。

第33話 翔夜の初デート「後編」

海鳴市 翠屋

「俺の気持ちか」

翔夜は自分の気持ちを考えながらなのはを待っていた。

「お待たせ、翔夜君！」

翠屋から白いワンピースを着たなのはが出て来る。

「ああ、水族館に行こうか／＼／＼／＼」

翔夜はなのはを見て顔を赤くしながらなのはと共に水族館に向かった。

海鳴市 とある廃ビル

翔夜達が水族館に向かっていた頃、とある廃ビルでは少年と鳴滝が接触していた。

「君が暁 零か？」

「流石、鳴滝さん僕の事を知っているんだ。」

少年（零）はそう言っていると鳴滝に微笑む。

「我々シヨッカー帝国は君の噂は聞いているんでね。」

鳴滝はそう言い放つと零を睨みつける。

「それで僕に何の用かな？」

零は鳴滝に尋ねる。

「君にディケイドの継承者、真導 翔夜を倒して貰いたい。」

鳴滝は翔夜を倒すよう零に頼む。

「ふーん、僕が翔夜を倒すのかな？」

「君の力なら必ず倒せる筈。」

鳴滝の言葉に零は少し考え込む。

「面白そうだけど、ヤダね。」

「何だと!？」

零の答えに驚く鳴滝。

「僕も翔夜達の持つライダーのお宝に興味があるけど、倒すだけじゃつまらないしね。」

零はそう言つと鳴滝の前から立ち去ろうとする。

「そうか、なら次は君も敵として見なすからな 零！！」

鳴滝は怒りの形相で零に言い放つ。

「僕を甘く見ないで欲しいね、鳴滝さん。」

零は鳴滝に指鉄砲を向けると鳴滝の前から姿を消した。

「だが、上手くいくと思うなよ 零！！」

鳴滝はそう言つと灰色のオーロラを出現させ、オーロラの中に消えていく。

水族館

翔夜達は海鳴市の隣町にある水族館に来ていた。

「翔夜君、あそこにペンギンの集団が歩いているよ。」

「ああ（なのはって近くで見ると、やっぱり可愛いな）／＼／」

ペンギンの散歩を見ていたなのは、翔夜はそんなのはを見て照れ顔でいた。

「翔夜君、どうしたの？」

なのは翔夜を見て尋ねる。

「何でも無い、あっちにイルカの水槽があるから行こうか。」
「うん」

翔夜となのはイルカの水槽に向かった。

「あのイルカ、翔夜君に似てない？」
「そうか、それよりあのイルカ、なのはに似ていないか？」

二人はイルカの水槽の前に自分達に似たイルカを見ていると。

「あつ／＼／」
「キスしたね／＼／」

二人に似たイルカはキスをすると、それを見た翔夜となのは顔を赤くしながら他の水槽を見て回った。

「楽しかったね、翔夜君。」
「そうだな、なのは。」

なのはと翔夜は水族館の近くにある海岸で休んでいた。

「夕日が綺麗だね。」
「ああ、そうだな。」

二人は夕日を見ていると翔夜は何かを決意してなのは手を握る。

「どうしたの翔夜君！？／／／／／」

なのはは翔夜の行動に顔を真っ赤にして驚いていた。

「なのは、……………俺は君の事が好きなんだ！」
「ふえっ！？／／／／／／／／／」

翔夜の告白になのはは更に顔を真っ赤にする。

「翔夜君、一体？／／／／／／／」

なのはは翔夜に尋ねる。

「俺はなのはに何度も会っているうちに胸がドキドキする事が何度もあったんだ、そして今日気づいたんだ、俺はなのはが好きだって事に！！／／／／／／／／／」

翔夜はなのはに自らの思いを伝える。

「だから、こんな俺だが付き合ってくれないか！？／／／／／／／／／／／」
「ふええっ！？／／／／／／／／／／／」

翔夜の告白になのはは顔を真っ赤にしていた。

「……………翔夜君、良いよ」

なのはは翔夜の告白の返事をする。

「なのはちゃん、おめでとう」

何処からかキバーラが現れる。

「き、キバーラ!？」

「何時から居たんだ？」

キバーラに驚くのはと翔夜。

「二人が水族館に向かっている時から付いてきたのよ」

キバーラは翔夜達にそう言うとなのはの肩に止まる。

「なのは」

「何、翔Y…んっ／／／／／」

翔夜はなのはを振り向かせるとなのはと唇を重ねる。

「あらら／／」

キバーラは二人を見て微笑んでいた。

「しょ、翔夜君、いきなり過ぎるよ／／／／／」

なのは顔を真っ赤にしながら翔夜に言う。

「すまん、なのはが可愛かったから／＼／＼／」

翔夜は顔を真っ赤にしながらなのはに言う。

「もう、翔夜君たら／＼／＼／」

「後、翔夜で良いよ。」

二人は夕日を背に見つめ合っていた。

T o b e c o n t i n u e d .

第33話 翔夜の初デート「後編」(後書き)

次回、仮面ライダー&リリカルなのは

クウガM

「小さい子と戦っても、嬉しく無いんだけど。」

ヴィータ

「誰が小さい子だ!!!」

シグナム

「その程度か、千樹!!」

オーズ

「アंक、ガメルのコンボだ!!」

アंक

「コンボするメダルは無いぞ!!」

次回、『模擬戦』

感想と質問を待っています。

第34話 模擬戦（前書き）

これまでの仮面ライダー & amp・リリカルなのは

一つ、雄司と共にガミオを倒した翔夜はクウガの力を持つ小野寺とかつてはクウガだった五代に出会い、二人からディケイドは本当の力の事を聞く。

二つ、ファンガイアのキング、ビートルファンガイアを倒した翔夜と紅牙、そんな中謎の少年、暁 零は翔夜達の持つライダーのお宝を狙う。

三つ、翔夜はなのはに告白し晴れて付き合う事になった。

それでは始まります。

第34話 模擬戦

翔夜がなのはとデートしていた頃、

海鳴市 八神家

「始めようか、千樹！」

「冴島、手加減しないからな！！」

八神家の庭では甲冑を纏いそれぞれのデバイスを構えたシグナムとヴィータ。

「ハイ、シグナムさん！！」

「小さい子と戦っても、嬉しく無いんだけど。」

オーズとクウガMはシグナムとヴィータを見て言い放っていた。

「誰が小さい子だ！！！！」

ヴィータはクウガMの言葉に怒る。

「シグナムと和樹君、気合い十分やな。」

「雄司とヴィータちゃんは、大丈夫かな？」

はやてと健太郎はお茶を飲みながら二組の戦い見ていた。

「健太郎君は参加しないの？」

洋菓子を持ってきたシャルマルは健太郎に尋ねる。

「僕はモモタロス達が居ないと変身出来ないから、今回は見学です。」

健太郎はそう言つとシャルマルが持ってきた洋菓子を食べる。

「そう言えば、モモタロス達はどないしたん？」

はやては健太郎に尋ねる。

「モモタロス達なら、デンライナーの大掃除をしているよ。」

健太郎はそう言つと持っていたお茶飲む。

「オイ、早くアイスを寄越せ!!」

「アंकさん、アイスを食べ過ぎですよ!!」

アイスを食べようとするアंकにリン？は注意する。

「行きます!!」

「参る!!」

オーズのメダジャリバーとシグナムのレヴァンティンがぶつかる。

「そろそろ、こつT「食らえ!!」……ぐはっ!!」

クウガMはオーズとシグナムの戦いを見てすぐにヴィータを見ると、

ヴィータはグラーファイゼンでクウガMの頭を叩く。

「ハンマーフォーム！」

ヴィータはグラーファイゼンをハンマーフォームにしてクウガMの腹を叩く。

「お前は私の事を小さい子呼ばわりしやがって!!」

ヴィータは何度もクウガMの体をグラーファイゼンで叩きクウガMを圧していき。

「ギガントフォーム！」

ヴィータはクウガMから少し離れるとグラーファイゼンをギガントフォームにする。

「許せなんだよ!!」

「ぐはあああつ!!!!」

ヴィータの怒りの一撃がクウガMに決まり、クウガMはそのまま倒れる。

「結界を張っておいて良かったですね。」

「そうやな、シャル。」

「大丈夫かな、雄司？」

シャル、はやて、健太郎はそう言つと、ヴィータとクウガMの戦いからシグナムとオーズの戦いを見る。

「はっ！！」

「ぐっ！！」

最初は互角に戦っていたシグナムとオーズ、しかし徐々にシグナムが圧していった。

「その程度か、千樹！！」

「流石シグナムさんですね、でも僕は負けません！！」

オーズはそう言うとメダジャリバーを構えシグナムに突っ込むが。

「甘い！！」

シグナムはレヴァンティンの刃でオーズの攻撃を捌くと。

「シュランゲフォルム！」

シグナムのレヴァンティンはいくつもの節に分かれた蛇腹剣の形態に変わる。

「連結刃、はあっ！！」

「ぐああ！！」

シグナムの攻撃はオーズにかなりのダメージを与え、オーズは膝をつく。

（くっ、こうなったら）

オーズは何かを決意するとアंकを見る。

「アंक、ガメルのコンボだ!!」

オーズはアंकにメダルを渡すように頼むがアंकは。

「コンボするメダルは無いぞ!!」

アंकはそう言うともメダルホルダーを取り出す。

「何で、メダルが無いんだよ!?!」

「お前が勝手にコンボをやるからな、メズール達と相談してメダルを入れ替えたんだ!!」

オーズの質問にアंकは答えるとメダルホルダーから二枚のメダルを取り出す。

「とにかく、今はこれで行け!!」

アंकは二枚のメダルをオーズに投げる。

「ウヴァのメダルとこのメダルは?」

オーズはアंकから受け取ったコアメダルを見ると、コアメダルはカマキリとコンドルのコアメダルだった。

「そのメダルはかなり大事なメダルだから無くすなよ!!」

アंकはそう言うともメダルホルダーをしまい、持っていたアイス

食べ始める。

「解ったよ、アंक―!!」

オーズはそう言うときアंकから受け取ったコアメダルをオーズドライバーに装丁する。

「タカ・カマキリ・コンドル」

オーズはタトバコンボからタカキリドルコンボに変わる。

「姿が変わったか、だが、同じ事だ―!!」

シグナムは連結刃でオーズを狙うが。

「はっ―!!」

オーズはカマキリソードとコンドルレッグを使いシグナムの攻撃を捌いていく。

「なかなかやるな―!」

シグナムはそう言うときレヴァンティンを構える。

「これで決める―!」

「スキヤニングチャージ」

オーズはスキヤニングチャージをするとカマキリソードとコンドルレッグにエネルギーが溜まっていく。

「紫電一閃!!」

「せいやああ!!」

シグナムの紫電一閃とオーズのカマキリソードとコンドルレッグから赤と緑で出来たエネルギー刃がぶつかり合う。

「くっ!!」

「ぐああっ!!」

二人の必殺技は爆発してしまいシグナムは甲冑姿がオーズは変身が解けてそのまま倒れる。

「シグナム!？」

「和樹君!？」

はやてと健太郎はすぐに二人の所に駆け寄るが。

「大丈夫。」

「心配は要りません、主はやて。」

和樹とシグナムは立ち上がり無事な姿を二人に見せる。

「良かった(わ)。」

健太郎とはやては二人を見て安心する。

「みんな、お待たせ。」

シグナムとヴィータと和樹と雄司は一休みしていると、庭にフェイトがやって来る。

「フェイトさん!？」

和樹はフェイトを見て驚く。

「大変なの、なのはと翔夜君が今デートをしているの!！」

フェイトははやて達に翔夜となのはがデートしていることを話すと。

「みんな、二人のデートを見に行くで!！」

「「「オー! ! ! ! !」」」

はやての提案にアंक以外は二人のデートを見に行った。

「ちっ、くだらん」

アंकはそう言いながら本日5本目のアイスを食べていた。

現在、オーズが使えるメダルは

タカ

コンドル

トラ

チーター

カマキリ

ウ シ ゴ バ
ナ ヤ リ ッ
ギ チ ラ タ

第34話 模擬戦（後書き）

感想と質問を待っています。

番外編 クリスマスとパーティーと準備（前書き）

あらすじ

クリスマスを目前に迫った翔夜達、そんな時になのはがやってきた。

番外編 クリスマスとパーティーと準備

海鳴市 真導写真館

「「孤児院でクリスマスパーティーをやる!？」」
「そうなの」

真導写真館ではこたつに入っていた翔夜と雄司がなのはから孤児院でクリスマスパーティーをやる事を聞いていた。

「何で孤児院でクリスマスパーティー何だ？」

翔夜はなのはに尋ねる。

「和樹君が住んでいた孤児院で毎年クリスマスパーティーをやるんだけど、孤児院の先生達だけじゃ大変だから。」

なのはは翔夜と雄司に事情を説明する。

「俺達に手伝って欲しい訳か？」

「うん、二人共手伝ってくれる？」

なのはの上目遣いしながらの頼みに翔夜は…………

「良いぜ／＼／＼ 雄司手伝うよな!？」

速攻で手伝う事を決めた翔夜は雄司に手伝うよう言うが。

「何で、俺が手伝うんだ＼……………いいえ、手伝います、手伝います」

から、ディケイドライバーをしまつてくれよ!!」

雄司は断ろうとするが、怒りのオーラを纏った翔夜がディケイドライバーを腰に着け、カードを装填するのを見た雄司は手伝いをする事を決める。

「ありがとう、翔夜、雄司君!」

なのはは翔夜と雄司にお礼を言う。

海鳴市 キャッスルドラン 王の間

その頃、キャッスルドランでは紅牙がすずかとアリサから翔夜達同様に孤児院でクリスマスパーティーをやる事を聞いていた。

「ところで、クリスマスパーティーで何かやる?」

紅牙はすずかに尋ねる。

「黒月君にバイオリンを弾いて欲しいんだけど?」

「駄目かな?」

アリサとすずかは紅牙に頼むと。

「良いよ、僕で良ければ。」

紅牙は二人の頼みを軽く承諾する。

海鳴市 カフェ・ミックスホープ

その頃、健太郎と健太郎の姉（沢田 愛里）と一緒に住んでいるカフェ・ミックスホープでは健太郎とはやてがクリスマスパーティーの話をしていた。

「健太郎、クリスマスパーティーの日にモモタロス達はとうするん？」

はやては健太郎に尋ねる。

「モモタロス達もグリードと一緒に手伝ってくれるみたい。」

健太郎はモモタロス達がアंक達グリードと一緒にクリスマスパーティーを手伝ってくれるのをはやてに伝える。

「大丈夫なん、アंक達は人間の姿でやるから良いけど、モモタロス達とかは人間になれないやん。」

はやては心配をするが。

「大丈夫、モモタロス達は着ぐるみを着て、ハナさんが見張るから。」

「それなら大丈夫やな。」

健太郎の言葉にはやては安心する。

海鳴市 ライダー隊 作戦司令室

「それで、君達はこの俺の状況を見て、そのクリスマスパーティーの手伝いをしろと言うんだな。」

「前園さん!!」

「お願いします!」

ライダー隊の作戦司令室ではデスクで書類を書いていた前園に和樹とフェイトがクリスマスパーティーの手伝いを頼んでいた。

「この状況を見て無理に決まっているだろう!!!!!!!!!!」

前園はそう叫ぶと前園のデスクの後ろには大量の書類が溜まっていた。

「前園さん、この書類って?」

翔夜は前園に尋ねる。

「隊長達が出張の間、俺が隊長達の書類をやるんだが、あの人達の書類が多いせいで、いつの間にかこんなに溜まっているんだああああ!!!!!!!!!!」

前園の絶叫が作戦司令室に響く。

「そう言えば、隊長達は今、どの世界に居るんですか?」

フェイトは前園に尋ねる。

「今は龍騎の世界に居るらしい。」

前園はそう答えると書類を書いていると。

「メリークリスマス！！ 継承者と魔法少女達！！！」

突然、前園のデスクのディスプレイに鴻上が写る。

「鴻上さん！！」

鴻上に驚く和樹。

「話は聞かせて貰ったよ、前園君、彼等に協力したまえ！！」
「しかし会長、自分もライダー隊の職務がありM」 スポンサー命令だよ、前園君。」「……………解りました。」

前園は手伝わないと言うが、鴻上の権限で手伝う事になった。

（前園さん）

（何か、僕達のせいでゴメンナサイ。）

前園に同情するフェイトと和樹。

「それから、クリスマスパーティーに必要なケーキは私が用意しよう！！」

鴻上はクリスマスケーキを和樹達が居る世界に送ると言う。

「「鴻上さん、ありがとうございます！」」

フェイトと和樹は鴻上にお礼を言う。

ショッカー帝国 秘密基地

「ムースファンガイア、ムースオルフェノク、クリスマスの日に継承者達を抹殺するんだ。」

とある世界ではショッカー帝国の秘密基地で鳴滝がムースオルフェノクとムースファンガイアに継承者達の抹殺を命じていた。

「ついでにコイツ等を連れていけ。」

鳴滝はそう言うと、鳴滝の後ろから仮面ライダー1号や2号に似た怪人が三体現れる。

クリスマスパーティーとコスプレと大バトルに続く……………

番外編 クリスマスパーティーとコスプレと大バトル

今日は12月24日、クリスマス・イヴ

海鳴市 夢乃孤児院

「「「メリー、クリスマス！」」」
「「「メリー、クリスマス！！！」」」

海鳴市にある夢乃孤児院ではなのは、はやて、フェイトの三人がサ
ンタのコスプレをして孤児院の子供達と乾杯の挨拶をする。

「メリー、クリスマス！」

「「「メリー、クリスマス！」」」

「何で俺だけトナカイのコスプレ何だ!？」

なのは達同様にサンタのコスプレをした翔夜とサンタの帽子を被っ
た和樹、健太郎、紅牙の三人、一人だけトナカイのコスプレをした
雄司は叫んでいた。

「アンタはまだ良いでしょう。」

「前園さん何か、クリスマス用のコスプレが無いから、何時ものラ
イダー隊の隊服なんだよ。」

「ハイ」

紅牙達同様にサンタの帽子を被ったアリサとすずかの言葉で雄司は
黙った。

（正直、コスプレの方が辛いと思うが。）

子供達にジュースを渡していた前園はコスプレをしないで良かった
と思っていた。

「何で着ぐるみ何だよ!!」

「先輩の姿が怖いからね。」

「ほら、チキンやで。」

「食べて、食べて!」

虎の着ぐるみを着たモモタロス、犬の着ぐるみを着たウラタロス、
熊の着ぐるみを着たキンタロス、猫の着ぐるみを着たリュウタロス
はデンライナーのオーナーが用意したローストチキンを子供達に渡
していた。

「あんた達、サボたらお仕置きだからね!!」

サンタの帽子を被ったハナはイメージズを監視していた。

「どんどん食べてね。」

「ケーキ、あげる。」

（何でこんな事になるんだ?）

（ウヴァ、メズールに聞こえるよ!）

人間態の姿で鴻上が用意したケーキを子供達に配るメズール、ガメ
ル、メズールの命令で手伝っていたウヴァとカザリは子供達に渋々
ケーキを配っていた。

「くだらんな。」

アंकはアイスを食べながら子供達を見ていると。

「見つけたぞ、継承者達!!」

孤児院のグラントに灰色のオーロラが現れるとムースファンガイアとムースオルフェノク、数十体のショッカー戦闘員に

「あれは？」

「仮面ライダー!？」

仮面ライダー1号に似た怪人、ショッカーライダーが三体出現する。

「違う、我々はショッカーライダー!」

「1号や2号より強いライダーだ!」

ショッカーライダーは翔夜達に名乗る。

「つまり、1号や2号の偽物って訳か。」

「クリスマスを滅茶苦茶にしゃがって!!」

翔夜、雄司、継承者達はグラントに出ようとするが。

「ちよつと翔夜!？」

「子供達が見ているよ!」

なのはとフェイトは継承者達を止めるが。

「大丈夫です、フェイトさん!」

「それより、子供達をお願いします。」

「モモタロス、いくよ!」

和樹、紅牙、健太郎はそう言うつとグランドに出る。

「なのは、俺達がグランドに出たら………」

「解った、任せて!」

翔夜はなのはにある提案を話す。

「出てこい、継承者!!」

「さもないと、皆殺しだ!!」

ムースオルフェノクとムースファンガイアは叫んでいると。

「逃げるつもりは無いぜ!!」

「むしろ、相手になってやる!!」

ムースファンガイア達の前に左から雄司、紅牙、翔夜、和樹、M健太郎の順番で現れる。

「お兄ちゃん達、大丈夫かな?」

「あの怪人達、怖いし強そうだよ！」

院内に避難した子供達は窓から翔夜達を見ていると。

「ちょっとゴメンね。」

「すぐに終わるからね。」

突然アリサやすずかが窓のカーテンを閉める。

「みんな、これからお兄さん達が正義の味方と呼ぶよ！」

「みんなも正義の味方の名前を呼ぼうか？」

「みんなで仮面ライダーって叫んでね。」

フェイト、はやて、なのはの順番で喋ると子供達は

「「「仮面ライダー！！！」」」

子供達が仮面ライダーの名前を叫ぶ。

「みんな、いくぞ！！」

「キバット！！！」

『よっしゃ、ド派手にキバっていくぜ！！！』

翔夜の合図と同時に継承者達はそれぞれの変身アイテムを取り出す。

「「「「変身！！！」」」」

『ガブリ！！！』

「SWORD FORM」

「タカ・トラ・バツタ、タ・ト・バ、タ・ト・バ、タトバ!!」

「KAMEN - RIDE..... DECADE STRIKE」

すずかとアリサが窓を開とグランドには、左からクウガM、キバK、
ディケイドS、オーズ、電王Sが立っていた。

「あの人達って、最近僕達の街を助けているよね？」

「本当に来てくれた!!」

「頑張れ、仮面ライダー!!」

仮面ライダーの登場に子供達は喜んでいた。

「仮面ライダー、ディケイド!!」

「仮面ライダー.....クウガ!!」

「仮面ライダーキバ!!」

「仮面ライダー、電王!!」

「仮面ライダー...オーズ!!」

ディケイドS達は名乗りながらそれぞれの武器を構える。

「戦闘員!!」

「ショッカーライダー!!」

「「やれ!!」」

ムースファンガイアとムースオルフェノクの合図と共に怪人達はライダー達に襲いかかる。

「いくぜ、いくぜ!!」

電王Sを先頭にライダー達も怪人達に立ち向かう。

「頑張れ、仮面ライダー!!」

「いけ、仮面ライダー!!」

「怪人なんかに負けるな!!」

子供達はライダー達を応援していた。

「はあっ!!」

「ぐっ!!」

オーズはトラクロードムースオルフェノクを圧していく。

「ハッ!!」

「ふん!!」

デイクイドSのライドブッカー ソードモードとムースファンガイアの剣がぶつかり合う。

「喰らえ!!」

二体のショッカーライダーは指先から弾丸を電王S、キバKに発射する。

「
「
＜
っ
！！
「
「

キバKはザンバットソードで電王Sはデンガッシャー
ソードモードで弾丸を防ぐ。

「はっ!!」

「がっ！！」

もう一体のショッカーライダーは短剣でクウガMを切り裂く。

「**今だ！！**」

「！！！！」

シヨツカーライダーの合図と共にシヨツカー戦闘員達は孤児院の中に入るうとするが。

「――！！！！」

突然、シヨッカー戦闘員達に火炎弾が命中する。

「面白そうだな。」

「僕達も混ぜてくれるかな。」

「行くよ、ガメル！」

「俺、子供達、守る！」

「言うておくが、俺はさっさとアイスを食べたいからな!!」

火炎弾が放たれた方向には怪人の姿になった、ウヴァ、カザリ、ガメル、メズール、アंकがショットカー戦闘員に立ち向かう。

「「「おのれええ!!」「」」

ショッカーライダー達はアंक達に弾丸を放とうとするが。

「えーい!!」

「があっ!!」

数発の弾丸がショッカーライダー達に命中する。

「だいぶ、面白くなっているね。」

「俺達も行くからな!!」

「答えは聞いてない!」

弾丸が放たれた方向にはそれぞれの武器を構えたウラタロス、キンタロス、リュウタロスがショッカー戦闘員達に立ち向かう。

「俺達もいくぜ!!」

ディケイドSは一枚のカードをディケイドライバーに装填する。

「FINAL - FORM - RIDE..... KU、KU、KUUGA」

「翔夜、そのカード..... やっぱりコレか!!」

クウガMはディケイドSが取り出したカードを見て焦るが、その前にクウガMはクウガゴウラムに変形する。

「文句は無しだからな!!」

「翔夜、後で覚えているよ!!」

デイクイドSは一枚のカードを取り出し、クウガゴウラムはムースファンガイアに体当たりして、そのまま顎でムースファンガイアを捕らえ空中に昇っていく。

「どすこい!!」

「ふん!!」

一体目のショッカーライダーに向かってキンタロスは突っ張り、ガメルはパンチでショッカーライダーを吹っ飛ばすと。

「トドメよ!!」

「があっ!!」

メズールの水流をショッカーライダーを貫き、ショッカーライダーは爆発する。

「いくよ、猫さん!!」

「カザリだよ!!」

リュウタロスとカザリは素早い動きで二体目のショッカーライダーを翻弄しリュウタロスはリュウボルバーを取り出しショッカーライダーに向けて弾丸を放つ。

「ぐっ!!」

弾丸を喰らいショッカーライダーは怯むと。

「そろそろ、決めようか！」

「ぐあっ!!」

ショッカーライダーが怯んだ隙に力ザリは鉤爪でショッカーライダーを切り裂き、ショッカーライダーは爆発する。

「決めるよ！」

「どうでも良いから、早く終わらせるぞ!!」

「お前は相変わらずだな、アंक!!」

ウラタロス、アंक、ウヴァは三体目のショッカーライダーと対峙していた。

「ハッ!!」

「喰らえ!!」

アंकは火炎弾、ウヴァは雷撃をショッカーライダーに放ち、ショッカーライダーは二人の攻撃で圧されると。

「はああっ!!」

「ショッカー帝国、万歳!!」

ウラタロスはウラタロッドでショッカーライダーを切り裂き、ショッカーライダーは万歳するとそのまま爆発する。

電王Sはデンガッシャーを構え、ライダーパスをデンオウベルトにセタツチする。

「FULL CHARGE」

「俺達の必殺技!!」

「はあっ!!」

電王Sの声と共にザンバットソードを持ったキバKとメダジャリバーを持ったオーズはムースオルフェノクに向かって走り。

「ハッ!!」

「せいや!!」

そのままムースオルフェノクを斬りつけ。

「いくぜ、いくぜ!!」

「ぐああ!!」

電王Sはデンガッシャーでムースオルフェノクを切りまくる。

「クリスマスバージョン!!」

「ぐああっ!!」

電王Sの必殺技、エクストリームスラッシュが決まると、ムースオルフェノクを斬った所がクリスマスツリーの形になると、ムースオルフェノクは爆発する。

「FINAL - ATTACK - RIDE..... KU、KU、KUU
GA」

ディケイドSは一枚のカードをディケイドライバーに装填すると、
クウガゴウラムはムースファンガイアを顎で挟みながらもディケイ
ドSに向かって降下し、ディケイドはムースファンガイアに向かっ
てキックを放つ。

「はあああつー!!」

「おのれえええー!!」

ディケイドアサルトが決まり、ムースファンガイアは爆発する。

「「「やったー!!」」」

「仮面ライダー、凄い!!」

「一緒に戦っていた怪人達も格好いい!!」

子供達はライダー達やアंक達の勝利に喜んでいた。

さてと、クリスマスパーティーを再開しようか？」

「そつやな。」

「僕、まだクリスマスを楽しみたい。」

ウラタロス、キンタロス、リュウタロスは急いで孤児院に戻る。

「俺達も戻るか？」

「子供達も待っているし。」

「メズール、行こう。」

「そうだね、ガメル。」

「さて、アイス食べよう。」

ウヴァ、カザリ、ガメル、メズール、アंकは子供達に見られないように人間の姿に戻るとウラタロス達の後を追う。

（俺達も行こうか、モモタロス？）

「そうだな。」

「クリスマスパーティーはこれからだしね。」

電王Sとオーズは子供達に見られないように変身を解き孤児院に戻る。

（雄司君と翔夜君、何処まで行っただ？）

キバKは周りを見渡しながらいけいどSとクウガゴウラムを捜すが、二人は居なかった。

「では、再びメリークリスマス!!」

「メリークリスマス!!!」

ショッカー帝国の怪人達を倒した和樹達は遅れてきたヴォルケンリッターの面々や孤児院の子供達と共にクリスマスパーティーを再開していた。

ライダー隊 格納庫

「翔夜、本当にやるつもりか？」

「せっかくのクリスマスだ、子供達を喜ばせるぞ。」

ライダー隊の格納庫ではクウガゴウラムとディケイドSが何かの準備をしていた。

夢乃孤児院

その頃、夢乃孤児院ではモモタロスが着ぐるみを着忘れて子供達を泣かせたり、アンクとヴィータがアイスの奪い合いを始めたたり、シグナムがウヴァと真剣勝負を始めたたり、カザリとリュウタロスが子供達を巻き込んでダンス勝負を始めたしたりしたが。

「「アンタ達、いい加減にしなさい！！」」

「「「「ハイ……orz」」」」

メズールとハナの制裁で怪人達は大人になる。

「シグナムとヴィータもやで。」

「申し訳ない、主はやて。」

「ごめん、はやて。」

はやてもシグナムとヴィータに説教を始めていた。

数分後

紅牙のバイオリンのライブが始まった。

「紅牙君の演奏、癒されるね。」

「そうやな、すずかちゃんが好きになるのも解るわ。」

「はやてちゃん／＼／＼／＼／」

フェイト、はやて、すずかは紅牙の演奏を聞きながら話をしていた。

「偶にはこうやって、楽しむのも良いですね。」

「そうだね、子供達を見ていると絶対にシヨッカー帝国からこの世界を守らないといけないと思うよ。」

健太郎と和樹はジュースを飲みながら子供達の幸せな顔を見て決意を新たにしている。

「翔夜に雄司君、遅いね。」

「あの二人、何しているんだろう？」

なのはとアリサは翔夜と雄司の心配をしていると。

「外に仮面ライダーとさっきのクワガタが居る！！」

ひとりの男の子が外を見て驚いていた。

「『えっ！？』」

（（もしかして！？））

男の子の言葉に全員外を見ると。

「メリークリスマス！！」

（翔夜、あまり動くとバランスが崩れて落ちる！！）

プレゼント袋を持ったディケイドSがクウガゴウラムが引っ張るソリに乗って空を飛んでいた。

（（（翔夜君に雄司君！？）））

（あの二人、何しているの！？）

（もしかして、サンタクロースのつもり？）

ディケイドS達に驚く面々、アリサは二人にツツコミをいれ、なのははサンタクロースのつもりだと思っていた。

「メリークリスマス！！」

「『メリークリスマス！！』」

ディケイドSはプレゼント袋を持ちながら子供達に挨拶する。

「仮面ライダーサンタからみんなにプレゼントだ!!」

ディケイドSはそう言うのとプレゼント袋からプレゼントを取り出し子供達にプレゼントを渡す。

「もしかして、二人が居なかったのはこの為だったのかな？」

「そうかも知れないね。」

アリサとすずかは二人が居なくなつた訳に納得していた。

「それより、あのプレゼントどうしたんだろう？」

紅牙はディケイドSが配っていたプレゼントに疑問を感じていると。

「怪人達を倒した後、前園さんからの連絡で鴻上会長とデンライナーのオーナーが子供達に渡してくれてあのプレゼントを用意したんだって。」

クウガゴウラムからクウガMの姿に戻りそのまま変身を解いた雄司が紅牙達に説明する。

（（鴻上さん、ケーキ以外にも用意していたんだ!!））

（（オーナーも、いつの間に!!））

鴻上とオーナーのサプライズに驚く面々。

彼らの不思議なクリスマス。
色々な事が起こった継承者と魔法少女のクリスマスはこれにて終わり。

M
e
r
r
y
X
m
a
s

番外編 クリスマスパーティーとコスプレと大バトル（後書き）

と言うわけで、仮面ライダー&リリカルなのは-継承者と魔法少女-のクリスマスストーリーが終わりましたが、いかがでしたでしょうか？

次回もまた番外編をやる予定です。

それでは、メリークリスマス！！

感想と質問を待っています。

番外編 大晦日と継承者と魔法少女（前書き）

「今・年、最・後・の・投・稿」 タ・ト・バ風に

雄司「今のは!？」

翔夜「気にするな。」

和樹「いや、気になるよ!!」

アंक「今の歌は気にするな!!!!」

番外編 大晦日と継承者と魔法少女

今日は12月31日、大晦日

海鳴市 真導写真館

「今年も後ちよつとで終わるのか。」
「あつという間だね。」

真導写真館では翔夜となのはがコタツに入って暖まっていた。

「翔夜、栄市郎さんとナツミちゃんは？」

なのはは翔夜に尋ねる。

「ナツミは友達の家泊まりに行つて、じいさんならライダー隊の司令官達と温泉に行っているよ、それで俺が留守番している訳。」

翔夜はそう言つとミカンを食べる。

「そうなんだ。」

「それより、何で居るんだ？」

翔夜はなのはに尋ねる。

「居たらダメ？」

上目遣いで翔夜に尋ねるなのは。

「別に良いけど／＼／＼／＼（だから、その目は反則だろう！！）」

翔夜はなのはの顔を見て顔を真っ赤にする。

「そう言えば、雄司君は？」

なのはは翔夜に尋ねる。

「雄司なら今頃、アリサの所で執事をやっているだろう。」

翔夜はそう言うとお茶を飲む。

海鳴市 市街地

「次はあの店だね。」

「まだ買うのかよ！！」

市街地ではアリサと大量の荷物を持った執事服を着た雄司が歩いていた。

「この後、紅牙君の家で忘年会をやるんだから。」

「だけど、コレは買いすぎだろう！！！！」

雄司は大量の荷物をアリサに見せながら叫ぶ。

「別に良いでしょう、バカ雄司!!」

「バカは無いだろう、バカは!!」

アリサと雄司は口喧嘩をしていると。

「喧嘩している場合じゃないね、早く買い物を済ませましょう。」

アリサはそう言うのと近くの店に入っていく。

「オイ、言い出したのはお前だろう!!」

雄司はアリサの後を追いかける。

海鳴市 キャッスルドラム

「紅牙君、書斎の掃除終わったよ。」

「こっちも王の間の掃除が終わったところだよ。」

「後は雄司君達が買い出しから帰ってくるだけだね。」

「それにしても、二人とも遅いな。」

すずかは雄司とアリサの心配をする。

「とりあえず、他のみんなを呼ぼうか？」

「そうだね。」

紅牙とすずかは他のみんなを呼ぼうとする。

海鳴市 海鳴神社

「うーん、やっぱり人が多いな。」

「そうだね。」

はやてと健太郎は海鳴神社で御参りに来ていた。

「健太郎君は何を願いましたん？」

はやては健太郎に尋ねる。

「この平和な時間が何時までも続いて欲しい、そうお願いしたよ。」

健太郎はそう言つと空を見る。

「私はみんなと一緒に居る時間が何時までも続いて欲しい、そうお願いしたよ。」

はやてはそう言つと健太郎の顔を見ないようにする。

（ダメや、健太郎と一緒にの時間が続いて欲しいなんて言えない／＼／＼／＼／）

はやては顔を赤くする。

「行こうか、はやてちゃん！」

健太郎はそう言つと神社から出て行く。

「待ってや、健太郎君！」

はやては健太郎の後を追いかける。

海鳴市 とある公園

「今年も後ちよつとだね。」

「そうだね、フェイトさん。」

公園ではフェイトがクリスマスに鴻上から貰ったカンドロイドで遊ぶ和樹を見ていた。

「和樹君、アंक達は？」

フェイトは和樹に尋ねる。

「アंक達なら、家の大掃除をしているよ。」

和樹はバッタカンを楽しそうにいじりながらフェイトの質問に答える。

「ウヴァ達も来月から僕の家に住む準備をしてるから、来年は大変だよ。」

和樹は苦笑いしながらトラカンを手に乗せる。

「そうだね。」

「でも、来年はそれ以上に楽しい一年になると思う。」

苦笑いするフェイトに和樹はタカカン飛ばしながらフェイトに言い放つ。

「そろそろ紅牙君達の所に行こうか？」

フェイトはそう言うと紅牙達が居るキャッスルドランに向かう。

「ちょっと、待ってくださいフェイトさん!!」

和樹は遊んでいたカンドロイドを回収するとフェイトの後を急いで追いかける。

「今年も終わりだね。」

海鳴市のとあるビルの屋上では零が夜空を見ながら珈琲を飲んでいた。

「来年は驚くだろうな……………翔夜!」

零は指鉄砲を夜空に向ける。

次回、『波乱を呼ぶ者』

感想と質問を待っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3402v/>

仮面ライダー&リリカルなのは - 継承者と魔法少女 -

2011年12月31日16時54分発行